

教授法が 大学を変える

2012 年度版

日本私立大学協会

教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

アクティブ・ラーニング を探求する

2011年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、改めて、グループワーク、PBL（プロジェクト型学習）、ソーシャルメディアを利用した授業、ワークショップ学習など、学生の学修を促進させる「アクティブ・ラーニング」が注目されている。

そこで、この事例を募集し、他大学でも活用できるユニークなものについては、日本高等教育開発協会の協力を得て教育学術新聞において紹介し、また事例を電子化し、各大学のFD活動の参考にして頂くため「教授法が大学を変える」を企画した。

第1回は26校の参加があり、ここにその事例を紹介する。

ピックアップ

●女子栄養大学 学生とつくりあげる授業

東京大学大学総合教育研究センター
特任准教授 栗田 佳代子

●金城学院大学 組織的・重層的なPBL

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部
共通学群（数学） 教授・ファカルティデベロッパー 榊原 暢久

●沖縄国際大学 良きリスナーを育てるプレゼンテーション

国立教育政策研究所 高等教育研究部
総括研究官 川島 啓二（日本高等教育開発協会会長）

（教育学術新聞2515号（平成25年2月27日付）掲載）

26大学一覧

朝日大学	グループでのインタビューを通じた「読む・書く・聞く・話す」能力の向上
足利工業大学	少人数のグループ間の討論や共同作業
植草学園大学	作品制作を中心とした実技演習
大阪経済法科大学	ICTを活用した協働学習
沖縄国際大学	「良き聞き手」としての評価も行うスピーチ指導
鎌倉女子大学	eポートフォリオを利用した学習やグループ検討、ロールプレイ等
関西国際大学	学生を共同体としたラーニングコミュニティの形成
関西福祉科学大学	共同作業、集団討論、ロールプレイ等演習形式中心の授業
京都薬科大学	議論・プロダクト作成・提示・意見交換会を通して優秀賞選出
金城学院大学	金城学院大学薬学部部屋瓦方式PBLT
淑徳大学	地域社会と連携したサービスラーニング等
女子栄養大学	ステップ・バイ・ステップで提示するオンライン並びに書籍教材
椋山女学園大学	4泊5日の合宿形式集中講義
鈴鹿医療科学大学	実証例を使用したPBL方式による自己学習教育
千葉工業大学	継続的なグループ学習を取り入れた授業
中京学院大学	データ処理を通じた問題発見方法の学習
筑波学院大学	大学版「調べ学習」と「体験学習」
常磐会学園大学	グループ討論・ロールプレイ等を通じた参加体験型の学び
常葉学園大学	インタビューを軸にした協働学習
函館大学	実地の問題を通じた体験を重視する授業
福岡工業大学	会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBL
文化学園大学	学内外の講師による異文化交流オムニバス授業
北海道薬科大学	Team Based Learningを導入した計算演習
松本大学	具体的な事実から遡って、理論的な枠組みに迫る「帰納的な教育手法」
名城大学	学生参加型授業、課題解決型学習
明治薬科大学	調べ、まとめ、発表を通じたプレゼンテーション

女子栄養大学

学生とつくりあげる授業

東京大学大学総合教育研究センター
特任准教授 栗田佳代子

どうすれば「アクティブ・ラーニング」を実現できるのかという観点から、ここで紹介する授業について、授業概要、教育理念、理念を実現させるための方法、そして、この方法の成果の順に、紹介を行いたい。

【授業概要】

女子栄養大学短期大学部は東京都の駒込にあり、卒業生の多くは栄養士として各地に巣立ってゆく。渋谷まさと教授が担当する「解剖生理学」は、4クラス各約50名、合計192名が履修する卒業必修科目かつ専門科目となっている。

【教育理念】

渋谷教授の教育理念は明確だ。「教育とは、教員がどれだけ書いたか、話したかではなく、学生がどれだけ書けるようになったか、話せるようになったか、である。」そして、そのための教師の役割とは、「学生の能動的な出力の機会を増やすだけではなく、出力しやすい環境を教育現場にいかにつくるか」である。

この「出力しやすい環境」の体現として、教材『一步一步学ぶ生命科学（人体）』（以下「一步一步」）がある。詳細は後述するが、この教材の成立・発展のプロセスにおける徹底した「学生目線」は渋谷教授の教育理念を支える重要な姿勢があらわれているといえよう。

また、学生の主体的学習に不可欠である「高いモチベーション」についてもきめ細やかな仕掛けが随所にみられる。例えば、『一步一步』によるステップ・バイ・ステップな学習、ならびにステップごとのチャレンジクイズは学生に、小さな出力での成功体験を積み重ねる多大な機会を提供している。「先生ごっこ」においても明確な課題を学生たちの力でこなせる。これらが学生の自信の醸成につながっている。

【方法】

上記理念の実現のために渋谷教授の展開する授業には、下記のような方法および工夫がみられる。

*eラーニング教材「一步一步」

(<http://life-science-edu.net/>)

本講義の根幹をなすこの教材は、オンラインおよび書籍という形態をとり、授業中にもスライドとして提示され、配布資料としても用いられる。本教材を特徴づける豊富なイラストは、生体内での呼吸の仕組みや病気の発生過程などの複雑な学習内容の理解を、端的な視覚的表現によって

助ける。生体内の動きには、移動や（生成、分解などの化学的）変化などがあり、これら

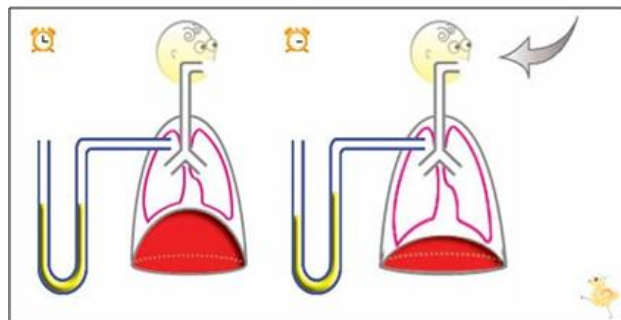


図 「一步一步」イラスト例：吸息時、横隔膜が短縮し、肺胞内圧が陰圧となり、空気が流入することだけを端的に提示。

が整理されなければ、生命科学を正しく理解した栄養士としての活動はあり得ないからである。提示はステップ・バイ・ステップであり、ある程度のステップのまとめもある。各ステップに静止画、音声と動画とでの説明、クイズがあり、学習を強力にサポートしている。

さらに特筆すべき点は、この教材の成立・改訂に学生が深く関わっている点である。イラストの多くは学生の手によるものであり、また、「この図ではわかりにくいから、こうして欲しい」という学生からのフィードバックが絶えず反映されて改訂されており、学生との共同の学びのなかで成長を続ける教材となっている。

* 予習させる仕組み

渋谷教授の授業は、教室に入る前から始まっている。学生はまず、『一步一步』のウェブサイトですべての予習内容を確認テストに合格することは、単位取得の必須条件にもなっている。これら教材は前述の特徴により特に低学力者が脱落することなく、楽しく学べる仕組みを備えているといえる。

* 先生ごっこ

授業中に行われる「先生ごっこ」は、学生が2~3人のグループをつくり、10分程度の間に先生によって説明されたイラストを交代で相手に教え合う時間である。最近注目されているPeer Instructionなど、「人に教える」という行為がもっとも学習を促進するといわれるが、まさにこれが実現されている。高学力の学生にとっては、将来栄養士として一般の方に「教える」という訓練となり、低学力の学



「先生ごっこ」の様子

生は相手から教わり、自ら教えるという努力を通して理解を進めることができる。また、一つ一つのステップを段階的に理解する「喜び」を味わい、小さな成功体験を積み重ねることが、モチベーションを高める駆動力にもなっている。

「先生ごっこ」のひとつときは、学生同士が教え合うとりわけ活気ある光景が教室に展開されている。

この「先生ごっこ」において留意されているのは、教えあうべき内容の指示がかなり明確である点であろう。渋谷先生の講義では、「今、教授が説明した1枚のイラストを学生が説明する」という指示であるため学生は「何をすべきかわからない」状態に陥ることがない。また、互いに教え合った後は、先生役の説明の出来映えについて簡単な評価シートに書き込まれる。

* テンポの良い講義構成

渋谷教授のある日の授業は次の通りである。

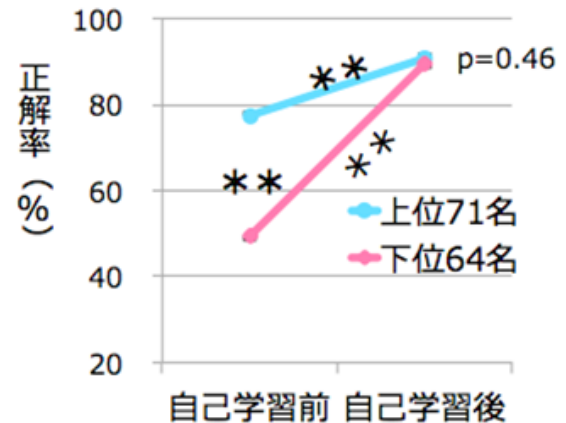
1. 前回の復習
2. トピック1の説明・先生ごっこ・補足説明
3. トピック2の説明・先生ごっこ・補足説明
4. トピック3の説明・先生ごっこ・補足説明
5. 前学期のテスト
6. 補足説明

上記からわかるように一つの内容が20分に満たない。実際に渋谷教授がしゃべっている時間は授業時間の半分にもならないであろう。

「聞く・話す・書く」がバランスよく構成され、授業がテンポよく進行するため、学生が飽きる・寝るといったことがなくクラス全体の雰囲気は終始活気に満ちている。

* 反復学習

この講義では、一つのトピックの学習が何度も反復されるよう設計されている。まず、予習段階で課題に取り組み予習内容についてのチェックテストをするため、少なくとも2回トピックにふれる。授業中には先生からの説明、先生ごっこ（生徒役）、先生ごっこ（先生役）において3回トピ



2011年度：基礎編自己学習による正解率の上昇（学習前の正解率上位、下位で分類） mean ± SE、** p<0.01、t検定

ックにふれる。そして、翌週にミニ確認テストとして、また、期末テスト時にも1回ふれる。さらには、前期の講義内容を数ヶ月経過後の後期の授業中に復習テストとして行う。これらを合計すると少なくとも8回はそのトピックにふれる機会がある。これだけの反復が設計されており、学習内容の定着率をかなり上昇させる構造となっている。

【成果】

* 低学力者に高い効果

一步一步の教材を用いた学習結果として、自己学習前・自己学習後では、特に低学力者の点数が著増していることがわかる。つまり、本教材および授業が特に低学力者に効果の高いことを示している。

* 脱落者を出さない授業

「一步一步」での勉強を放棄する学生は、長期欠席者などの例外を除き、ほとんど皆無である。解剖生理学の受講学生192名の全員が、13のミニ確認テストすべてに、授業前・放課後に再受験の機会を無数に与えることで期末までの15週の中で合格し単位を取得している。本講義の授業方針が効を奏しているといえるだろう。

* 学生の勉強に対する自信・意欲の醸成

「一步一步」を使うことで小さな成功を多く経験できるわけであり、そのことが自信とさらなる勉強に対する動機づけとなっている。この作用は、基礎学力の低い学生に、高い学生より有意に多くみられている。学生からは下記のようなコメントが寄せられている。

・イラストで1から説明されるから、わかってきて楽しい

・記憶容量が少なく記憶維持期間の短い私でもしっかり残りました

・視覚によるイメージのおかげで学習効率がよくとてもわかりやすかったです

・考えるときは「一步一步」のイラストを思い出して考えます

・理解して取り組めた

- ・とても親切だと思いました
- ・不安がなくなりました

おわりに

今回、紹介者は授業を実際に見学させていただいた。教室は活気に満ち、学生達が楽しく学んでいる姿があった。渋谷教授の『一步一步』という教材を中心とした「学生が能動的に出力する環境」が確かに構築されていた。渋谷教授はまた、この『一步一步』について「他校・他国・他分野領域にもこの教材スタイルを広めたい」と語っている。確かに、「アクティブ・ラーニング」を体現する一つの方法として普及すべきものであると感じた。

金城学院大学

組織的・重層的なPBL

芝浦工業大学教育イノベーション推進センター
工学部共通群（数学）教授・ファカルティデベロッパー
榊原 暢久

11月上旬、金城学院大学薬学部の「薬学PBL」という授業を拝見するため、名古屋の中心部から電車で20分ほどの大学キャンパスへ伺った。この科目は学部1年生（定員150名）の必修科目で、前期に「薬学PBL（1）」、後期に「薬学PBL（2）」が開講されている。この取り組みは極めて組織的・継続的・重層的であり、学部の育成したい学生像が強く反映している。以下で、その詳細を紹介しよう。

金城学院大学薬学部では、「高いコミュニケーション能力を備え、人のこころが分かる専門性の高い薬学ジェネラリストを育て、地域社会並びに医療現場で信頼される薬剤師として活躍する人材を育成する」ことを目標としている。その実現のため、1年次に「薬学PBL」、1～3年次に「薬学セミナー」、4年次に「CBL(case-based learning)」などの科目群が配置されており、そこで用いられている手法の1つが、具体的な疑問や課題、症例を基にした少人数・問題発見解決型教育（いわゆるPBLチュートリアル教育）である。高校までに受けてきた教育は受身であることが多く、入学後すぐに本格的なPBLを実施すると、学生側の対応能力の個人差が大きいため、積極的に参加する学生とそうでない学生との間で学習効果に格差やばらつきが大きくなる場合がある。そこで、大学入学初期にこの差を出さないようにするため、「薬学PBL」が導入科目として1年次に配置されている。この科目の到達目標は、これからの薬剤師に必要な能動的な学習能力や問題解決能力を身につけること、患者に寄り添うことの出来る薬剤師としてホスピタリティーマインドや高いヒューマンコミュニケーション能力を身につけること、である。医療の現場ではマニュアル型では解決できない様々な問題が発生するが、これからの薬剤師には、こうした問題に柔軟に対応し自らの力で問題を解決していく能力が強く要求される。このような背景ゆえに、「薬学PBL」以下の科目群が設定されたといっても過言ではない。

この取り組みが極めて組織的・重層的であることを如実に表しているのが、「金城学院薬学部屋根瓦方式PBLT」と名付けられた学習方法だろう。1年生を12～13人ずつのグループに分け、学科の教員が持ちまわりで各グループに毎回1名つく。さらに、その教員の「薬学セミナー」生である2年生4～5名がチューターとして参加する。1つの課題は2週間（1コマ90分×4回+授業外学習）で完結する。1年生12～13人は課題ごとに司会グループ1グループと調



査・発表グループ2グループに分かれる。教員およびそのセミナー生は課題ごとに変わるが、1年生12～13人ずつのグループは固定で、1年間に4回ほど組み替えがある。2年生が正課授業の一環として1年生のサポートにまわることで、2年生が1年生にとっての格好のロールモデルになっている。また、2年生にとってもこれは貴重な学習機会である。その意味で、この方法は極めて緻密に考えられたシステムである。

2週間の授業の流れは、

【1回目（テーマ設定）】司会グループの1年生が2年生の協力を得ながら司会を担当し、興味あるテーマについて意見交換しながら、テーマと調査内容・方法を決める。この過程で疑問点を明らかにし、調査内容を煮詰める。更に、調査事項をグループで文献やインターネットを使いながら調査する、

【2回目（調査・レジュメ作成）】1年生全員がPC教室に集まり、PCや書籍を使って調査、レジュメ作成を行う、

【3回目（グループ内発表）】2つの調査・発表グループが発表し、質疑応答を行う。発表後、2年生および教員からアドバイスを受ける。その後、発表および司会に関する評価シートと振り返りを提出する、

【4回目（全体報告会）】1年生全員がPC教室に集まり、各々の司会グループがグループ内発表の内容を報告する。教員が総括し、振り返りシートを記入する、

である。持ちまわりの教員および2年生は、1回目と3回

目の授業に参加する。2年生は必要に応じて1年生に適切なアドバイスをおくり、サポートすると共に、教員による1年生の評価にも参加する。これは人を客観的に見て評価する訓練に役立つとともに、複数の目で1年生の学習態度やレジュメをチェックすることにより、学習評価の妥当性や信頼性を向上させることにも繋がっている。4回の流れは1年生の動きに焦点が当てられているが、その裏で、指導教員による2年生への綿密な指導、教員間の指導の統一化、全体の流れのマニュアル化など、多大な労力がかけられていることが窺われる。拝見させて頂いたのは1回目のテーマ設定をする授業で、体に関する指定された枠内(例えば、呼吸器、消化器、循環器等)で疑問に思うこと、既に知っていることからテーマが絞り込まれていた。年度当初は自由設定のテーマが多いということだが、薬学部の学生らしいテーマ(例えば、サプリメント、化粧品と肌、アロマ等)が設定され、学生の学びに対する興味・関心が喚起されていることが窺われる。また、司会を担当する1年生の不慣れな様子に比べ、2年生のしっかりとした様子が印象深く、1年間の経験の差が如実に見て取れることに、導入科目としてのこの科目の当初の目的が概ね達成されていることを感じとる事ができたように思う。

ICTを使った学習支援策としては、ラーニングポータルとしての「Moodle」と、オンデマンドビデオ教材「ビジュラン」が用いられている。これらにより、授業外での自己学習が自宅からでもすることができる。また、「Moodle」にアップされたレジュメをお互いに評価したり、全体報告会の後に、ベストグループを選んでもらうための投票道具として利用することもできる。お互いに報告内容や説明の仕方を評価することで、自らの報告を検証することができる。

この学習方法を導入して6年が経過し、この教育法を受けて社会に飛び出した学生への評価は概ね良好である一方、いくつか課題も明らかになっているとのことだった。例えば、PBLに関するアンケート結果の解析から、同級生とのコミュニケーション能力に劣る学生は2年生や教員への依存心が大きい、自己学修時間が通常の座学中心の講義と比べて増えていないと申告する学生も2割弱いる、等である。とはいえ、これまで述べてきたように、この取り組みは極めて組織的・重層的である。他大学で活用できる取り組みとして紹介される事例の中には、開発者個人の多大な努力と頑張りによって依存する例が散見される。しかし、この取り組みは開発第1世代から第2世代へ順調に移行していることから、継続性も担保されているように感じた。自身の大学での取り組みもこうありたいと痛感し、よい事例を拝見できた喜びを感じつつ帰路についた。この場を借りて、金城学院大学薬学部の関係者の方々に感謝申し上げたい。

なお、この取り組みの更に詳しい情報については、「問題解決型学習ガイドブック 薬学教育に適したPBLチュートリアルを進め方」(社団法人日本薬学会 編、東京化学同人、2011)を参照願いたい。



沖縄国際大学

良きリスナーを育てるプレゼンテーション

国立教育政策研究所
 高等教育局研究部総括研究官
 日本高等教育開発協会会長 川島 啓二

学生のコミュニケーション能力の向上が求められる文脈で、プレゼンテーション教育が注目を集めている。テレビで放映されて話題を集めている**TED**（Technology Entertainment Design）の影響も相俟ってか、プレゼンテーション能力は、これからの社会を生き抜いていくための重要なスキルであると思われつつある。プレゼンテーションを構成する要素は、コンテンツ（内容）、スキル（技術）、ツール（道具）の3つであるとされるが、通常のプレゼンテーション授業は、この3つについてその修得と向上を、受講者が良き「書き手」「話し手」となれるように手ほどきを進めているものが多いと思われる。しかしながら、プレゼンテーション空間には、当然のことながら「聞き手」も存在し、その両者の相互作用やダイナミズムが、プレゼンテーション授業の構成において注目されることは今まであまりなかったのではないだろうか。

ここで紹介する沖縄国際大学経済学部・高崎理子講師のプレゼンテーション授業は、教室という教育空間における話し手と聞き手の相互関係の中で、その両者がどのような変容を果たすことができるのか、その可能性を特色ある授業運営とツールの活用によって、小さな達成感を丁寧に支えつつ、念入りに仕込まれたプロセスによって成果を確かなものに行っている好例である。

【授業の概要】

沖縄国際大学は、沖縄県宜野湾市にあり、在日米軍の普天間基地に文字通り隣接している。法学部、経済学部、産

業情報学部、国際文化学部の4学部を擁する人文社会系の総合大学で、同科目は、経済学部経済学科の1年生以上を対象とした前期のみ開講の選択科目であり、平成24年度の受講者数は55人である。

【教育に対する基本的な考え方】

「人前ではどうしても上がってしまう」という人が多いように、およそプレゼンテーションの成否にはメンタル面の要素が大きい。それは、学習に関わる最近の議論でよく語られる「学習へのモチベーション」といったものとは性格が異なる。本科目の到達目標は、「学生が受講前よりも気軽に文章を書き、楽しんでスピーチを行うことができるようになる、そして、自分の考えを的確にまとめ、他の人にわかりやすく伝えられるレベルまで成長することである。」とされており、「気軽に」「楽しんで」プレゼンテーションができるように、つまり学生にとって心理的なハードルをできるだけ下げようように留意されている。受講者の現状に対する深い理解と細やかな配慮、そしてそのような考え方に基づく授業手法と雰囲気づくりが、高崎講師の一貫した基本的スタンスである。

【授業の構成】

15回の授業の構成は、一般的なプレゼンテーション授業と同様、「書く」こと「話す」ことのスキル修得が軸となって展開される。具体的には、前半（第1～7回目）で書くこと、後半（第8～15回目）で話すことを訓練するという二部構成になっており、節目には、第7回目での自由

課題によるレポート完成、第12回目の各チーム対抗のグループ・プレゼン大会、そして14-15回目の期末テスト(個人による2分間スピーチ)という流れになっている。

ただ、授業の展開はさらに詳細な構成で、受講生が集団的に授業のテーマにコミットし、かつ、一つ一つの作業が、最終の個人プレゼンテーション(期末テスト)に収斂していくように仕組まれている。例えば、前半のレポート作成においては、プランの立て方、レポートの構成、テーマの決定、文法、文章構造、引用など、レポートを書き上げるための一つ一つの具体的な作業の連なりによって授業が展開していく。しかも、多くの作業にグループワークを取り入れて集団的に課題に取り組ませている。例えば、テーマの決定においては、自分がどのようなテーマでレポートを書こうと思っているか、その候補を5~6個書いてそれをグループ内で回覧し、聞いてみたい・興味が湧くテーマにはグループのメンバーに星印を付けてもらって、皆が興味を持つようなテーマを設定させるように工夫されている。

後半のプレゼンテーションにおいても、グループ内のそれぞれの役割を決めさせたり、発表日までの計画をグループで立てさせたりして、プレゼンテーションという極めて個人的な営みを集団的に取り組んでいく枠組みが構築・運用されている。

【授業の手法】

実際の授業を運営していく手法の中に、高崎講師の授業観、学生観がよく表れている。授業運営の大きな特徴としては、(1)「書くことは厳しく、話すことは優しく指導する」、(2)「良い話し手であるのと同じくらい、良い聞き手であることを評価する」、(3)「口頭による説明をした後は、受講生自身が実践する機会を設ける」の3つということで、それぞれの理由や状況は以下のように説明される。

(1) 文章は添削によって改善すべき点をくまなく指摘するのに対し、スピーチは長所に焦点を当てた指導を行う。あまり場数を踏んでいない話し手の神経は繊細であることが多く、短所を指摘されることで、かえって自信を喪失

し、せっかくの長所がしぼんでしまう危険性がある。こうした危険を避けるため、グループ・プレゼン大会終了後に全員が提出する「セルフ・チェックシート」(話すスピードやアイコンタクト等5項目を自己評価する)の余白には、各受講生の長所をできる限り指摘するよう心がけている。

(2) 良い聞き手は話し手の成長を促す影響力があるため、グループ・プレゼン大会と期末試験では、教室の略図が描かれた「グッド・リスナー調査票」を配布する。そして、自分のスピーチが終わった直後に「良い聞き手である」と感じたクラスメイトが教室のどのあたりに座っていたか、おおよその位置を○で囲んでもらう。指名された受講生は高く評価し、グループ・プレゼン大会で最も指名の多かったチームには「グッド・リスナー賞」が授与される。なお、グループ・プレゼン大会と期末テストには質疑応答コーナーがあり、優れた質問をした場合には加点事由となる。

(3) さらに、習った知識を受講生が実際に使いこなすことができるよう工夫している。第2回目の授業では礼状の基本的な書き方を教え、後日、受講生の礼状を添削し講評プリントを付けて返却する。合わせてモデル答案(2通)のコピーを配布し解説する。

また、各授業の後半は、様々なミニワークを実施して、スキルを実践的に身につけさせるとともに学生を飽きさせない工夫が施されている、例えば、敬語の使い方を習得したいという要望が多いため、「部長ゲーム」、つまり、部長役の学生1名を新入社員役の学生4、5名が囲んで5分程、会話をするようなものを実施している。部長役は「失礼であると感じた表現」、新入社員役は「敬語の使い方不安を感じたこと」を発表し、これに対して担当教員がアドバイスを行うという。

さらに、アイコンタクトについては、竹の塗箸を使用し極めてユニークな試みがなされている。スピーチ練習の際、竹塗箸(約22cm)を使用する。柄の部分(約8cm)が朱色の箸を一人1本ずつ配り、アイコンタクトの練習に活用する。期末試験の発表チームごとに円陣を組み、全員が柄の部分を上にして箸を立てる。そして、一人ずつ、自分のレポートの要約文をグループ内で発表する際、メンバーと目が合えば箸を下してもらうことができ、話し終える

までに全員の箸を倒すことができるか競争するというものである。

高崎講師の考案したこのように多様で、学生を飽きさせない手法は、特別モニターとしても認定されたテレビモニターとしての経験が影響しているかもしれないとのことである。つまり、テレビの構成を参考にして、授業の中ではいろいろなコーナーを構成したり、最初に説明と練習問題、そして、参加者が話し合ったり、実践したりするものを後に持ってくるという構成である。

【学習成果】

大半の学生が3部構成による論旨明快なレポートを作成し、中央後列を見ながら話すことができるようになった。なお、半数以上の学生が最後列左右の聴衆を見ることができ、最前列左右にもアイコンタクトを及ぼすことができるようになった学生もいるとのことである。また、2011年度後期実施の「学生による授業評価アンケート結果」によれば同科目の総合平均評点は4.0満点中「3.9」であった(全学の総合平均評点は3.5)。ある学生は「この授業は人の成長が見れる、というのも意見が飛び交い教師・生徒共に常に目標があるからだと感じました。私もこの授業を受け、自分も振り返り、また一段と成長できたと感じています。」と感想を述べている。この言葉の中に、この授業に満ちている、豊かな相互作用とそれを支える構造化された目標の存在が示されているのではないだろうか。

同科目は、その優れた成果のゆえに、2014年度からは必修科目になるとのことである。

演習 I

朝日大学

法学部 法学科

高梨 文彦

<p>科目の位置づけ</p>	<p>1年生全員を対象とした基礎的な演習科目。社会において専門的知識を活かして行動するための判断力・応用力を身につける、という DP を達成するための基礎的な学問的態度の涵養を目的とする。2年次以降の専門演習科目とは異なり、語学担当教員や教養科目担当教員も含め、原則として学部専任教員すべてが担当。具体的な内容は、上記目的に資する範囲内で、各教員に委ねられる（以下、高梨が担当する演習 I について記述する）。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>8人（一つのゼミあたり）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>大学における勉学の基本的な技術、心構え、マナーを身につける。コミュニケーション能力を向上させる。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>「読む・書く・聞く・話す」能力の向上に資する作業をさせる。その際、法学の基礎知識がなければ議論に参加できないような題材は敢えて避け、学生に社会への標準的な関心があれば対応できる範囲のものを選び、そのような関心を持つよう促してもいる。作業の意義・手順を理解させ、実行に移して成果物を提出させるには 1 コマ 90 分では足りないので、一つの作業項目は概ね 2~4 週単位で構成される。</p> <p>主な作業項目としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学の施設を知り、利用してみる ・所与の課題について、グループ単位で問題点を抽出し解決策を考案する ・教員にインタビューし、記事を作成してみる ・多人数で物事を決める場合の、意見集約システムを考案してみる ・大学周辺の地域が抱える問題について調査し、レジュメを用いて口頭で報告する ・ゼミ論文(5000 字程度)を作成する <p>などである。作業によっては、他のゼミと合同で実施することもある。成果物に対しては、教員による講評をする前に、必ず他の学生から質問やコメントを出させている。（今回は、上記のなかから「教員インタビュー」を紹介する）</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>特になし。</p> <p>ただし教員インタビューは、原則としてインタビュー教員の研究室に訪問して行なうこととしている。</p>

●基礎演習科目● グループでのインタビューを通じた「読む・書く・聞く・話す」能力の向上

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>期間中4コマ分を用いて、教員へのインタビュー記事を作成させる。この項目については、他のゼミとの合同で実施した。</p> <p>【1週目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューを行なうことの意義、インタビューをするにあたっての留意点の説明。 ・違うゼミの学生と二人一組となり、所与の簡単なテーマ（「夏休みの過ごし方」など）でインタビューを体験させる。その文章化(1000字程度)は翌週までの課題とする。 <p>【2週目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講生から数名を選び、課題としてあった前週のインタビューを口頭で発表させる。 ・その発表の成果も踏まえつつ、インタビューを文章化するにあたっての留意点を説明。 ・学生を同一ゼミ内の4名程度のチームに分け、どの教員にインタビューするか決定したのち、当該教員にアポイントメントを取らせる（自分のゼミ教員にインタビューすることはできない）。インタビュー・テーマはインタビュー教員に事前に提示してもらうか、学生に相談させる。 <p>【3週目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューの実施。概ね1時間を目安とする。その文章化(3000字程度)は翌週までの課題とする。 <p>【4週目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各チームに、課題としてあった前週のインタビューを口頭で発表させる。 ・学生に、自分のチーム以外で特に良かったチームを選ばせ、投票させる。 ・投票結果の発表とともに、インタビュー教員による講評を行なう。
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>まず、教員と交渉してアポイントメントを取る作業から入るので、畏まったメールの書き方・電話の掛け方など、社会人との応接マナーを疑似的に体感することができる。</p> <p>インタビュー自体からは、他者の話にしっかりと耳を傾け、そこから話題を拓けて有益な話を引き出していくという、コミュニケーションの基本の重要性を学ぶことができる。</p> <p>そしてインタビュー記事の作成・発表からは、現場にいなかった者に対して臨場感をもって情報を伝達することの難しさを知ることができる。</p> <p>二次的には、普段あまり接点のない教員と少人数で会話することにより、教員との距離を縮めることもできる。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー時の学生の態度について、インタビュー教員から報告してもらう。 ・成果物としてのインタビュー記事の出来。これについては、口頭発表を聴いていた学生による評点（自分のチームには投票できない）も加えられる。
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日ごろ接点の少ない教員とじっくり話をすることができて、講義のときとは違う側面が見えて興味深かった。 ・先生の話から繋げて次の話題を展開させるのは難しかったが、勉強になった。 ・アポを取るのに苦労したが、相手に時間を割いてもらうことの重み、難しさがわかった。 ・1週間で文章化するのは大変だった。
<p>学生の学習のあり方</p>	<p>本学法学部のDPたる「専門的知識を活かして行動するための判断力・応用力を身に</p>

●基礎演習科目● グループでのインタビューを通じた「読む・書く・聞く・話す」能力の向上

や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方
(教育哲学)

つける」ためには、学生生活の早い段階において「読む・書く・聞く・話す」能力を向上させることが必要であり、それが、いわゆる社会人基礎力の涵養にも結び付く。しかし法学という分野の特性上、専門的知識を付与するための講義科目を多く設定せざるを得ず、そうした「読む・書く・聞く・話す」能力を向上させるための授業に割ける時間は限定的である。

今回紹介した「演習Ⅰ」は、入学直後の1年生が受講する「基礎」演習科目であり、社会科学系学部で学ぶ学生としての基本的なスキルと心構えについて、教員が学生1人1人と対話しながら、また学生どうしが協力して作業しながら習得させられる、数少ない機会である。したがって「演習Ⅰ」で取り扱う内容は、専門分野たる法学である必要はなく、学生どうしの連携を容易にするという観点からは、むしろ法学以外の社会科学分野にも通底する教養的素材であるほうが好ましいだろう。

例えば、教員にインタビューを実施して記事にまとめる作業は、大学生としての心構えについて、ゼミ担当教員とは専門領域の異なる教員から直接話を聞く機会を提供するものである。と同時に、上記の「読む・書く・聞く・話す」能力すべてに関わるものであり、とりわけ「相手の話を聞く → 相手に話を訊く」ことなしには成立し得ない。この作業を通じ、他者の話を傾聴することを学生に経験させ、社会生活におけるコミュニケーションの重要性を感じ取らせる。さらに、日ごろ接点の少ない教員に対し、日時・場所を交渉して約束したうえでインタビューさせることで、目上の者に対する接し方のシミュレーションとしても機能するよう配慮したものである。また二次的には、学生どうしあるいは教員との距離感を縮める効果も見込まれる。

近時、中退率を如何に抑制するかが大学教育における課題として挙げられることがある。「基礎」演習科目を含む初年次教育は、基本的な学習スキルを付与して学習上の不安を軽減することに加え、大学は間口が広くて多様なバックボーンを持った人間が併存できる空間であること、そしてそれこそが大学で自立的・自律的に学問をすることの基盤を成していること等、大学での学びの意義を感じさせることをも目的として行なわれるべきだろう。

その他の特記事項

特に評価の高かったインタビュー記事については、加筆・訂正（およびインタビュー教員によるチェック）のうえ、法学部生・法学部教員に配布する学内誌に掲載している。掲載の可能性があることについては事前に学生に告知するので、インタビューに取り組む姿勢の向上に繋がっているものと思われる。

●演習科目● 少人数のグループ間の討論や共同作業

フレッシュマンゼミ

足利工業大学

工学部

専門科目担当教員、助教以上の教員 57 名

<p>科目の位置づけ</p>	<p>フレッシュマンゼミの意義と目的は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学に慣れ、学生、教職員と親しくなること ・自学自習の準備を始められること ・広く社会に目を向け理解を深める契機を得ること ・与えられた課題を解決する方法の糸口が示されること ・自己啓発の発端となること
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>295 名（1 グループを 6～7 名で実施する）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大学を理解し、大学での学習方法を学ぶ 2. 情報の収集・分析等について学ぶ 3. 国際社会・日本の実情を理解する 4. 世界最先端の技術を知る 5. ものづくりの楽しさを知る 6. 発表やコミュニケーション能力の向上を図る
<p>教育方法の特徴</p>	<p>①フレッシュマンゼミは 15 週という限られた時間ではあるが、上記の 5 項目を中心にシラバスの時間配分を目安として、個々の教員が有意義な運用を図る。第 6 項のコミュニケーション能力の醸成は前 5 項目を行う中で適宜実施する。</p> <p>②これまでに培われたゼミの成果、あるいは各教員の創意工夫を妨げるものではないので、平成 23 年度 1 年を試行期間として、まず実施し、その反省や運用の成果を持ち寄って、平成 24 年度に備える。</p> <p>③フレッシュマンゼミにおける成績評価は、レポート（課題への回答や感想文等と出席により、GPA にはカウントしない。</p> <p>④少人数教育が原則であり、個々のグループ間の討論や共同作業、スポーツ交流等は差し支えないが、数グループをまとめて複数の教員が代わるがわる担当すること等の集団指導は避ける。</p> <p>⑤eラーニングの教材を情報科学センターで準備しているので、活用する。1 年次生に対しては今年度からノートパソコンを購入させていることから、これを活用させる。ノートパソコン利用はシラバスの上で、どの単元で利用するかについては各教員の判断とする。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>教室はそれぞれ自由に設定できるが、少人数授業（6～7 名）を行なっているため概ね研究室で実施している。1 年生を対象としている授業のため、大学設備に慣れるために図書館や情報科学センターを利用する場合もある。</p>

●演習科目● 少人数のグループ間の討論や共同作業

特定の回の授業の
流れ・時間配分

- 例) ものづくり：形状記憶合金エンジンカー
- 第1回 全体ガイダンス（担当教員との顔合わせ等）
- 第2回 図書館ガイダンス
- 第3回 自己紹介、学生便覧読み合わせ
- 第4回 勉強の仕方、ノートのとり方
- 第5回 eラーニング（eカレッジID取得、閲覧）
- 第6回 インターネットを利用して興味のある問題について調査、まとめ
- 第7回 図書館ガイダンス
- 第8回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーについて（機構、機械要素、形状記憶合金の説明）
- 第9回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーの作製①
- 第10回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーの作製②
- 第11回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーの作製③
- 第12回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーの走行・計測
- 第13回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーについてのプレゼンテーション準備
- 第14回 ものづくり：形状記憶合金エンジンカーについてのプレゼンテーション
- 第15回 プレゼンテーションつづき および まとめ


授業で特に使用
しているツールと
その活用法

本年度のフレッシュマンゼミは、前半を大学生活・勉強に慣れるための導入的な内容、後半をものづくりに重点を置いた内容にわけて実施した。前半の導入では、大学が示した骨子に従った内容で構成し、グループ内の学生同士および教員とのコミュニケーションを重視してゼミを進めた。後半は担当者の専門分野である材料工学に関わる内容で「ものづくり」を実施することとし、「形状記憶合金エンジンカーの作製」を行った。機械の機構に関する内容を含むこと、およびゼミ予算の都合から、機電系のグループと同室で部品をシェアして実施した。

形状記憶合金エンジンカーは、形状記憶合金の可逆的な相変態（オーステナイト⇄マルテンサイト）を利用して動力源とするものである。大小2個のプーリーにリング状にして巻いた形記憶合金ワイヤーの一部を熱湯で暖めることにより得られる形状の復元力により、モーターなどを使用せずに車輪を回転させることができる。形状記憶合金エンジンカーの作製では、学生同士がコミュニケーションを取ることを重視し二人一組で行うものとした。市販のキットを使用せず、種々の構造要素（シャフトやアームなど）の入ったタミヤ模型の工作セットを用い、班毎に意見を出し合いながら、それぞれ自由に設計・製作してもらった。図1は作業の様子であるが、各班とも集中して取り組むことができ、オリジナリティのある形状記憶合金エンジンカーを作製することができた。走行・計測では、5メートルの距離の走行タイムを班対抗で競わせた。下記の図2、図3にその様子を示す。はじめ完走できていなかった班も調整を繰り返すうちに完走・走行タイムの短縮に成功し、ものづくりの難しさとともに達成感を感じることはできたようであった。

反省点としては、形状記憶合金エンジンカーの作製時間が予定より長くなったため、プレゼンテーションの準備時間が十分とれなかったことが挙げられる。

●演習科目● 少人数のグループ間の討論や共同作業

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)	<p>授業最終日におこなったフレッシュマンゼミ全体を通じてのアンケート調査結果から、今回の内容は学生に肯定的に受け入れてもらえたことがわかった。学生間・教員とのコミュニケーション、ものづくりの楽しさの体験、パワーポイントを用いたのプレゼンテーションなどを行うことができ、フレッシュマンゼミの目的は達成できたものと考えられる。</p>
学習成果の評価・測定の方法	<p>各担当教員が示したテーマについてのプレゼンテーション及びレポートによる評価をおこなった。</p>
本科目についての学生からの評価	<p>また、学生への授業についてのアンケート調査では、概ね好評であり、フレッシュマンゼミ終了後も担当教員と交流を持つ学生が多く見られる。</p>
学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)	<p>「ものづくりの楽しさを知る」</p> <p>現在至るところで使用されている言葉に「ものづくり」がある。工業技術の原点として、学生が座学とは異なった作業を通じて、「物を創る」楽しさを知ることが重要である。</p> <p>この点に関しては、各教員の専門分野の中から、学生が手を動かして作れる題材を探し、共同作業として演習を行うことが必要である。</p> <p>「自分の考えをまとめ、自分の意見として発表する」</p> <p>教育目標のコミュニケーション能力の向上に関わる課題である。自分の考えを率直に話せることは、大学のみならず社会での基礎能力であるため、出来る限り意見を発表する経験を設営する必要がある。ゼミの時間に3分間スピーチなどを行うことも重要である。</p>
授業風景	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1 形状記憶合金カーの作製の様子</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2 走行・計測の様子</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  <p>図3 形状記憶合金カーの走行試験</p> </div>

保育内容演習 I (図画工作)

植草学園大学

発達教育学部 発達支援教育学科
森高 光広

科目の位置づけ	<p>履修対象は、保育士・幼稚園教諭資格希望者を主としている。小学校教諭・特別支援学校教諭資格希望者も対象とする。1年次生で履修した「保育の表現技術(造形表現)Ⅰ、Ⅱ」で学んだ造形表現の基礎的な技能や一人ひとりの子どもに対応するための学びを活かして、より学生の個性や各自の工夫ができる題材を設定してある。表現の追求と試行錯誤を通して、子どもたちの造形表現や活動をより理解し、教育現場で特別な支援を必要とする子どもも含めて個々の子どもに具体的に支援や指導ができる実践力を培うことをねらいとしている。「保育内容演習Ⅰ(図画工作)」では、立体表現を主として扱い、「保育内容演習Ⅱ(図画工作)」では平面表現と総合的な表現の出来る選択題材を予定している。90分授業、15週で実施する。</p>
受講(登録)学生数	<p>53人</p>
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教育現場での造形表現活動(立体表現)についての支援のあり方について具体的な制作を通して学ぶ。 2. 子どもたちに適切な支援をするために、造形教育に関わる基本と展開についての理解を深める。 3. 造形表現で扱う様々な材料に親しみ、正しい用具の使い方・安全指導について習得するとともに、子どもたちの造形表現の広がりを支えられるように、具体的な支援の手立てを身につける。
教育方法の特徴	<p>作品制作を中心とした実技演習として行う。主な制作課題は、口の動くオリジナルパペット人形と動物をテーマにした陶芸作品である。作品制作とあわせて、子どもの視点を大切にした指導者の立場で考えるレポートを書かせる。パペット人形では各自の「想い」を込めてキャラクター設定を行い、オリジナルの人形制作をさせる。完成後は、子どもたちの前で上演している人形劇団員を特別講師として招き、人形の演じ方や人形を使った子どもとの関わりについて具体的な指導を受ける機会を設ける(本稿で紹介する内容がその時間にあたる)。制作を通して、表現活動に大切な「想い」を実感させ、支援を必要とする子どもも、必要としない子どもも含めて、個々のこどもの表現や工夫を支えるための手立てを考えさせる。</p>
教室空間の特徴	<p>美術造形演習室には、造形表現に適した特殊な机と椅子、各自の作品が保管できる棚、流し、プロジェクターを備えている。54名の活動が可能である。準備室には、各種の表現がより活用できる材料や用具、備品を常備している。</p>

●演習科目● 作品制作を中心とした実技演習

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>※7月6日 特別講師の指導による発表演習</p> <p>○講師(劇団M&B、他 計三名)紹介 2分</p> <p>○パペット人形による自己紹介～1人1分程度×50人(当日参加者) 50分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が自分の制作したパペット人形を使って演ずる。学生一人ひとりが、人形の自己紹介を演ずる。 ・事前に人形のキャラクター設定、シナリオを作成して、この日に初めて演ずる。 ・パペット人形の性格や特徴が観る者(子どもを想定)によく伝わるように、登場の仕方や台詞など各自工夫する。 <p>○講師による講評(以下概要) 13分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が制作した人形のクオリティーの高さがまず褒められた。(写真参照) ・演じ方のよい学生に関して、再演させてみて何がよかったか、全員で確認した。 ・登場のさせ方、台詞のしゃべり方などの重要性、間の使い方や人形の向きや視線の方向で印象が大きく変わることなどを再確認した。 ・子どもを引きつける手立てを具体的に考える大切さを再確認した。 ・質疑応答も行った。小道具について等の質問が出た。 <p>○人形劇実演 10分</p> <p>「おおかみぺこぺこ」(宮西達也著の同名絵本)をもとにした人形劇の実演を鑑賞した。普段子ども達の前で演じているベテランの演技者の声の出し方や効果音の使い方、人形たちの登場の仕方、小道具の大切さなど学生が目当たりして、大変感動したようである。声色の使い方や人形がどんな表情をし、どんな感情を持っているか直接感じ取ることが出来たと学生の感想にあった。</p> <p>○人形を操るための練習を紹介 5分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人形劇のワークショップでよく行われる人形を操るための練習の一つを紹介して貰い、4年次生の学生が代表して行う。「数字歌」にあわせて、棒状のウレタンを操って1から10までの数字にする内容である。(写真参照) <p>○まとめ 10分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポート作成(本時の学びの確認とまとめ)
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>ウレタンシート材(プロの使用しているものと同じウレタンシート材を問屋から直接購入している)。</p> <p>特殊接着剤(最適なものをプロから教わる)もウレタンシートの接着に効力を発揮した。</p> <p>以上のような材料の使用は、テレビの子ども番組などでよく目にする人形劇等の人形と同じ材料を使うということからも、学生の意欲化につながっている。</p>
<p>学習成果(学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>53人の学生が、それぞれの個性や工夫を活かした53通りのオリジナルの作品を制作することが出来た。学外実習などで制作時間が十分確保できなかった学生もいたが、一人も欠けることなく、全員が作品を完成させた。発表に間に合わせるため、徹夜続きや当日朝四時に完成した者も珍しくない。学生は主体的に取り組み、自身の人形を個性ある作品にしようと工夫を重ね、人形の膚や衣服などの素材や持ち物などこだわりを持って丁寧に制作した。年々男子も多くなっているが、人形の裁縫は初めてという者も無事に完成している。</p> <p>多少困難が予想される内容であっても、積極的に取り組み、各自の「想い」をもとに工夫を凝らし、最後まで粘り強く制作を続けることが出来た。</p>

●演習科目● 作品制作を中心とした実技演習

学生の取り組みからは、造形表現の基本である、「自らの工夫を見だし、自分なりの表現を意欲的に」行う姿が多々見られた。

そして、学生の制作後の感想からは、達成感や満足感が得られたことが伝わる。何よりも、人形を手にして実習やボランティアで子どもと少しでも早く触れあいたい、人形に対する子どもの反応を見たいという強い意欲が見られた。人形の制作の中でどのように子どもと接するかを考えさせたことや特別講師による授業の影響が大きいと思われる。

この制作に対する意欲や表現への工夫、追求は陶芸作品制作でも引き続きみられた。

学習成果の評価・ 測定の方法

人形の完成後の作品点だけではなく、アイデア・スケッチ、キャラクター設定票、簡易シナリオ、詳細シナリオ、制作後の振り返りと、それぞれの制作場面の中で各提出物をもとに学生の考えや工夫、努力を把握しつつ、演技の発表も含めた総合評価を行った。

その際、オリジナル性や工夫、丁寧さ(子どもたちの前で演じる以上、すぐ壊れるものではなく、何度も繰り返し演じたり、遊べたりできる丈夫さも必要なため)等も加味した。

受講学生による授業改善アンケートでは、15項目の質問に関して平均4.4点(5点満点)であった(IとIIを通年で行った昨年は4.6点)。評価のやや低い項目は、授業の進行速度についての適切性と課題の量(4.1点)だが、学外実習に参加する学生が14名含まれていることも影響している。高い項目は、教師の話し方が聞きやすい、教師が学生の質問や発言等に適切に対応した(4.6点)、授業によって、学習意欲が高まった(4.5点)等である。

以下、学生の感想から

- ・実際につくっていく中で、考えていたものよりもよい工夫が見つかり、つくるのが楽しくなった。完成したときに達成感を味わうことが出来た。
- ・自分のテーマにあった工夫を考え、楽しく制作することで、達成感と愛着が持てた。
- ・外部講師の特別授業で人形の動かし方や身振りの違いによって、見ているおもしろさが違った。話し方など工夫することがたくさんあることに気づいた。
- ・途中思い通りに出来ない不満が一杯でうまく出来ていないはずなのに、完成したら満足な気持ちになれた。こういう気持ちがとても大切なのだと感じた。
- ・最後に先生から「左右対称ではないゆがんだところが表情を豊かにしていてとてもいい」と言っていただいた。全ての工作は、ただきれいで上手なだけがよいのではないことを学んだ。一人の作品一つずつの個性が大切なのだと学んだ。
- ・つくる前は完成できるのかすごく不安だったが、「想いを込めて」つくっていくと、どんどん新しい考えが浮かんできた。制作を通して、その作品にどんな思いを込めて作り上げていくかが大切なのだと学び、そうしてできあがった作品は「その時」にしか作れない貴重なものと思った。
- ・計画通りに作り上げることが全てではなくて、つくっていくうちに「こうした方がいいかもしれない」とおもうことを工夫し、表現していくことが必要だと思った。子どもたちが何かを制作する時も、このようなイメージの広がりを大切にさせてあげたい。
- ・ものをつくるむずかしさ、大変さ、一つの人形を作るのにどれだけの手間と時間が

本科目についての学 生からの評価

●演習科目● 作品制作を中心とした実技演習

必要かを学んだ。そして、一つひとつ手づくりでだんだんできあがっていく楽しさ、おもしろさを学べた。だからこそ、完成した時の達成感と喜びが大きかった。

- ・パペットはつくって完成だけでなく、動かしてこそパペットであるということを受業や外部講師の特別授業で学び、子どもたちの前でパペットを実際に動かしたいと強く思った。
- ・つくる過程でも様々なことを学べたが、パペットに命を吹き込む大切さを知った。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方 (教育哲学)

学生の中には、過去の図画工作科や美術科の経験から苦手意識を持つ者もいる。得手不得手もあろうが、将来保育士や幼稚園教諭となる学生は、子どもたちの造形表現を支え、教える立場となることから逃れられない。造形表現に消極的な学生であっても、また、どんなに手先が器用で得意な学生であっても、子どもの視点を大切に考えることが出来なければよい指導者とはなれない。学生により充実した造形表現の経験をさせることは必要である。学生が意欲を持って、「想いを込めて」制作する経験をさせるために、オリジナルパペット人形と陶芸による制作の二つの題材を設定した。作品制作をしながら、学生が子どもの立場で考え、多くを学べるように手立てを考えた。

作品を制作させる際に、以下を留意させた。

- ①常に子どもの表現への「想い」を意識しながら制作すること
- ②自ら主体的に、意欲を持って創意工夫すること

学生が造形表現を通して、子どもの表現や考えを理解し、作品の完成後には自分なりの表現が出来たという達成感を得られる経験となるように、材料の特性を考えさせて各自の工夫を促した。指導にあたっては、学生の意図を汲み、その考えが活かせるように丁寧な対応を心がけた。教員としてそのような姿勢を示すことは、将来子どもに接する立場となる学生にとって、よりよい指針となり、自らがその立場となった時の参考となると考えている。

授業風景



外部講師による熱気あふれる特別演習風景 全て手づくりのオリジナル人形が完成!



一人ずつ人形の自己紹介を演ずる

歌にあわせて1, 2, 3...と数字にする練習

その他の特記事項

53名の学生に丁寧に対応するために、助手1名が授業の補佐をしている。被服を専門としており、制作時の形と形の縫合や人形の衣服や小物等の制作など、学生に的確なアドバイスをして貰い、大変効果的だった。また、前年度までの過去の学生作品の画像を見せたことは学生にとってよい刺激となっていた。

Economics Issues in English I

大阪経済法科大学

経済学部 経済学科

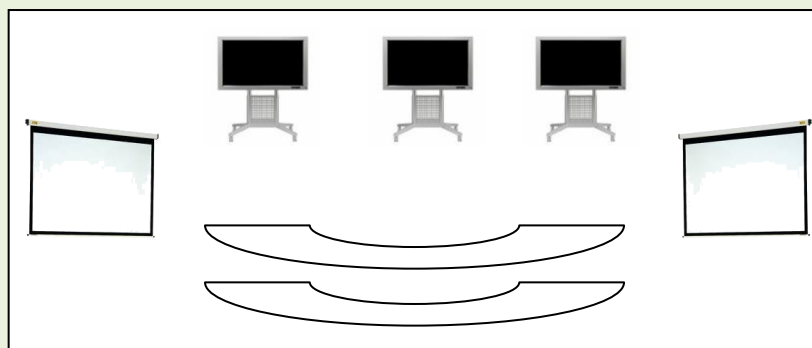
呉 志賢

科目の位置づけ	<p>本学は、教育目的に「広く知識を授け、深く専門の学芸を教授研究するとともに、豊かな人間性と国際感覚にあふれた独創的で実践力に富む人材を育成し、もって社会の発展と平和に貢献することを使命とする。」と掲げており、グローバル人材の育成を目指して、経済学部ではグローバル経済コースを設置しています。当該科目は、グローバル経済コースで育成することを目指す人材の、基本的な素養を身に着ける科目として位置づけられています。学生は、当該科目を受講した後に、英語を使用言語とする、より高度な専門的内容を取り扱う科目を受講することになります。</p>
受講（登録）学生数	<p>20名</p>
科目の到達目標	<p>基本的な学習目標として以下の項目を掲げています。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 経済と経営に関する基本的な英語の専門知識を身に着ける。 ② 経済と経営に関連する基本的な英語の文献を読んで概要を理解できる。 <p>加えて、授業内での取組を通して、以下の素養を身に着けることを到達目標として掲げています。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 主体的にものごとに取り組むことができる。 ② 他者と協働して問題解決を図ることができる。 ③ ICT (Information & Communication Technology) を利活用することができる。
教育方法の特徴	<p>授業における、教員と学生の双方向性を確保するとともに、学生の主体性と協働力を引き出す工夫がなされています。それを実現するためのツールとして、電子黒板やLMS (Learning Management System) をはじめとするさまざまなICTを活用しています。ICTは、学習目標である英語の専門知識を習得するための、教材や環境を提供します。また、ICTを用いることで、授業における双方向のやり取りを行えるとともに、最適な協働学習を行うための場を作り出すことができます。</p>
教室空間の特徴	<p>2012年度に開校した新キャンパスで、アクティブラーニングの実施が可能な教室を使用しています。教室には電子黒板機能を備えた大型液晶ディスプレイ3台、無線LAN経由でのワイヤレス画面投影が可能なプロジェクター2台が教室の左右に設置されています。後者のプロジェクターは、4分割×2の最大8台同時にPCから送信された画面を投影することができます。教室に併設されたキャビネットには常時PCが併設されており、アレンジフリーのデスクとチェアでICTを活用した多様な形態の授業やグループワークが可能です。収容定員は最大55名となっています。</p>

● 専門外国語科目 ● ICTを活用した協働学習

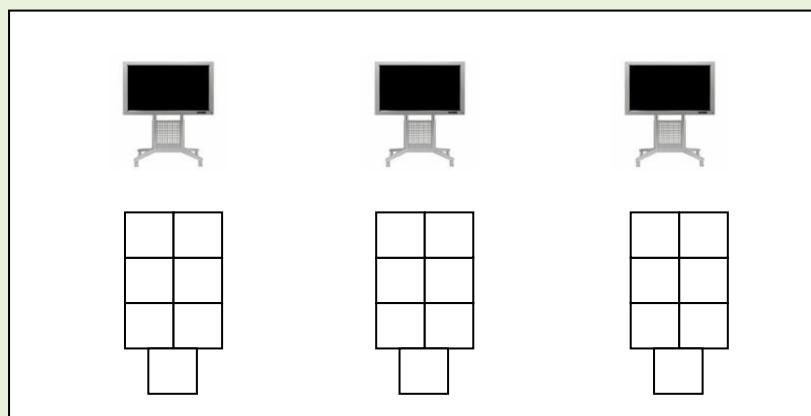
授業は3パートに分かれており、まず15分程度ウォーミングアップパートとして電子黒板を使用して、e-learning 英語学習コンテンツを用いた問答を行います。e-learning コンテンツは授業外学習の素材として、学生が事前に学習を行っています。

次に、インタラクティブレクチャーパートとして、30分ほど英語のドキュメンタリー映像を教材として、経済に関する学習を行います。このパートでは、事前課題として一度視聴した映像の、英語スクリプトを配布して、単語を調べて意味を把握してくる事を課しています。そして、各自が行ってきた課題をもとに、内容把握を行います。その際に5つの画面を利用して様々な情報を同時に表示しています。具体的には下図のように液晶ディスプレイには映画の映像とスクリプト、その日本語訳を表示させ、教室両サイドにあるプロジェクターで英単語や経済用語などの情報を提示しています。学生はそれぞれの画面を相互に参照しながら、映像に出てくる英語の訳を理解しつつ、経済用語自体の意味についても知識を修得していく。




特定の回の授業の 流れ・時間配分

最後に、グループワークパートとして、45分ほど協働学習に取り組めます。まず教室のレイアウトを変更して、下図のように6~7人のグループ単位に液晶ディスプレイを割り当てます。



画面上に英語文献を表示させ、電子黒板機能で画面書き込みなどを行いつつ、それぞれのグループで文章構造や単語を読み解き、文献の概要を検討していきます。グループ内では、個々の特性に応じて役割分担を行い、協働して物事に取り組むことで、相互の教え合いなどの効果が生まれます。授業外でのグループのコミュニケーションは、LMSの掲示板機能を用います。LMSによって、他グループの取組を把握することができると同時に、グループ間の公表も行うことができる。

● 専門外国語科目 ● ICTを活用した協働学習

<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>ICTの活用を考慮した授業運営を行いました。個々の学生がPCやスマートフォンなどの情報端末を利活用するとともに、ソーシャルメディアに相当する位置づけとしてLMSを用い、グループ間の情報共有やコミュニケーションを図るような誘因づくりをしました。ハード面では、電子黒板を用いて視覚的・動的要素を授業に取り入れるとともに、マルチディスプレイを駆使した多チャンネルの素材提供を行いました。また、授業外学習を促進するツールとして、e-learningのための英語学習コンテンツも活用しました。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>学生は、英語の基本的な経済・経営に関する文献を理解できるようになると同時に、主体性を身に着け、他者と協働して物事を成し遂げることができるようになりました。学生は、授業終了後も教室にそのまま残り、グループでの取組を継続していたことから、主体性を身に着けた一端を垣間見ることができます。加えて、ICTを活用して、情報分析したり、集団におけるコミュニケーションを図ることができるようになりました。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>学習成果の評価は、最終的に個々の受講生に、経済・経営に関する英文記事の要約を行う試験を課すことによって測定しました。最初の授業で、個々の学力を測るテストしており、そこからどれほどの力を身に着けたかも考慮しています。加えて、e-learningによる授業外学習の度合いや、毎授業における積極的な参加度も評価します。さらに、グループワークでの取組に対する、個々のコミットメントの度合いも評価に加えています。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>全学的に実施している、学生による授業評価アンケートでの定量的な評価を得ています(5段階評価で、平均4.5ポイント)。定性的には、経済・経営に関する知識と英語力が向上するとともに、さまざまな取組に対する積極性を身に着けることができたというコメントを得ています。また、グループワークをとおして、チームで一つのことを成し遂げる力やコミュニケーション力を向上させることができたという評価もいただいています。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>学生の主体性を引き出すとともに、物事を成し遂げるために他者と協働する方法論やマインドを、学生に身に着けさせることを主眼に置いて授業を運営しています。決められた授業時間の中で行えることには限りがあるので、学生の物事に対する考え方や行動特性に、影響を与えられるような取組を実施するように心がけています。授業は単なる知識伝授の場だけにとどめるのではなく、人間形成の過程の一部であるとして、学生と向き合うようにしています。</p>
<p>授業風景</p>	<p>5面ディスプレイを用いたインタラクティブレクチャーパート風景</p> 

●専門外国語科目● ICTを活用した協働学習

電子黒板を用いたグループワークパート風景

**その他の特記事項**

本学では、新設されたアクティブラーニング教室を用いて、当該授業の他にも実店舗運営を行う経営実践授業や、企業とのコラボレーション企画を行う PBL 演習など、多様なアクティブラーニングを実施する授業を展開しています。

プレゼンテーション

沖縄国際大学

経済学部経済学科

高崎理子

科目の位置づけ	学生が自らの意見を明確に筋道立てて説明する能力を向上させるために必要な科目として、1年次以上を対象に提供している。
受講（登録）学生数	55 人
科目の到達目標	本科目の到達目標は、学生が受講前よりも気軽に文章を書き、楽しんでスピーチを行うことができるようになる、そして、自分の考えを的確にまとめ、他の人にわかりやすく伝えられるレベルまで成長することである。
教育方法の特徴	<p>教育方法の特徴を述べるにあたり、本科目の概要を説明する。本科目は初級レベルの講座であり、前半（第1～7回目）で書くこと、後半（第8～15回目）で話すことを訓練するという二部構成になっている。第7回目に自由課題によるレポートを完成、第12回目に各チーム対抗のグループ・プレゼン大会（9チームが約5分間の発表を行い、クラス投票で優勝・準優勝・特別賞等が決まる。テーマは自由。1チーム6名程度。メンバーは、できるだけ学科・学年・性別の異なる学生から構成されるようクジで決定。）を実施した後、期末テスト（個人による2分間スピーチ）の準備に入るという流れになっている。</p> <p>教育方法の特徴としては、（1）「書くことは厳しく、話すことは優しく指導する」、（2）「良い話し手であるのと同じくらい、良い聞き手であることを評価する」、（3）「口頭による説明をした後は、受講生自身が実践する機会を設ける」の3つを挙げることができる。</p> <p>（1）文章は添削によって改善すべき点をくまなく指摘するのに対し、スピーチは長所に焦点を当てた指導を行う。あまり場数を踏んでいない話し手の神経は繊細であることが多く、短所を指摘されることで、かえって自信を喪失し、せっかくの長所がしぼんでしまう危険性がある。こうした危険を避けるため、グループ・プレゼン大会終了後に全員が提出する「セルフ・チェックシート」（話すスピードやアイコンタクト等5項目を自己評価する）の余白には、各受講生の長所をできる限り指摘するよう心がけている。</p> <p>（2）良い聞き手は話し手の成長を促す影響力があるため、グループ・プレゼン大会と期末試験では、教室の略図が描かれた「グッド・リスナー調査票」を配布する。そして、自分のスピーチが終わった直後に「良い聞き手である」と感じたクラスメイトが教室のどのあたりに座っていたか、おおよその位置を○で囲んでもらう。指名された受講生は高く評価し、グループ・プレゼン大会で最も指名の多かったチームには「グッド・リスナー賞」が授与される。なお、グループ・プレゼン大会と期末テストには質疑応答コーナーがあり、優れた質問をした場合には加点事由となる。</p> <p>（3）さらに、習った知識を受講生が実際に使いこなすことができるよう工夫して</p>

●選択科目● 「良き聞き手」としての評価も行うスピーチ指導

いる。第2回目の授業では礼状の基本的な書き方を教え、後日、受講生の礼状を添削し講評プリントを付けて返却する。合わせてモデル答案(2通)のコピーを配布し解説する。また、敬語の使い方を習得したいという要望が多いため、練習問題を解いた後、「部長ゲーム」を実施している。これは、部長役の学生1名を新入社員役の学生4,5名が囲んで5分程、会話をするというものである。部長役は「失礼であると感じた表現」、新入社員役は「敬語の使い方不安を感じたこと」を発表し、これに対して担当教員がアドバイスを行う。

教室空間の特徴

横長の比較的小さな教室である。収容人員は約55名。設備は黒板、教卓、マイク、テレビ、DVDプレーヤー。固定式の長机が6つずつ、3列配置されている(長机の数は合計18)。最後列の席と後ろの壁との間、両端の席と壁との間は、いずれも人が一人通れる程度。教壇に立つと、座っている人全員の顔がよく見える。狭い空間であるがゆえに、かえって教室全体に一体感を生む効果があると考えられる。

特定の回の授業の
流れ・時間配分

期末テスト直前の第13回目は、総まとめ的な回となっている。この日は、第7回目に作成したレポート(期末テストではこのレポートの内容を発表する)を添削した上で、チェックシート(18項目について評価し欄外にコメントを記入)を添付して返却する。

第13回目の授業の流れと時間配分は、(1)プレゼン大会の結果発表とクラスメイトからのコメント紹介、各受賞チームキャプテンによる挨拶:5分、(2)レポートの総評:2分、(3)期末テストの実施方法と審査項目に関する説明:5分、(4)レポートの要約文作成:15分、(5)席替え:3分(6)新しいグループ内での複数のワーク:35分、(7)クラス全体で行うアイコンタクトの練習:25分、となっている。

(3)では、期末テストにおいてアイコンタクトを最も重視して審査することを伝える。「人前になると緊張する癖を直したい」と言う学生が多いため、担当教員自身の体験から「無理をしてでも人前で話すようにし続けていれば、個人差はありますが、20回目くらいで緊張することに飽きる瞬間が訪れるはずです。そして、興味の対象が自分から聴衆に移ります。その時、これまでとは違った新しい世界が開けてきます。」と励ましている。

(4)では、返却されたばかりのレポートを各自3~5行で要約し、その場で暗記するよう指示する。

(5)期末テストを出席番号順に実施すると、テーマが多岐に亘り聴衆にとって全体的な流れを欠く時間になる恐れがあることから、ジャンルごとにグループをつかって実施する。どのグループに所属するかは、各自のレポートのテーマによって決めている。2011年度後期は、前半(第14回)「スポーツ、文化・マスコミ、健康、青少年問題」、後半(第15回)「労働・経済問題、環境問題、沖縄関連、国際関係から宇宙へ」(合計8グループ、各7名程度)であった。席替えでは、以上のグループごとに座ってもらう。

(6)では、①(4)で作成した要約文を同じグループのメンバーの前で読む。②各自の内容から、グループ内ではどのような順番で発表すれば聞いている人が疲れないか話し合ってもらおう。たとえば抽象的な内容から具体的な内容へ、大きなテーマから焦点を絞り込んでいるテーマへといった流れを紹介する。グループ内の発表順序が決まると、③早口言葉の練習と④塗箸を用いてアイコンタクトの訓練を行う(詳しく

●選択科目● 「良き聞き手」としての評価も行うスピーチ指導

	<p>は本用紙「授業で特に使用しているツールとその活用法」に記載)。</p> <p>(7)では、(6)④のワークで最もアイコンタクトが苦手なメンバーを各グループで選び、一人ずつ順番に教壇に上がってもらい。そして、今から30年後の自分になったつもりでクラスメイトからの質問に答えてもらうというものである。質問をされれば、そちらに目を向けて答えざるを得ないため、自然と様々な方向を見ることができるようになるという効果を狙っている。</p> <p>最後に宿題を出す。期末テストに向けて、返却されたレポートをスピーチ用の原稿(です・ます調)に書き直し暗記すること、自分の声を録音して何度も聞き直すこと、時間を計ってリハーサルをすること等である。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>スピーチ練習の際、竹塗箸(約22cm)を使用する。柄の部分(約8cm)が朱色の箸を1人1本ずつ配り、アイコンタクトの練習に活用する。期末試験の発表チームごとに円陣を組み、全員が柄の部分を上にして箸を立てる。そして、一人ずつ、自分のレポートの要約文をグループ内で発表する際、メンバーと目が合えば箸を下してもらいことができ、話し終えるまでに全員の箸を倒すことができるか競争する。</p>
<p>学習成果(学生は何ができたようになったのか)</p>	<p>大半の学生が3部構成による論旨明快なレポートを作成し、中央後列を見ながら話することができるようになった。なお、半数以上の学生が最後列左右の聴衆を見ることができ、最前列左右にもアイコンタクトを及ぼすことができた学生もいた。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>中間テストと期末テストの結果(50%)、授業への参加姿勢(50%)等から総合的に判断する。出席状況や講義での積極的な取り組みは、授業への参加姿勢の中で評価する。</p> <p>なお、中間テストで作成するレポートについて特に重視するのは「序論で問題提起を行っているか」、「序論で提起した問いに対する答え(自分の主張)を結論部分で明確にしているか」、「本論に自分の主張を支える根拠を挙げているか」という3点である。</p> <p>期末テストに関しては、他の受講生と比較するのではなく、その人自身の成長度合(主にグループ・プレゼン大会における様子との比較)を評価する。具体的には、アイコンタクトができているか、姿勢、声の大きさ、話すスピード、表情や雰囲気によってその人らしい魅力が出ているか等について審査しており、この結果は中間テストの結果よりも重視する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>期末試験が終了し、担当教員が最後の挨拶をした直後、教室で拍手が湧き起こった。</p> <p>2011年度後期実施「学生による授業評価アンケート結果」(教務部教学課)によれば総合平均評点は、4.0満点中「3.9」であった(全学の総合平均評点は3.5)。自由記述欄には25人が記入し、最も多かったのが「自分のためになった」「楽しかった」(各7名)という感想である。その他、「内気な性格をどうにかできそうでした。」「今まで受けた事がないような授業でした。」「すごくいい講義の進め方で、自分自身成長できたと思うし、クラス全員がまとまった雰囲気ですごく良かった。」等があった。なお、本科目は2006年度前期に開講以来、毎年「3.8」以上の評価を維持している。</p>

●選択科目● 「良き聞き手」としての評価も行うスピーチ指導

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方
(教育哲学)

担当者は、「良き話し手は、良き聴衆によって生み出される」と考えている。「良き聴衆」とは、応援団員のように好意的に聞いてくれる人々を指す。話し手は心強く感じ、その長所に益々磨きがかかるということを担当者は自身の体験から学んだ。

したがって、「良き聴衆」をつくるべく教室を和やかな雰囲気にすることが教師の第一の任務である、というのが担当者の基本的な考え方である。そこで、約6年半の間、①第7回目までに全員の顔と氏名を覚える、②毎回、授業開始30分前までには入室し個別の質問や相談に応じる等の工夫を継続している。

その他の特記事項

本学には、空手着を着て演武を披露したり、ユニフォームを着用しバレーボールを持参して発表したりする学生達がいた。2010年度前期のグループ・プレゼン大会の際には、2009年度前期の優勝チームのメンバー達が登場し特別審査員として審査に加わった。

健康相談活動

鎌倉女子大学

家政学部家政保健学科

西牧真里

<p>科目の位置づけ</p>	<p>家政保健学科には、履修の指針として3つの「学びのキーワード」があり、そのうちの一つである「教育保健福祉」に関する養護教諭一種免許を取得するための必修科目である。この科目を3年次に履修する前に、以下のような、養護の知識や養護教諭の基本的な実践について学んでいる。</p> <p>1年次の「養護概説」を基礎とし、実際の養護活動の技術を身につける演習科目である「養護活動実習」、学校保健の知識を基に応用力をつけると同時に養護活動を学校保健という広い視野で確認する演習科目の「学校保健演習」、医学・看護学でもなく、学校という場での養護教諭の行うフジカルアセスメントを学ぶ科目である「養護アセスメント」などを履修し、さらに学校現場での「養護実習」をおこなった後に受講する科目である。</p> <p>「健康相談活動」は、3年春学期の「養護実習」における学校現場での経験をもとにして、大学内の授業でロールプレイングを中心に、養護教諭としての対応方法を学ぶとともに、子ども役を経験することにより子どもの気持ちも理解する。養護教諭免許の取得に必要な科目の総まとめとなる科目であり、学校組織の一員としての養護教諭の役割も確認する。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>21名</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>養護アセスメントの知識を応用できる。児童生徒・養護教諭・教職員・保護者の役割を演じることで、それぞれの立場が理解できる。保健室に来室する子どもの気持ちを感じる。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>個別の到達目標と教授法の対応は複合的であるが、おもに、養護アセスメント知識の応用のために、eポートフォリオを利用した予習やグループ検討を実施し、児童生徒や教員などの立場や気持ちの理解を深めるためにロールプレイや協議を中心としており、具体的には以下のようなものである。</p> <p>予習として、教科書にそって特定の病気のある子どもを必ず1名含み日常の保健室の場面を想定した事例を、電子媒体であるeポートフォリオを用いて学生は提出する。各学生は授業時までに興味のある事例を読んでくる。授業ではグループワークにより、まず各自が予習してきた事例の検討をおこない、グループで採用する事例の決定、次にその事例の登場人物(子ども・担任等)を決める。事例を検討しているグループ以外の学生から養護教諭役を選出する(養護教諭は、事例の内容をまったく知らされていない)。以上の設定のもとロールプレイを行い、終了後、演じた学生が各役割の立場からコメントをする。次に、ロールプレイをみていた学生が、対応の優先順位や言葉かけなどについて協議をおこない、最後に養護教諭としての対応を評価した用紙(コメントカード)を養護教諭役の学生に提出する。養護教諭役の学生は復習として、ロール</p>

●専門教育科目● e ポートフォリオを利用した予習やグループ検討、ロールプレイなど

	<p>プレイの活動のまとめを「実習報告書」として、次週までに e ポートフォリオを利用して提出する。</p> <p>今年度からは、新たな ICT 教材を使用し、養護教諭対応の振り返りに利用する。これまでは、養護教諭役はロールプレイングの自分の対応を客観的に確認することは、ロールプレイ後の協議内容や実習報告書でしかできなかった。新たな教材は、ネットワーク上でビデオ再生機能があるため、活用後は何回でも自分の振り返りができるようになり、自己評価に役立つことが期待される。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>教室の半分は、小学校の保健室と同じ設備仕様になっている。残り半分に、黒板・机・椅子がある。このため、椅子の向きを 180 度かえるだけで、講義形式と演習形式の授業を円滑に実施できる専用教室（養護実習室）である。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) くじによって、グループ分けをする。(5分) 2) グループ内で、予習してきた事例の中から本時に使う事例を選択する。役割分担と事例のポイントの理解を行う。(20分) 3) 各グループで、養護実習室の保健室でロールプレイングを実施する。ただし、養護教諭役は、別のグループから 1 人選出する。(15分) 4) ロールプレイをした学生が、それぞれ演じた役割についての感想を述べる。(10分) (この後、今年度から新たな教材で映像による振り返りを行う。) 5) 全体協議(20分) 6) まとめ(15分) 7) 本時のコメントカードの記入(5分)
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>e ポートフォリオを利用し、学生は予習の事例を授業当日までに作成しお互いの事例を読む。養護教諭役が記入する授業用の「実習報告書」も、e ポートフォリオで提出する。今年度からは、映像を見ることができる ICT 教材を使用して、養護教諭役の対応・子どもへの声かけなどの健康相談活動を、客観的に振り返る。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>養護アセスメントの知識を応用して、来室者に優先順位をつけることができる。児童生徒・養護教諭・教職員・保護者の役割を演じることで、それぞれの立場を理解できる。保健室に来室する子どもの気持ちを感じるにより、より適切な対応ができる。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>学習の評価は作成した事例の内容、ロールプレイを行ったときの事項評価・学び、ロールプレイでの観察内容や感じたことを書く授業用の「実習報告書」などを総合的に評価して行う。対応の正解は 1 つと限らないため、ロールプレイそのものの評価は行わない。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>授業アンケートの自由記述を以下に示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭課程の必修であると同時に、ロールプレイを通して自分の知識と皆の意見が合致する事にやる気を感じた。 ・教科書を勉強する以外にもこういう授業があるのは将来役立つと思う。 ・ロールプレイを通して自分の意見や皆の考え方を知れたことがよかったと思う。 ・毎回とても楽しく、様々な角度から保健室・学校内での養護教諭を学ぶことができました。 ・みんなが発言でき、話し合うことができてよかったが、正解があやふやな時があり

● 専門教育科目 ● e ポートフォリオを利用した予習やグループ検討、ロールプレイなど

ました。

- ・全員で何かをすることで皆の意識が高まり良い関係になれたと思います。
- ・人前でたくさん発表する機会があったため、慣れてきて人前で発表するのが嫌いではなくなりました。とても学び深き授業でとてもよかったです。
- ・最初はわけもわからずやっていたけれど、慣れると楽しい。みんなから（学生）や先生からの質問が新たな学びにつながる。
- ・緊張はストレスであるがそれもまたよかったと思う。

授業の場では、自分の発言や意見を共有することにより、学び合いの場になるという信頼感、失敗してもよいという安心感が存在することが重要である。そのためには、自分たちで考え自分たちの意見を出し、お互い深めあうことのできる環境が必要である。そして、学びたいという意欲ある学生が、教室という空間で、専門職である教員が創意工夫し準備した教材を媒介にして、新たに発見し、学びを深めることである。学生が学習に集中するのは授業の中に異なる視点からの異なる意見がいつもあり、それがお互いの考えを揺さぶるときである。その経験が自分にとっての新しい発見となるときに学びは深まると考えている。

教材研究は、教員が意識的・計画的に準備するもので、発問、指示、説明などがあるが、ロールプレイ中にそうした意図や予想を超えたものが生まれ、それに的確に対応した場合に新しい授業展開が生まれたり、展開が促進されたりする場合がある。そのための環境をつくり、しかけをつくり、組織的に学生の能力を引き出すことができることが大切だと思う。そこには学生の教員に対する信頼感はもちろん、教員は、将来の社会人としての学生に対する期待、絶対的な信頼が不可欠である。

養護教諭は、学校現場の中で専門性を生かして子どもの成長、発達、安全などの命に一番近いところで職務を行う。養護教諭に求められる資質は、コミュニケーション能力、組織の中で専門性を生かして協働する力、とっさの場面に冷静に判断する力、などである。それらをこの授業を通して身につけるとよいと思っている。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

授業風景
(写真: : ない場合は省略可)



その他の特記事項

●共通選択必修科目● 学生を共同体としたラーニングコミュニティの形成

専門演習Ⅲ（春学期）・Ⅳ（秋学期）



関西国際大学

教育学部・教育福祉学科・こども学専攻

中尾繁樹 教授

科目の位置づけ	<p>「卒業研究」への橋渡しをする科目で、学びの総合化を図る科目である。学科の学習目標である「教育・社会事情を教育の観点から特定の研究方法を使って説明することができる」を実践する。「知的障害の心理」（共通選択科目）とのクラスター科目でもある。</p>
受講（登録）学生数	<p>約 20 名</p>
科目の到達目標	<p>保育・教育における内容や問題について、データや資料を検索、収集、整理し、また学術論文や文献に当たることを通して、様々な角度から分析する力や考察する力を身につけ、それを正確かつ効果的に他者に伝えることのできる力量が養えるようになる。</p>
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・専門演習Ⅲ，Ⅳ(中尾ゼミ)を中心に春学期：「知的障害者の心理」、秋学期「知的障害児の言語障害指導」を受講している学生と受講していない学生を共同体として、ラーニングコミュニティ（LC）を形成した。 ・春学期：「知的障害者の心理」「教育相談」、秋学期：「知的障害児の言語障害指導」の受講生を対象に、理論（発達障害、重複障害の子どもたちの心理、暮らし良くするための構造化等）を中心とする科目と、総合化の科目(専門演習Ⅲ，Ⅳ)を同時履修させることで、学んだ事柄を実践に結びつけ、あるいは実践を通して見直すことができるようにした。
教室空間の特徴	<p>尼崎キャンパス PBL ルーム（72 m²）には、3 台のインタラクティブディスクを有している。インタラクティブディスクとは、本学が独自開発したもので、コンピュータ画面のほかに、ホワイトボードモードとペンモードを有し、ディスプレイ面にボードマーカーで文字などを書き込んだり、その内容を USB カメラでキャプチャーすることができる。また、コンピュータ画面に指などで書き込むことも可能である。</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>文献収集・情報整理およびテーマ発表と討議（4/26,5/10,5/31,6/7,6/14,6/21,6/28,7/5 のうちのいずれか1回）</p> <p>導入 5分 今回の流れと趣旨説明</p> <p>展開 30分 自分で調べてきた調査内容をインタラクティブディスクを使って他の学生へ説明。及び質疑応答。（各グループ2～3名）</p> <p>30分 疑問点に関する討議と問題解決（インタラクティブディスク）</p> <p>25分 各班より報告と教員によるレクチャ（パワーポイントによる全員での共有）</p>

● 共通選択必修科目 ● 学生を共同体としたラーニングコミュニティの形成

<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>PBL においては、本学が独自開発したインタラクティブディスクを利用している。ラーニングコミュニティ（LC）を理論受講グループに分け、それぞれのグループで、学外活動の問題発見と解決を図った。また、各グループで学外活動での問題点を選定させ、授業時間外で活動を行った。授業内ではそれぞれの学外活動の振り返りとPBLルームでの問題解決学習を行った。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション能力の向上及び相互に批判的思考・検討する能力の向上が見られるようになった。 ・問題発見を各自行うことができ、ゼミでの解決学習にも反映し、自主的に施設の構造化やプログラム設定も行うことができた。 ・LCは授業外での学外活動も授業での課題に関連してではあるが、自発的に行われた。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>プレゼンテーションのコモンルーブリックでの評価と学生間の相互評価をレスポンスアナライザを使って行う。また、プレゼンテーションの中間報告と最終報告をVTRにとり、分析を行い評価する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>科目間の連携の趣旨がよくわかり、基礎的・理論的な学習とSLや時間外での活動の繋がり、LCでの活動の意味がよく理解できた。また、専門演習で卒業研究に向けて、理論的考察だけではなく、実践とのつながりの中で、教育・社会事情を教育の観点から特定の研究方法を使って説明することができるように準備することができた。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>学生自らが主体的に学修に取り組むためには、学修成果を明確にし、教育課程の体系化、単位制度の実質化等が行われなければならない。学生が科目間のつながりを意識しつつ学修し、「関連づけ、結びつき」を強化していく必要がある。その上で、学生の視点に立った学習の系統性・順次性のあるカリキュラムの構築を図る。それにとまなう科目の目標や内容、達成・評価水準を明確化し、教室環境と科目間の連携を整えることで、学習集団のコミュニティ化を促進する。さらに、LC、TCの活用による学習体制づくりをすすめ、学習の効率化を図り、ゼミ等を活用した少人数制の授業とクラスター化による、LCの実質化を進める。その手立てとして、ブレインストーミング等の手法を活用し、グループワークできる教室環境作り（PBLシステム）をすすめ、問題解決発見型の学習を取り入れる。また、インターンシップ、学内施設活用等の教室外の学習体験と講義科目の連携を深めることで知識と経験の総合化を図る。そのために、学習グループを作り、学生たちのLCづくりを重視していく。</p>
<p>授業風景</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 5px;"> <p>↑ 独自開発したインタラクティブディスク</p> <p>↑ インタラクティブディスクを使用した授業風景</p> </div>
<p>その他の特記事項</p>	<p>インタラクティブディスクは、平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム『科目のクラスター化によるカリキュラム改革—ラーニングコミュニティの実質化による知識と経験の総合化支援』の補助金により開発・導入した。</p>

●専門科目● 共同作業、集団討論、ロールプレイなど演習形式中心の授業

社会福祉援助技術演習Ⅱ

関西福祉科学大学

社会福祉学部社会福祉学科

遠藤洋二、柿木志津江、酒井美和、竹中理香、立花直樹、寺田明代

中島裕、成清敦子、米澤美保子、谷緑、中島弘美、前川敦

<p>科目の位置づけ</p>	<p>本学社会福祉学科では社会福祉士養成を学科の基盤としている。その社会福祉士養成における中核科目が社会福祉援助技術演習（国の指定科目名は「相談援助演習」）である。社会福祉援助技術演習Ⅱは、社会福祉援助技術演習Ⅰを基礎編とするならば、応用編とも位置づけられ、社会福祉援助技術演習Ⅰを発展させて行うものである。また、現場実習に出るために、社会福祉援助技術を修得するための準備科目でもあり、実習後に実施する社会福祉援助技術演習Ⅲ（実践編）の効果を高めるためにも、KEYとなる科目である。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>194名</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>社会福祉援助に関する理論や専門技術を福祉現場で役立つ実践力として養うことを目的とする。学生一人ひとりが自分自身で考え、行動し、主体的に学ぶ姿勢を養う。事例研究やロールプレイを通して、社会福祉援助に関する理論・専門技術を社会福祉援助技術現場実習で応用する力とともに、社会福祉援助技術現場実習を通して、自らの社会福祉援助活動を評価する力を身につける。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>本科目は、共同作業、集団討論、事例検討、ロールプレイ、ミニ講義などを中心とした演習形式中心の授業である。 また、教育効果を高めるために、1クラス18名以内の受講生とし、12クラスに分けて、12名の教員が1クラスずつを半年間通じて担当している。 集団討論や事例検討、サイコドラマ等を実施する場合、演習内容によっては、90分間では十分に実施しにくい場合もある。また、翌週に続きとして実施するよりも、振り返りも含めて連続して授業を実施する方が、理解が深化され、修得する知識や技術が高まることも少なくない。そのために、本授業は1回90分×2コマ（連続）×15回で実施している。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>ペアワークやグループワーク等の各種ワークに対応するために、可動式の机とイスが設置されている教室を利用しており、授業内容に合わせて机やイスを並び替えている。また、VIDEOやDVD等の視聴覚設備を兼ね備えた教室を使用している。 さらに、机やイスなどのない空間も使用できるように、教室とは別に、常に2部屋のフリースペースを確保している。</p>

●専門科目● 共同作業、集団討論、ロールプレイなど演習形式中心の授業

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>6回～11回目：相談援助事例の検討</p> <p>【1コマ目】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 挨拶・出席確認（5分） 2. 本日の授業の流れに関する説明（10分） 3. アイスブレイク（15分） 4. 個人ワーク：事例1を読んでワークシートに各自意見を記入（15分） 5. ワークシートを基にグループ・ディスカッション（15分） 6. ワークシートに気づきを記入（15分） 7. DVDによる事例の対応を鑑賞（15分） <p>【2コマ目】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 個人ワーク：事例2を読んで、立場を決めワークシートに各自意見を記入（15分） 2. グループ分け：立場の違う者数名がグループとなる（5分） 3. ワークシートを基にディベート・ディスカッション（20分） 4. ワークシートに気づきを記入（15分） 5. 教員による講義とまとめ（25分） 6. 各自が振り返りを記入（10分）
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①各種事例に関する理解を深めるために、DVDやVIDEO等の視聴覚教材を使用している。 ②各種事例に関する理解を深めるために、高齢・障害疑似体験 set や車椅子、アイマスク等を使用している。 ③サイコドラマやロールプレイ場面の客観的な振り返りのために、ハイビジョン・ビデオカメラやデジタル・ビデオカメラを使用している。 ④アイスブレイクのために、パオパオバルーンやボールを使用している。
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>「関心・意欲・態度」</p> <ol style="list-style-type: none"> ①人権を尊重し、アドボカシーを基盤としたソーシャルワークを志向する。 ②社会福祉の援助を必要とする当事者のため、社会資源の活用・開発の必要性を認識する。 ③総合的かつ包括的に多様なソーシャルワークの視点を涵養する。 <p>「思考・判断」</p> <ol style="list-style-type: none"> ①ソーシャルワーカーとしての状況に応じた適切な援助技法を活用できる。 ②事例検討や集団援助を通じ、地域を基盤とした連携の視点を常に持っている。 <p>「技能・表現」</p> <ol style="list-style-type: none"> ①事例を検討し、支援できる実践力を修得している。 ②ソーシャルワーカーとして専門的技法（各種療法など）を用いて援助実践できる。 <p>「知識・理解」</p> <ol style="list-style-type: none"> ①社会資源・制度・サービスを説明できる。 ②相談援助に関する過程を展開できる知識や技術を理解している。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>受講態度、授業への積極的参加度、レポート、小テスト、発表などを総合的に判断して行っている。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>本学においては、学期末に授業評価アンケートの記入を学生に依頼している。この結果によると、「この授業を受講してよかったか」「班・グループのメンバーと協力できた」「授業中に質問や発言を積極的にした」「受け身ではなく、自分で考えながら受講した」といった項目で高い評価を得ている。つまり、主体的に参加することを重視している当科目において、それが実践できているといえる。また、「この授業をどの程度理解できたか」「教員の話し方はわかりやすかった」「教員の板書はわかりやすかった」といった項目も高い評価を得ており、話し方や板書といった教員による工夫と、上記の学生の主体的な学習により、授業の理解度も高まることが考えられる。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教</p>	<p>社会福祉援助に関する知識や技術、あるいは価値や倫理は、授業で聞いたり文献で読んだりして「知っている」レベルでは「実践」できない。「実践」のための「理解」は学生自身が「こういうことか」と「納得」して得られるものとする。そのために、当科目では事例研究やロールプレイ等を通して、自分で考え、納得し、理解を深められるような手法を取り入れている。</p>

●専門科目● 共同作業、集団討論、ロールプレイなど演習形式中心の授業

育哲学)

社会福祉士を目指す上で、人や生活を理解する力を身につけることは欠かせない。人や生活の理解には「想像力」を働かせることが重要である。また、人の生活を支援することは、その人のこれから（将来）をどう創っていくかということにつながるため、「創造力」も求められる。これらふたつの「そうぞう力」を、事例研究やロールプレイを行うことで高めていけるものとする。

社会福祉の現場では他職種・他機関との連携が重要であり、協調性が求められる。当科目では、グループに分かれて課題に取り組むことが多く、協調性を養う機会にもなっていると思われる。



授業風景



その他の特記事項

指定の教科書は特に使用せず、適宜資料を配布している。

教育方針として、以下の2点を定めて、全12クラス共通で実施している。

- ①10分以上の遅刻で、欠席としている。ただし、欠席扱いとなっても、授業の内容を理解するために途中からでも出席するように促している。
- ②止むを得ない理由であっても、欠席は3回までしか認めていない。4回以上欠席した場合は、単位不認定としている。

早期体験学習

京都薬科大学

薬学部薬学科
全教育職員

<p>科目の位置づけ</p>	<p>「早期体験学習」は「医療の担い手としてのこころ構え」や「基礎演習」と連携し、初期導入教育としてのヒューマニズム教育の充実を図る。早期体験学習を通じて、医療人としての自覚、問題発見・解決能力の修得、豊かな人間性の修得を目指すことを目的とする。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>367</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>医療人である薬剤師として身につけるべき「生命の尊厳」、「やさしさ、思いやり」など豊かな人間性の涵養と「問題発見・解決能力」の重要性を認識してもらう。人にやさしい、信頼される薬剤師を目指して研鑽を積む第一歩を踏み出すきっかけになることを期待する。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>受講学生数 367 名を 60～70 名の 6 グループに分けて以下の内容を実施する。早期体験学習の全体像は右図（桃色）のとおりである。医療人としての自覚を確認するために、薬害講演会でレポート提出・添削課題を実施し、救命応急手当、ハンディキャップ体験、ようこそ先輩の中から自己の研鑽のための科目を選択する。病院・薬局見学および企業見学ではあらかじめ各職種の役割や質問事項を SGD(Small Group Discussion)により整理した上で見学を行い、疑問点などを当該施設で質問する。また、得られた成果などをプレゼン形式にまとめる。研究室見学では、研究内容の一端を学び、意識を高める。プロダクト作成・意見交換会を通じてコミュニケーション能力、問題発見・解決能力の基礎を学ぶ。企業見学または病院・薬局見学のいずれかをテーマに、学生同士で議論し見学内容をまとめたプロダクトを作成し、展示・意見交換会にて 1 年次全学生および教員の投票により優秀賞を選出する。</p> <div data-bbox="925 985 1460 1388" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">早期体験学習の全体像</p> <p style="text-align: center;">現行(旧カリ) 新カリ</p> </div>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>全体ガイダンス、薬害講演会およびようこそ先輩では大講義室（広さ：424.5 m²、収容人員 402 名、設備：AV 装置、プロジェクター、机の特徴：固定式）を利用する。薬害講演会では基礎演習担当教員によるレポート添削が課せられているため、音声や映像、板書の拡大映像の描写に留意し、資料の配付によるメモの徹底を図った。救命応急手当では小講義室（広さ：161.2 m²、収容人員 110 名、設備：AV 装置、プロジェクター、机の特徴：移動式）を利用する。机を移動させ AED、心臓マッサージ等の講習を行った。ハンディキャップ体験では体育館、講義棟の階段を利用し、車椅子、アイマスクの講習を行った。病院・薬局見学、企業見学では中講義室（広さ：307.8 m²、収容人員 281 名、設備：AV 装置、プロジェクター、机の特徴：固定式）を利用する。固定式の</p>

●薬学教養科目● 議論・プロダクト作成・展示・意見交換会を通して優秀賞選出

	<p>机ではあるが SGD をグループ毎に分けて円形に着席させ、討論しやすい配置とした。プロダクト作成では、大講義室、中講義室、セミナー室を利用する。大講義室にて全体説明を行い、中講義室、セミナー室にてプロダクト作成を行った。中講義室では他のグループとの干渉を避けるため、適宜空間を設けるよう、配置した。意見交換会は、体育館を利用し、ポスター形式の発表を全グループにて実施した。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>5/14 回の企業見学ガイダンスおよび SGD の授業について (13 : 30 ~ 15 : 45)</p> <p>1) ガイダンス (13 : 30 ~ 14 : 10)</p> <p>(1) 学生に 10 名 × 6 グループで指定された座席にグループ単位で座るように指示する。</p> <p>(2) 出席確認表を用いて学生の出欠確認をする。欠席者には次週の SGD 出席を促す。</p> <p>(3) 担当教員はガイダンス資料を配付し、見学の際の留意点を説明する。</p> <p>① バスによる移動、見学当日の集合時間および集合場所</p> <p>② カメラ撮影者 2 名の決定、バス移動の留意点の説明</p> <p>③ 上記①について学生に必要事項を書き写させる</p> <p>2) SGD (14 : 10 ~ 15 : 45)</p> <p>(1) 見学ノートを配付し、内容に沿って SGD を行うことを説明する。</p> <p>① 討論は約 40 分、討論後の各グループの発表を 5 ~ 6 分で行うことを説明する。</p> <p>② 発表者はなるべく内容を簡潔にわかりやすく発表することを確認する。</p> <p>(2) 見学ノートを利用し、討論内容を簡単に説明する。</p> <p>① 製薬企業の果たすべき役割、企業で働くために必要な心構えについて。</p> <p>(3) SGD に先立ち、司会進行、書記、発表者の 3 役を決定し、必要事項を説明する。</p> <p>① 司会進行の役割、書記の役割、発表者の役割について</p> <p>(4) SGD 実施 (40 分間) ※議論が進まない、討論の方向性がよくない場合教員が介入</p> <p>(5) 発表 (30 分間) ※OHC を利用し、グループ毎に発表、質疑応答の時間を設ける。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>(1) OHC 病院・薬局見学、企業見学における SGD のグループ発表で活用する。</p> <p>(2) Moodle 薬害講演会、ようこそ先輩、企業見学、ハンディキャップ体験後のレポートを Moodle による Word 書類の提出に活用する。薬害講演会のレポートに関しては基礎演習担当教員が添削し、文書作成能力を補助する。</p> <p>(3) リアルタイム評価支援システム (REAS) 企業見学、ハンディキャップ体験、救命応急手当では PC や携帯電話を利用する調査・集計システムを活用し、授業の改善や報告書の作成に活用する。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>薬学生としてこれから 6 年間の学習に対するモチベーションを高めることができ、救命応急手当、ハンディキャップ体験、薬害被害者の生の声 (講演会)、病院・薬局見学、企業・研究室見学等により、将来の医療人としての自覚を高めるとともに、「生命の尊厳」、「やさしさ」等豊かな人間性について肌で感じる事ができた。また、各学習内容を通じてディスカッション、発表時の対応から人の考えをじっくり聞き、自分の思いを人に伝える方法を考えることができ、将来求められる「問題発見・解決能力」の重要性を驚き、楽しみながら考えることができるようになった。</p>

●薬学教養科目● 議論・プロダクト作成・展示・意見交換会を通して優秀賞選出

<p>学習成果の評価・ 測定の方法</p>	<p>(1)授業後のアンケート 各学習内容後の学生の意見や感想を数名の学生をランダムに抽出し、面談による聞き取り調査を行った。また、Moodle や REAS を利用して、学習成果の評価に利用した。</p> <p>(2)学習者の授業態度、学習意欲 各学習内容時の学生の態度、学習意欲等を授業時に観察し、各主担当教員で評価した。</p>
<p>本科目についての学 生からの評価</p>	<p>ヒアリングでの学生の評価は概ね以下のとおりである。</p> <p>1)先輩からの話を聞いて、今後の勉強に役立つ、とても参考になると思った。</p> <p>2)外出先で倒れている、困っている人がいたらAEDや声掛けをやる自信はある。</p> <p>3)見学ではSGDの時間に皆で質問を考えたので当日積極的に質問することができた。</p> <p>4)意見交換会では他の班に回って質問し、ディスカッションすることができた。</p>
<p>学生の学習のあり方 や教授法の果たす意 味等に関する、担当 者の基本的な考え方 (教育哲学)</p>	<p>本科目は、種々の体験を通じて医療人としての薬剤師の歓び、理想像を思い描き、今後の研鑽の糧とすることを目的としている。より幅広い体験と、体験のみならず学生同士で議論しあう機会を多く設け、学生自ら課題を持ち、解決能力の基礎を身につけるよう工夫している。学習項目として、ようこそ先輩、企業見学（以上、2012年度から新規）、薬害被害者講演、救命応急手当、ハンディキャップ体験、病院・薬局見学、学内研究室見学を行ったところ、学生達からは、今後の勉学に参考となったとの意見を受けた。企業見学または病院・薬局見学のいずれかをテーマに、学生同士で議論し見学内容をまとめたプロダクトを作成し、それらの展示と意見交換会を開催した。その結果、1年次全学生および教員の投票により4件の優秀賞を選出し、学生自らの取り組みに対する成果を実感できる学習内容と考えている。</p>
<p>授 業 風 景</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>企業見学 SGD の風景 その1</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>企業見学 SGD の風景 その2</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center;">  <p>プロダクト作成の風景</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>プロダクト発表・意見交換会の風景</p> </div> </div>
<p>その他の特記事項</p>	<p>企業見学については、事故等の安全面への配慮から全てバスにより移動した。また、台風による自然災害のため、当日は授業を中止し、授業法を変更しなければならない場合など教育職員、事務職員の素早い連携で先方との交渉にあたり、全ての内容を終了することができた。</p>

薬学PBL(1)(2)

金城学院大学

薬学部薬学科
薬学教育企画室並びに薬学部専任教員

<p>科目の位置づけ</p>	<p>シナリオをベースとした少人数・問題解決型教育（いわゆるPBLチュートリアル教育）になじむための、導入教育として位置づけている。高校までほとんど受け身の講義を受けて来た薬学生に対し、本格的なPBLチュートリアル教育を実施すると、学生側の対応能力の個人差が大きいため、積極的に参加する学生とそうでない学生との間で学習効果に格差やばらつきが大きくなる場合がある。そこで、大学入学初期にこの差を出さない様にする方略として本授業を設置している。薬学部のディプロマポリシーとの関連では、1) 問題解決能力（薬学を巡る諸問題を論理的に考えて解決を図ることが出来る）及び、2) 高いコミュニケーション能力（自らの考えを適切に表現し伝え、他者の立場や見解を尊重した上で自らの意見を発信できる）を身に付けさせることを狙いとし、その達成を可能とする。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>150名（75名 x 2クラス）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>医療の現場ではマニュアル型では解決できない様々な問題が発生する。これからの薬剤師には、こうした問題に柔軟に対応し自らの力で問題を解決していく能力が強く要求される。薬学PBLは、これからの薬剤師に必要な能動的な学習能力や問題解決能力を身につけることを到達目標の一つとする。一方、患者に寄り添うことの出来る薬剤師として、ホスピタリティーマインドや高いヒューマンコミュニケーション能力を身につけることも重要で、これも到達目標の一つである。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>本学独自の『金城学院薬学部屋根瓦方式 PBLT』と名付けられた学習方法を実践している。これは1クラスを12~13人に分け、更にこれを司会グループと調査・発表グループの3グループに分け、ここに1名の教員と4~5名の2年生がチューターとして参加している。</p> <p>最初の週は、テーマをグループで1つ選び、調査事項を様々な角度から討論。この過程で疑問点を明らかにし、調査内容を煮詰める。更に、調査事項をグループで文献やインターネットを使いながら調査する。後半の週は、各自が能動的に学習した内容を持ち寄り、レジメ作成、発表・吟味する。2年生は必要に応じて1年生に適切なアドバイスを送りサポートすると共に、教員による1年生の評価にも参加するが、これは人を客観的に見て評価する訓練に役立てるとともに、複数の目で1年生の学習態度やレジメをチェックすることにより、学習評価の妥当性や信頼性を向上させることにも繋がっている。</p> <p>PBL(1)、(2)の途中でグループのメンバーを変更し、新しいメンバーとのコミュニケーションや共同作業を体験させている。</p>

●専門科目● 金城学院薬学部屋根瓦方式 PBL

<p>教室空間の特徴</p>	<p>PC 教室：1 クラス 75 名を収容できる。全体報告会を行うと共にインターネットを用いた調査、更には発表会のためのレジメ作成を行うことができる。</p> <p>演習室：定員 20 名の演習室が 6 室（可動式の机、イス、ホワイトボード付き）。最初の問題点発掘のための討議、発表会を行う。机は調査グループを対面させるように配置する。又、2 年生は調査・発表グループと司会グループに配置し、1 年生と交互に着席させるようなレイアウトとする。</p> <p>図書館：調査を行うための十分な書籍を所蔵した図書館。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>1 回目の授業の流れは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. (指導教員) ファイルボックスを持ち、チューターミーティング用教室に集合する。2 年生の出欠確認。役割分担の指示。オーガナイザーから目標・注意事項を聞き、2 年生と打ち合わせる。(2 年生) チューターミーティング用教室に集合する。指導報告書、ファイルボックスなど受け取る。後輩が気持ちよく、充実した学習が出来るように配慮する能力やサポートする技術を身につけることを目標とすることを確認する。(1 年生) 各演習室でサブグループ毎に着席し、名札を表示する。サブグループ毎に 2 年生に座ってもらう場所を決めておく。担当教員や 2 年生が到着するまでに、調査すべきテーマをグループ単位で提案できるように、簡単な打ち合わせを行っておく。(10 分) 2. (指導教員) PBL グループ全体の出席を確認し、自己紹介を行う。必要があれば説明、指導する。(2 年生) サブグループ内で簡単な自己紹介をする。指定場所に着席し、名札を表示する。1 年生の出席状況を確認する。司会グループをサポートする 2 年生は 1 年生と相談して司会、ノート記録、ホワイトボードの役割を決める。(1 年生) サブグループ内で簡単な自己紹介を行う。2 年生を座席にエスコートする。出席調査に協力する。(10 分) 3. (指導教員) 必要があれば指導する。(2 年生 & 1 年生) 司会の進行で自己紹介を行う。2 年生を含め、参加者全体で意見を出し合い、テーマを決定する。テーマを決定したら今持っている知識だけで討議する。司会の指名により順に知っていることを述べる。知っていることが出尽くしたら、挙手により興味のある点、疑問点、最後に調査方法を討論する。(30 分) 4. (指導教員) 2 年生より指導報告書及びファイルボックスなどを受け取る。(2 年生 & 1 年生) 2 年生は担当する 1 年生のサブグループと共に図書館に行き、1 年生と一緒に戦略を考えながら調査する。2 年生は、1 年生のサブグループと共に調査することで、発表の回での確かな質問や評価が出来るように準備する。又、1 年生に調査法、レジメ作成法、図書館利用法などをアドバイスする。2 年生は授業終了時に指導報告書を指導教員に提出して解散する。(40 分)
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 指導報告書とともに、振り返りシートを記入提出させている。リフレクションを促すための振り返りシートを記入させ、これをポートフォリオにファイリングしていくことで自己成長や達成感を認識させている。 2. ラーニングポータルとしての『Moodle』は、2 つの目的で利用している。1 つめは、作成したレジメをお互いに評価することが可能となる。又、授業以外の時間、例えば自宅からもレジメを見て学習することが可能となる。2 つめは、全体報告会

●専門科目● 金城学院薬学部屋根瓦方式 PBLT

	<p>の後に、ベストグループを選んでもらうための投票道具として利用している。お互いに報告内容や説明の仕方を評価することで、自らの報告を検証する機会となりうる。</p> <p>3. ビジュラン：オンデマンドビデオ教材を導入し、授業以外の自己学習の際に役立つように指導している。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 能動的に学ぶ態度を養成できた。 2. レジメ作成能力を養成できた。 3. 学習意欲が高まった。 4. 上級生、同級生とのコミュニケーション能力が向上した。 5. グループディベート型討議方式を取り入れることで、サブグループ間の仲間意識を刺激した。 6. 上級学年で行う本格的 PBL チュートリアル(Case-Based Learning)のための基本的な問題解決能力を涵養できた。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>5回のグループワーク（各回 100 点満点） 71.4%、ミニテスト（100 点満点）14.3% まとめのプレゼンテーション 14.3%（5回のグループワークとミニテスト、まとめのプレゼンテーションを平均して最終的な評価とする）</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>学生へのアンケートでは、PBL に積極的に参加したか、スモールグループディスカッションがスムーズに進行したか、学習意欲が高まったか、興味が湧いたか、調査を意欲的に行ったか、調査において書籍を有効に使ったか、メンバーとのコミュニケーションがうまくとれたか、レジメ作成能力を涵養できたか、PBL の内容があなたのニーズに合致していたかという各質問に対して 95%の学生がその通りもしくはほぼその通りと答えている。その一方で、PBL では講義よりも自己学習にかかる時間が多いと思いますかに対しては、そう思わないと全くそう思わない学生が全体の 18%いた。又、2年生のサポートは適切でしたかという各問いには 10%の学生がそう思わないか全くそう思わないと答えている。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>この学習方法を導入して6年を経過した。この教育法を受けて社会に飛び出した学生への評価は概ね良好である。特に、これまでの知識ばかりにとらわれていた時代から成人学習理論をベースにした問題発見解決型学習は、医療人ばかりでなく広く社会に役立つ人材を養成する上で有効な手法となりうると思う。しかしながら、高校までの受動的な講義を中心とした授業からいきなり本格的な PBLT への移行は個人の格差を生みやすいと考える。そこで、1年生のロールモデルとなりうる2年生があたかも屋根瓦の様に授業に参加し、1年生へ効果的なアドバイスやサポートを行い、更には評価に加わるという学習方法は有効であると思う。又、1年生ばかりでなく、2年生の成長を促すという観点でも有効な学習と考える。しかしながら、アンケート結果の解析結果から、同級生とのコミュニケーション能力に劣る学生は2年生や教員への依存心が大きい。又、自己学習時間が講義時間よりも増えていない学生が2割弱いた。今後はこれらの諸問題を解決していくことが課題として挙げられる。</p>

ケーススタディ I・II

淑徳大学


コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科
矢尾板俊平

<p>科目の位置づけ</p>	<p>コミュニティ政策学部は、<u>地域社会におけるコミュニティ形成に関する諸課題を的確に認識</u>したうえで、幅広い視点からの問題分析や課題解決のための方向性を見出し、<u>政策提言や価値創造、地域活動などの社会開発や地域開発に貢献することができるゼネラリストの養成</u>を目的としている。</p> <p>「ケーススタディ」は、カリキュラムの中では<u>専門教育科目の実践科目</u>に位置づけられ、コミュニティ形成の実践現場における諸課題に関する<u>具体的な事例</u>を取り上げて考察することにより、その背後にある原理や法則性などを究明することで、<u>一般的な法則や理論を発見するための方法について学習</u>するとともに、<u>実践例に関する文献購読、資料分析、实地観察</u>などを通じて、研究意欲の涵養と研究能力の養成を行っている。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>30名</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p><u>答えのない問題に解を見出していくための基本的な能力</u>として考えられる以下の能力を<u>具体的なテーマとそれに基づいた実践活動</u>を通じて身に付けることである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.批判的、合理的な思考力等の<u>認知的能力</u> 2.チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う、<u>倫理的、社会的能力</u> 3.総合的かつ持続的な学修経験に基づく<u>創造力と構想力</u> 4.想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる<u>教養、知識、経験</u>
<p>教育方法の特徴</p>	<p><u>民間企業、NPO、地域社会などのステークホルダーと連携</u>し、年間のテーマを設定した上で、<u>受講学生の興味や関心に応じて、プロジェクト分けを行い、事前事後学習</u>における文献購読、資料調査、授業時間内における<u>グループディスカッションやグループワーク、サービスラーニングを含むアクティブラーニング</u>の手法を取り入れ、授業を展開している。</p> <p>テーマ設定においては、<u>教員と学生が相談をして設定するケースや連携先からテーマを提供していただくケース</u>など、複数のパターンがある。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>使用している教室は、30名規模の教室である。<u>可動式の机とイスが設置</u>されており、グループディスカッション、グループワークの際には、机やイスを移動させることができる。また<u>視聴覚機材（PC、DVD等）も設置</u>されている。この他、必要に応じて、<u>PC室を利用して作業</u>を行うことができる。</p> <p>さらにテーマを提供して頂いている<u>民間企業や地域社会の現場からも、学習およびサービスラーニングの活動場所を提供</u>いただき、従来の教室ではない<u>社会現場そのものを教室空間</u>としていることが特徴である。</p>

●実践科目● 民間企業、NPO、地域社会と連携したグループワークやサービスラーニング

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>「政策研究プロジェクト」で行った「<u>千葉市の財政</u>」に関する授業を行った回を事例として紹介する。</p> <p>「政策研究プロジェクト」では、主に公務員を目指す学生たちが、<u>地方財政の基本的な事項を学習</u>するため、<u>テキスト（財政学の入門書）を通じて、基礎的知識を習得するとともに、実際に千葉市の財政状況を踏まえ、今後の千葉市の財政健全化と税収を増加させるための経済戦略の在り方を調査</u>した。また<u>千葉市が策定した「千葉市経済活性化戦略」</u>の情報も提供いただき、事前学習において学生たちが資料調査・分析を行った。</p> <p>調査結果については、<u>千葉市経済部の方や学外の有識者にも授業に参加</u>いただき、<u>学生が発表を行うとともに、その発表に対するコメントを頂いた</u>。また学生からも質問を行い、<u>理解を深めるためのディスカッション</u>を行った。</p> <p>今回紹介するのは、千葉市経済部の方と学外の有識者に参加して頂いたディスカッションの回の時間配分である。</p> <p>授業開始～10分：授業担当者からの趣旨説明、参加者の自己紹介 10分～25分：学生の報告①（千葉市の歳出の状況について） 25分～45分：発表に対する千葉市経済部の方と学外の有識者からのコメント、学生からの質問を踏まえたグループディスカッション 45分～60分：学生の報告②（千葉市の借金の状況について） 60分～80分：発表に対する千葉市経済部の方と学外の有識者からのコメント、学生からの質問を踏まえたグループディスカッション 80～90分：まとめの議論：今後の千葉市の財政・経済戦略の方向性などについてのディスカッション</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>授業においては <u>SNS (Facebook)</u> を活用し、グループ内のディスカッションや事前事後学習内容の共有を、2012年7月時点から試験的に開始している。</p> <p>また、ハリウッド化粧品メイ・ウシヤマ SBM 研究所との連携プロジェクトでは、<u>WEBカメラなどを活用し、ユーストリームの配信を行うなどの取り組み</u>を行っている。配信内容は、後日、<u>授業担当者のWEBページで確認</u>できるようになっている。</p> <p>さらに、後期からは授業担当者のWEBページを活用し、授業内容やサービスラーニング活動の成果を記録し、<u>学習の「振り返り」</u>ができるように準備を進めている。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p><u>現代社会における答えのない問題</u>に対して、学生個人が<u>主体的に問題意識を持ち、その問題を解決するための方法を検討する姿勢・意識が高まってきている</u>。</p> <p>事前事後学習においては、授業内で設定されたテーマに関する<u>文献調査、インターネット等を活用した情報収集を行い、それをレポートにまとめ、発表を行う準備を個人およびグループで主体的に行うケースが増えている</u>。</p> <p>さらに授業内におけるグループディスカッションも、自らの意見や感想を述べるなど、<u>主体的参加者としての意識が高まっている</u>。</p>

●実践科目● 民間企業、NPO、地域社会と連携したグループワークやサービスラーニング

<p>学習成果の評価・ 測定の方法</p>	<p>「政策研究プロジェクト」では、2012年11月に開催される複数の大学ゼミとの発表会に参加し、<u>論文報告及び討論会を行う</u>予定である。</p> <p>また「ハリウッド化粧品 メイ・ウシヤマ SBM 研究所」との連携プロジェクトでは、メイ・ウシヤマ氏の美容理論などを学生の視点から検討し、<u>レポート等を発信していく</u>予定である。</p> <p>このように<u>対外的に発表する成果物や報告書の内容とその活動プロセスを総合的に評価</u>する予定である。</p>
<p>本科目についての学 生からの評価</p>	<p>・<u>他大学の学生との交流や学外の協力者の方との交流</u>を通じて、「<u>学び</u>」への意識が高まったという感想を得ている。また、授業や活動について、<u>主体的に取り組む意識</u>が涵養されたという感想も得ている。</p>
<p>学生の学習のあり方 や教授法の果たす意 味等に関する、担当 者の基本的な考え方 (教育哲学)</p>	<p>現代社会において、主体的に、<u>答えのない問題に解を見出していく力</u>を、従来の授業担当者から学生への一方向的な知識の教授ではなく、<u>授業担当者や学生との双方向的なコミュニケーションに基づくアクティブラーニングやサービスラーニング</u>などを通じて、学生に身に付けていただくことが重要であると考えている。また、学内の人間関係ではなく、<u>民間企業、NPO、地域社会などにおいて、年長の協力者や同世代の学生と主体的に人間関係を構築し、答えのない問題への解を協同して見出していくための力</u>も身に付けることが重要であるとする。そこで、大学もしくは大学の講義は、学生に知識を教授する場としてだけでなく、<u>地域社会における開かれた場として、地域社会の核となり、地域社会と連携・協同して学生が学んでいくための核となる努力</u>をしていかなければならないと考える。</p> <p>このような<u>地域社会に開かれたオープンな学生の学習の場</u>において、<u>学生が主体的に学んでいくためのサポート</u>を行っていきたいと考えている。</p>
<p>授 業 風 景</p>	 <p>「政策研究プロジェクト」における千葉市経済局と学外の有識者の方とのグループディスカッションの様子</p>
<p>その他の特記事項</p>	<p>現在は、他のプロジェクトとして「ソーシャルビジネス」に注目をしたプロジェクトなどを進めている。</p> <p>この他、正課外教育において、様々な地域社会との協同活動も行っている。</p>

●専門科目● ステップ・バイ・ステップで提示するオンラインならびに書籍の教材

解剖生理学・栄養生理学

女子栄養大学

短期大学部

渋谷まさと（FD 検討委員会委員）

科目の位置づけ	卒業必修科目
受講（登録）学生数	（24年度：それぞれ4クラスで）解剖生理学193名、栄養生理学169名
科目の到達目標	<p>「食によって健康を維持改善すると同時に、食に起因する全ての病気を追放し、食文化の発展により平和と幸福をもたらすこと」が本学全体の教育目標です。そのために、人体の構造、機能、病態生理学を理解すると共に、生命科学の専門知識がない一般の方にも要点をわかりやすく説明できる（管理）栄養士を育てることが、専門科目の到達目標です。本科目では、申請者が製作した教材である「一步一步学ぶ生命科学（人体）」（以下「一步一步」）を活用してこの目標を達成します。</p>
教育方法の特徴	<p>「一步一步」は下記（項目11番）に例を示すように、情報を端的に提示するイラスト、動画、ならびにそれを理解してはじめて解答できる問題とをステップ・バイ・ステップに提示している、オンラインならびに書籍の教材です。授業前に基礎的内容を「一步一步」であらかじめ予習させます。授業での高等な内容も、「一步一步」のイラストを理解・記憶するため、学生が「アクティブ・ラーニング」を反復して行わざるを得ない状況を構築しています。たとえば、授業中に「先生ごっこ」と称し、教員が説明したイラストを、隣に座っている学生同士で説明しあう時間を設けています。また、そのイラストを理解しなければ回答できない「一步一步」の問題から翌週の授業でミニ確認テストを実施しています。毎週の各テストはどれも75点以上得点しないと単位取得できません。</p>
教室空間の特徴	可動式の1人用机、椅子、パソコンプロジェクターのみの普通の教室で、特筆すべき特徴はありません。
特定の回の授業の流れ・時間配分	<ul style="list-style-type: none"> * 基礎的内容の予習を「一步一步」で課し、自己学習を確認するために予習内容評価テストに合格することを単位取得の必須条件としています。 * 配布用のイラスト（項目16番に掲載の通り、未完の状況で、矢印などを記入しなければ意味のない白地図）を各学生に配布します。 * 教員がそのイラストのもととなる動画をプロジェクターで提示し説明します。どのようにしたら白地図が完成するのかも、説明の一部です。 * 「先生ごっこ」と称した時間を設けています。隣同士、話し役・聞き役を交代し、イラストの内容をそれぞれ説明できること、相手が正しく説明していることを確認しあいます。 * 「一步一步」サーバにイラストの完成図（項目11番に例）を掲載し、授業で使った動画も配信して聞き逃しや勘違いや書洩らしなどを防ぎます。

●専門科目● ステップ・バイ・ステップで提示するオンラインならびに書籍の教材

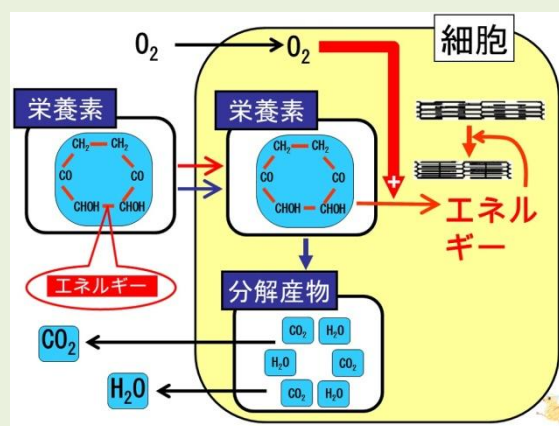
*その完成図を理解して初めて回答できる問題（項目16番に例）も「一步一步」サーバに掲載し、「一步一步の問題がテストにでる」と予告して、実際に翌週の授業でミニ確認テストを行っています。

*毎週のミニ確認テストで75点以上とることが単位取得のため必須条件であることを伝えています。問題はイラストの内容を理解しないと答えられないように工夫してあります（上記）。これにより、イラストを理解せざるを得ない状況にしているわけです。なお、授業中に合格できない学生のためには、始業時間前に再試受験の機会を提供しています。

*夏休みは前期のミニ確認テストを全部集めた「期末テスト」をオンラインで2日に1回受験することを課しています。

「一步一步」は初学者の「アクティブ・ラーニング」に最適のツールと思われます。

生体内の動きには、移動や（生成、分解などの化学的）変化などがあり、これらの動きが整理されなければ、生命科学を正しく理解した栄養士としての活動はあり得ません。そのため、「一步一步」では、移動、変化などを異なる矢印で示し、全教材を通じて矢印の使い方を統一させて、理解を促進しています。



たとえば、栄養素の基本的役割を示すイラスト（左図）では、栄養素が、栄養素を一つに結合させている化学的エネルギーとともに細胞内に入ること（向かって右向き赤と青の開いた矢印）、栄養素からエネルギーが取り出されること（右向き赤い開いた矢印）、その際、栄養素が分解されること（下向き青い三角形の矢印）、この変化が酸素により促進されること（下向きプラスのある赤い矢印）、分解産物であるCO₂とH₂Oとが細胞外に排出されること（左向き黒い開いた矢印）を示しています。

このように、移動は開いた矢印、変化は三角形の矢印のように、矢印を使い分けることなどにより、生命科学の最重要情報を端的に示しているイラスト、動画を1,000ほど作成してあります。

提示はステップ・バイ・ステップであり、ある程度のまとめである上記のイラストに至るまでに7つのステップがあります。各ステップに静止画、音声と動画とでの説明、クイズがあり、学習を強力にサポートしています。

提示はステップ・バイ・ステップであり、ある程度のまとめである上記のイラストに至るまでに7つのステップがあります。各ステップに静止画、音声と動画とでの説明、クイズがあり、学習を強力にサポートしています。

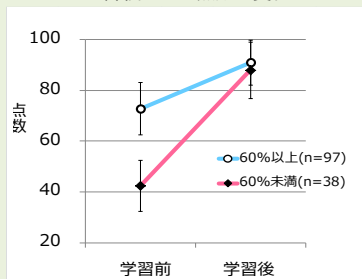
授業で特に使用
しているツールと
その活用法

●専門科目● ステップ・バイ・ステップで提示するオンラインならびに書籍の教材

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)

* 生命科学の重要情報が着実に理解・記憶されつつあります。

基礎的内容の「一步一步」学習による
評価テスト点数の変化

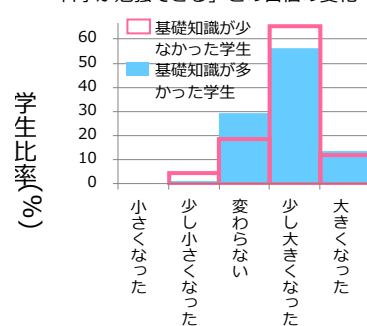


「先生ごっこ」の際、どの学生も思考回路をフル回転させています。低学力の学生が「先生ごっこ」の時間に初めて首を縦に振ることも少なくありません。質問も多いのです。高学力の学生にとっても、単に試験のための知識ではなく、一般の方へ説明する実践的な訓練となっています。生命科学の基礎的内容の学習前後では、左図のように点数が有意に、特に低学力者（ピンク）で、著増しています。

* 「一步一步」での勉強を放棄する学生は、長期欠席者などの例外を除き、ほとんど皆無です。解剖生理学の受講学生 193 名のうち 192 名が、13 のミニ確認テストすべてに 15 週の中で合格し、単位を取得しました。

* 学生の勉強に対する自信、意欲が高まっています。

「一步一步」学習による「自分は生命科学が勉強できる」との自信の変化



「一步一步」を使うことで小さな成功を多く経験できるわけであり、そのことが自信とさらなる勉強に対する動機づけとなっています。この作用は、基礎学力の低い学生（ピンク色線）に、高い学生（水色塗りつぶし）より有意に多くみられています。

学習成果の評価・ 測定の方法

- * 知識量に関しては、学習前と直後（再試前）での評価テスト成績
- * 放棄する学生の数は、再試の機会をあたえ、ミニ確認テストの進捗状況を個別に毎週フィードバックし、再試受験を促した結果
- * 自信、意欲に関しては学習後の匿名アンケート

本科目についての学 生からの評価

- ・ イラストで 1 から説明されるから、わかってきて楽しい
- ・ 記憶容量が少なく記憶維持期間の短い私でもしっかり残りました
- ・ 視覚によるイメージのおかげで学習効率がよくとてもわかりやすかったです
- ・ 考えるときは「一步一步」のイラストを思い出して考えます
- ・ 理解して取り組めた
- ・ とても親切だと思いました
- ・ 不安がなくなりました

学生の学習のあり方 や教授法の果たす意 味等に関する、担当 者の基本的な考え方 (教育哲学)

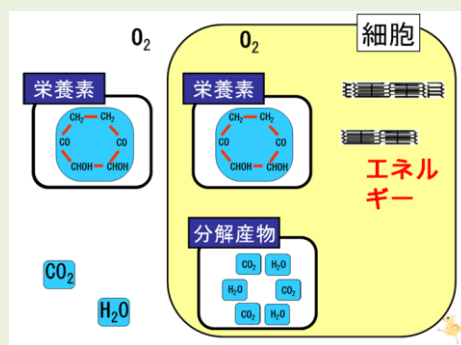
* 教育とは、教員がどれだけ書いたか、話したかではなく、学生がどれだけ書けるようになったか、話せるようになったか、であります。そのため、単に、学生の能動的な出力、すなわち「アクティブ・ラーニング」の機会を増やすだけではなく、出力しやすい環境を教育現場にいかに作るか、が重要と考えております。学生にテーマをあたえ「自分で調べてみんなに発表しよう」という課題は最終目標として必要です。同時に、ちゃんと調べることの苦手な低学力者も含めて「アクティブ・ラーニング」できる環境が必要と思われれます。それこそが「一步一步」の役割とっております。『「一步一步」のクイズに答えられるようになりなさい』ただだとしても、低学力者に対す

●専門科目● ステップ・バイ・ステップで提示するオンラインならびに書籍の教材

る教育にはなるとおもわれます。「一步一步」は低学力者に優しく、大きな効果をあげることが特徴です。

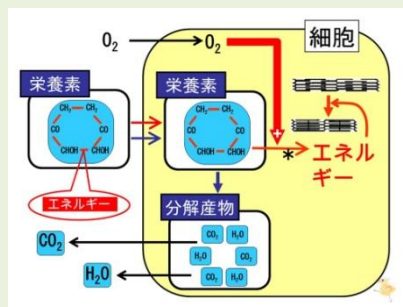
*「一步一步」の基礎的内容の予習を強制すると、知識量も自信も増大します。そのため、授業での「一步一步」を使った「先生ごっこ」は、学生に嫌悪感、負担感を抱かせることなくスムーズに展開できています。ステップ・バイ・ステップであるため、理解不足のステップを学生自ら気づくことができるだけでなく、そのステップの「音声と動画での説明」を手本にいつでもどこでも練習することもできるわけです。『クイズに答えられるようになりなさい』よりも高度な「アクティブ・ラーニング」を楽しく展開することができています。

印刷・配布用「白地図」



教材の種々の version

オンラインクイズ画面（正解選択肢をクリックすると「**正解!**」と表示される）



図中の*印が示しているのは

- 栄養素の分解
 - 栄養素からのエネルギーの取り出し **正解!**
 - 細胞による酸素の取り込み
 - 酸素によるエネルギー代謝の促進
 - 筋の収縮たんぱくの収縮
- である。

その他の特記事項

香川栄養学園公式サイト <http://www.eiyo.ac.jp/>>研究室>駒込キャンパス/生理学において教材の視聴可能。

個人的学習、引用の範囲内なら連絡なしで使用可能。

ケースメソッドⅠ

(12名の教員が異なる内容で開講。担当者は合宿形式の河川調査実習)

椋山女学園大学

教育学部子ども発達学科

野崎健太郎

科目の位置づけ	<p>保育者・小学校教師の専門性を高めるために、担当教員が各自の専門研究分野を活かしながら、保育および小学校現場が抱える課題を設定し、その解決のために受講生が自分から行動できる力を育む。学生参加型授業のため、定員20名までのセミナー形式で行われる。</p>
受講（登録）学生数	<p>2009年20名、2010年20名、2011年22名、2012年18名</p>
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> ①河川の仕組みを自然科学的手法で調べる意味を理解する。 ②川あそびを体験しながら河川の危険性と安全確保の方法を学ぶ。 ③河川など自然環境を用いた保育・学習指導案の立案と実践を通じて指導力を養う。
教育方法の特徴	<ol style="list-style-type: none"> ①木曾川上流部の長野県木曾町で夏期に4泊5日の合宿形式（集中講義）で行う。 ②専門学部である理学部や農学部の学部生対象の野外実習で行われている内容を実習する。 ③自然科学的内容の調査実習と並行して「川あそび」体験を重視する。 ④受講生は、普段の人間関係とは違う3～4人単位の班に分け、協同的な学びを体験させる。 ⑤受講生の安全確保のため、1回の実習で9～11名にして、2回実施している。 ⑥受講生の安全確保のため、外部専門家2名、TA2名、担当教員の5名体制で指導する。 ⑦教科書（日本陸水学会東海支部会編2010年）を用いた事前学習の重視。
教室空間の特徴	<ol style="list-style-type: none"> ①木曾川上流域：木曾川は、受講生の多くが暮らしている愛知県、名古屋市の主要な水道水源であり、その上流域を訪れることは、受講生の興味関心を喚起できる。 ②京都大学理学部附属木曾生物学研究所：実習中は、ここに全員で宿泊し寝食をともにする。特急列車が停車するJR中央線木曾福島駅から徒歩15分という地の利に恵まれている上、管理人1名が常駐しており、暖かい手料理が3食が提供される。このため、受講生は実習に専念することができる。 ③規模の異なる河川が隣接している：河川の仕組みは、その規模で大きく変化する。木曾生物学研究所の前には山地溪流の兎野沢（ちごのさわ）が流れ、徒歩5分で大規模な木曾川本流、そして町営バス20分で、兎野沢と木曾川の中間的な規模である黒川に行くことができる。つまり、限られた時間の中で多様な河川環境を体験することができる。 ④木曾町中心部に近い：木曾生物学研究所は深山幽谷の地ではなく、木曾地域最大の集落、福島町の市街地近くに位置している。そのため、買い物や散策を通じて、地域の方の暮らしに触れ、言葉を交わすことができる。現在、河川の上流と下流の交流の

●演習科目● 4泊5日の合宿形式集中講義

	<p>必要性が叫ばれているが、それが可能となる場所で実習している。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>1. <u>事前学習</u>：教科書を参考にしながら、以下3点の内容をA4用紙5枚以上の報告書にまとめる。①河川は物理的、化学的、生物学的要素から構成されている。河川上流、中流、下流の特徴をそれぞれ述べよ。用語についても意味を理解しておくこと。②化学成分の濃度は河川の上流～下流にかけて一般的にはどのように変化していくだろうか。また、濃度が高くなると河川環境にどのような影響があるのかを説明せよ。③現在、居住している地域の水道水源と浄化方法について調べよ。さらに、下水はどのように処理され、どこに流されているかを調べよ。</p> <p>2. <u>実習中</u>：1日目①事前学習の内容を解説しながら川の仕組みについて簡単に講義する。②研究所前を流れる児野沢にて河川流域の調査（地形測量、水質検査、生物採集、沢登り）。③宿舎にて水生生物の分類・計数。2日目①木曾川支流の黒川にて河川上流域の調査。②水泳、橋からの飛び込み、流木を集めてのたき火、魚釣り、わな（セルビん）を用いての魚とり、たき火にて焼きトウモロコシ。③水生生物の分類・計数。④水質分析の準備。⑤調査結果の整理。3日目①水質分析。②木曾川本流にて河川中流域の調査。③昨日と同じ川あそび。④昨日と同じ分析と結果の整理。⑤保育・学習指導案の立案と発表会。4日目①保育・学習指導案の準備。②黒川にて実践。③最終報告書（事後学習にあたる）を班で1部作成（A4用紙10～15枚程度）。5日目①報告書の発表会。②研究所の清掃。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p><u>調査・分析機器</u>：巻尺（河川の測量）、長さ1.5 m程度の竹の棒（水深の測定用）、水網（水生昆虫、水生動物の採集用）、釣り道具・セルビん（魚の採集用）、水温計、流速計（流量算出のための基礎資料を得るため）、分光光度計（付着藻のクロロフィルa量、河川水中の硝酸態窒素濃度の比色分析に使用）、電気伝導度計（水中の無機イオン濃度の測定）、パックテスト（簡易な水質検査のためpH、COD、硬度等）、実体顕微鏡（水生昆虫の分類作業）、生物顕微鏡（付着藻の分類作業）</p> <p>特に分析機器は、受講生には馴染みが無いが、本物を体験することで、本や新聞で見る水質や環境指標がどのように測定されているのかを知ることができると考え使用している。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>実習最終日の5日目に、受講生に対して「この実習を通じて、身についたと感じる力を3点挙げ、その理由を述べよ」と質問紙調査を行ったところ、2011年度の受講生21人62回答の結果は、上位3位が、①川を中心とした自然での遊び方(31%)、②安全配慮の方法(23%)、③人間関係力(20%)となった。上位2位は事前の質問紙で受講生が、この実習で身につけたいと考えていた力と同じであった。第3位の人間関係力は、事前質問紙では、22名中、わずか2名しか挙げていない項目であった。これが第3位まで躍進したのは、合宿生活、協同学習の効果であると考えられる。今、保育・小学校の現場では保育者・教師のチーム力、すなわち人間関係力(コミュニケーション能力)が求められている。この実習が、それを伸ばしたということは、大きな学習成果であったと結論できる。</p>

●演習科目● 4泊5日の合宿形式集中講義

学習成果の評価・
測定の方法

事前に「実習で身につけたい力を3点挙げ、その理由を述べよ」、事後に「実習で身についたと感じた力を3点挙げ、その理由を述べよ」、とそれぞれ質問紙調査を行い。受講生が何を求めて受講し、何を身につけたかを調べている。結果の一部は、上記「学習成果」の項目に記載した。なお、受講生各人への評価は、①事前学習報告書の質、②実習中の意欲的な取り組み態度、③最終報告書の質で総合的に判定した。

本科目についての学
生からの評価

本学の授業評価アンケート対象外科目なので意味ある記述はできないと判断しました。

学生の学習のあり方
や教授法の果たす意
味等に関する、担当
者の基本的な考え方
(教育哲学)

学びは、事前学習による学習への動機づけ（意義づけ）、授業本番での事前学習内容の確認そして修正、事後学習による振り返り、という3段階で定着するものと考えている。体験型の授業は、体験することが最も大切であるが、楽しく“体験”して、それで終わってしまう授業も多いと聞いている。そこで、本授業では、教科書を用いた理論的な事前学習、普段の学習生活では体験することがない本格的な自然科学的調査、班の仲間と議論しながら学びを振り返る最終報告書づくり、という流れを設定している。また、受講生にある程度の肉体的・精神的な負荷をかけることが、学びの定着を深めるとも考えている。

授 業 風 景



その他の特記事項

教科書：「身近な水の環境科学」日本陸水学会東海支部会（編）．朝倉書店，2010年
論文発表：野崎健太郎（2012）保育者・小学校教員養成課程における河川調査実習の立案とその教育効果．日本生態学会誌，62巻：51-58．

医療薬学演習

鈴鹿医療科学大学

薬学部薬学科

西村嘉洋

科目の位置づけ	<p>薬学科カリキュラムの中では「基礎分野」の「ヒューマニズム教育」に位置付けられている</p> <p>科目である。4年次後期に開講され、この時点で学生は薬学コアカリキュラムのほぼ全域の講義・実習は終了している。</p>
受講（登録）学生数	<p>100名</p>
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 実症例で提示される疾患の発症機構・薬物治療の妥当性を理解する。 2) 副作用早期発見に必要な、副作用と固有疾患との鑑別診断法を理解する。 3) 実症例から自ら問題を見出し、その解決法を自ら考える自己学習法を習得する。 4) 自己学習した結果を論理的にグループ内で発表し議論する能力を養う。
教育方法の特徴	<ol style="list-style-type: none"> 1) 実症例を使用した臨床教育であり、症例はすべて現場の薬剤師が作成した実症例（症例を集積している東海臨床薬学教育連携センターと協定を結んで使用許可を得た症例）となっている。 2) PBL方式による自己学習教育を実施している。10人で構成される小グループで毎回同一症例を使用して患者の臨床上的問題点、症例の薬物治療の問題点および症例の患者をチーム医療の中でケアする上での問題点を各グループで抽出する。その後、各学生が自己学習して1週後と2週後に学習成果をグループで発表・議論して、患者の薬学的ケアについてのグループでの方針を決定する。このグループ討議にはチューター(教員)が同席するが、チューターは各学生の発言内容を評価するのみで、教育的介入は一切しない。この過程で、学生は自ずと自己学習するようになる。1つの症例検討が終了した時点で症例の疾患、特に鑑別診断・診断手技についての講義（医師教員）と薬物治療と副作用早期発見手技についての講義（薬剤師教員）を行って総括するとともに、症例についてのテスト（類縁疾患の症例の問題点をSOAP形式でまとめる問題）を課す。
教室空間の特徴	<p>PBL方式のグループ学習は鈴鹿医療科学大学白子キャンパス1号館と5号館にある10室のセミナー室（6～9m×4～5m）で行っている。各セミナー室にはグループ討議が可能な大きなテーブルとイスならびにホワイトボードが設置されている。</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>第n回授業終了前30分：次回の症例が提示され、学生は問題点を抽出する（司会者の指示で症例を読む）。1) 患者の状態に関する問題点、2) 薬物治療上の問題点、3) チーム医療でこの患者をケアする上での問題点、4) 類縁疾患についての学習課題を抽出し、ホワイトボードに列挙した上で、共通する問題点をまとめる。</p>

●専門科目● 実症例を使用したPBL方式による自己学習教育

	<p>第(n+1)回：第n回で抽出した疾患上の問題点をどう解決したかを担当者がホワイトボードや自作の要約を使用して説明する。司会者はこの説明に基づいて、グループ内での議論を誘導するとともにグループでの結論を導く。</p> <p>第(n+2)回：第n回で抽出した薬物治療上の問題点・チーム医療に関する問題点どう解決したかを担当者がホワイトボードや自作の要約を使用して説明する。司会者はこの説明に基づいて、グループ内での議論を誘導するとともに症例の患者の薬学的ケアに関してグループで結論を導く。</p> <p>第(n+3)回：講義形式で、症例の疾患上の問題点の解決策と鑑別診断について医師教員が解説し、それを踏まえて薬物治療の問題点の解決策と副作用早期発見・回避に関して薬剤師教員が解説する。学習した症例の類縁疾患症例を使用した小テストを行う。上記のサイクルで4症例を学習する。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>自己学習には学生は図書館蔵書の薬学専門書・医学書・ガイドライン及び情報演習室のPCを使用している。PBL方式グループ学習での発表に際しては自己学習のソースを公表することを義務付け、ソースの種類をチューターが評価する（教科書・ガイドライン・レビュー誌を用いると評価が高い事を学生には周知している）。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) 学習とは教員が講義したことを理解し、記憶することと認識し、試験前でなければ教科書を開かなかった学生が、日頃から教科書を読み自ら学習するようになった。 2) この教科では教員から教えてもらいために、自己学習の重要性について認識するようになった（チューターは教えない・成績評価の大半は小グループでの発言内容で決まる）。 3) 人前で話すことが苦手であった学生が、自信をもってグループ内で発言するようになった。 4) 症例に基づく医療薬学は教科書や講義から学ぶものではなく、患者から学ぶものであるとの認識が芽生えてくる。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) 成績評価 毎回のPBL小グループ学習活動のチューターによる評価（60%）＋各症例小テスト（20%）＋定期テスト（20%）－無断欠席・無断遅刻 2) PBL小グループ学習活動の評価測定（チューターによる毎回の評価） 発言回数・発表内容・自己学習ソース・議論への参加・チーム医療についての議論・発言の論理性・司会者評価・記録者評価の8項目それぞれを細目評価段階(5段階)で点数評価する。
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>PBL方式の自己学習で全員が同じ症例を学習するという教育は他にないため、自己学習法が身についたと評価があった一方で、自己学習に時間を費やして他の教科の学習ができない・個別症例の学習のため系統的な学習ができないとの批判もあった。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当</p>	<p>医療薬学系の教科では「患者」の問題点を見出して、その解決法を導き出すことが重要である。「患者」から直接学ぶシステム（医学部で実施されていた患者を直接学生が診察するところから始まる「臨床講義」など）の構築が困難な薬学部では「医療薬学</p>

●専門科目● 実症例を使用したPBL方式による自己学習教育

者の基本的な考え方
(教育哲学)

演習」のような紙媒体で与えられる症例を使用した教育に頼らざるを得ない。紙媒体の症例提示は「患者から学ぶ」ための教材として相応の効果をもたらしたが、今後は高機能患者シミュレータによる症例提示で学生が能動的に患者情報を取得するシステムを取り入れていく必要がある。学生自ら問題点を見出して、その解決法を探る自己学習は、「患者から学ぶ教育」の実施で達成可能である。学生が患者（シミュレータでも紙媒体症例でも）から学ぶ姿勢を持てば、この患者の苦痛を取り除くためには、またこの患者を治すためには、何をどのように学習すべきかを自然と考えるようになる。この先、可能な限り実際の「患者」と類似したシステムで患者情報を提供して、患者を救うために学習するという意欲を引き出す教育を確立していかなければならない。

授業風景



ホワイトボードを使って図示しながら説明する学生



ホワイトボードを使って論点を整理する学生



司会者を中心にして症例の統括を議論する学生

情報心理学応用

千葉工業大学

情報科学部／情報ネットワーク学科

柴橋祐子

科目の位置づけ	第2学年後期（第4 Semester）において実施 第2学年前期（第3 Semester）「情報心理学」の後続科目
受講（登録）学生数	2クラス展開 各クラス約80名
科目の到達目標	心理学の研究法について理解するとともに、「課題探索－解決型」のグループ学習を通して実験や調査を自ら行うことのできる基礎的能力を身につける。
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的なグループ学習を取り入れた授業 <p>まず前半は講義形式で研究事例を紹介しながら、心理学研究法の概説、研究計画の立て方や基礎的統計処理について概説。後半は、実際に調査・実験を行う継続的グループ学習活動を8回にわたって展開。8回の授業の中で、各グループで、テーマの探索から調査・実験の計画、データ収集・分析、報告書の作成、発表までを行わせている。2年生という早い段階で、「課題探索－解決型」の継続的なグループ学習を取り入れることで、研究法に対する知識の定着はもとより、仲間との意見交換を通じた主体的な学習を促し、現代社会が求める「課題解決能力」や「チームで協力して取り組む経験」をもたらすと考えられる。</p>
教室空間の特徴	<p>履修者数の2倍の収容力のあるコンピュータ演習室を利用している。メリットとして、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・椅子を自由に動かすことができ、スペースにも余裕があるため、グループでの話し合いが行いやすい。 ・パソコンを授業時間中も自由に利用できることから、参考資料の収集・参照がしやすい（図書館データベース、Web上の授業用資料へのアクセスなど） ・実験・調査のための材料作り、データの入力や分析、報告書の作成等、データを共有しながらメンバーがそれぞれの進行状況に合わせて分担協力しながら作業を進めやすい ことなどがあげられる。
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>後半のグループ学習活動を取り入れている回の時間配分 (1)開始から20分間 全体講義（ウォーミングアップ）</p> <p>以前は、授業開始後すぐにグループ活動に移る方法を取っていたが、メンバー内で内容の理解度に差があり、グループがうまく展開していかない様子が見受けられた。また、グループの時間が長くなりすぎると、グループが苦手な学生にとっては負担感が大きく、そうでない場合も緊張が緩んで中弛みしてしまう様子が見られた。そこで、毎回授業の始まりの20分程度は一斉講義を行い、その日の学習活動に関わる内容について説明し、グループ学習への導入を図っている。</p>

●選択科目● 継続的なグループ学習を取り入れた授業

(2)60 分間 グループ学習

例えば後半の第 10 回では、その授業のグループ学習課題（終了時提出）として、①仮説を立て、実験や調査の方法をまとめる、②実験材料あるいは質問紙を作成する、の 2 つを提示。それに基づきグループごとに学習活動を進める。なお、教員は事前に各グループの進捗状況を把握し、特にアドバイスが必要と思われるグループに入って、フォローする。

(3)最後の 10 分間 まとめ（クールダウン）

その日やったことをグループごとに「振り返りシート」に簡単に記入し、グループ学習を一旦締括することができるように時間をとっている。この「振り返りシート」は A4 用紙 1 枚からなり、8 回の授業を通して利用。毎回、出席メンバーのサイン、その日の成果と次回までの課題、教員への質問等を記入する形式になっている。これを授業終了時にグループ別クリアーファイルに入れて提出、教員がチェック後、次時に返却するという形で行き来させている。グループ別クリアーファイルには、「振り返りシート」のほかにも話し合いのプロセスを記したメモや作成された質問紙など、グループの共通資料が保管され、提出物もこれを通して行っている。いわば、グループと教員の「連絡帳」のような働きを担い、一人の教員が多くのグループの進捗状況を把握する上で重宝している。また、グループへの指示や回答もこのファイルを通じて事前に記入しておくことができ、教員の指示を待つことなく、グループがそれぞれの学習活動を開始しやすくなるという利点がある。

(1)プロジェクターによるグループ学習活動の全体図の視覚的表示

グループでの学習活動中は、毎回、プロジェクターを用いて最終発表までの 8 回分のグループ学習の流れを表す全体図を常に表示するようにしている（教室内 5 箇所）。視覚的にスケジュールを表示しておくことはこの授業進行において重要な工夫点の一つである。この図には、各回の内容、次週までの自主学習、提出物の内容や提出日等が含まれている。簡単な図ではあるが、繰り返し視覚的に提示することで自己モニタリングの機会となり、学生にとっては次のような意味を持つと考えられる。

- ・今、学習活動全体のどこに位置し、どこを目指しているのか常に参照できる
- ・自分たちのグループの進捗状況をメンバー全員が一緒に確認できる
- ・遅れているグループも早いグループも自主調整しながら活動を進められる
- ・次の授業までに何をどの程度進めておく必要があるか共通に認識できる
- ・最終目標や提出物の期日を繰り返し見ることで、学習への緊張感が保たれる
- ・全体の方向性、枠組みがわかるため、グループ経験が少ない学生も話し合いを始めやすく、安心感をもって学習に取り組める

また、教員にとっては、この全体図を毎回示しておくことで

- ・各グループの自主的な調整を促すことができ、毎時の作業内容についての細かな指示を一々与える必要が少なくなる
- ・授業進行ペースの指標となり、すべてのグループを発表までたどり着かせることができるであろうかといった心配や焦りが低減され、学生の学習活動をしっかり見守ることができる
- ・調査や実験の手順についての学生の理解を自然に促進することができる

(2)授業支援システム

授業支援システムを利用し、グループが授業時間外に自主的に課題に取り組んでいけ

授業で特に使用 しているツールと その活用法

●選択科目● 継続的なグループ学習を取り入れた授業

	<p>るように、分析方法の資料や各グループの集計データ等をウェブ上に置くようにしている。共通のデータを利用できることはとくにグループ学習活動の展開において重宝している。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すべてのグループが課題の設定から発表・報告までの一連の課題を最終的に成し遂げた。到達段階には差がみられるものの、積極的な意見交換や授業時間外の自習等を行う姿が頻繁に見られ、グループのメンバーと共に課題の達成に向かう中で、主体的な学習活動が展開されていた。また、途中でドロップアウトする学生がきわめて少なく、メンバーのつながりによって遅れがちな学生も何とか諦めずに学習に参加し続けることができた。 ・発表の際、全員が記入した相互評価シートの記述をみると、他のグループの行った調査・実験に対して、受け手としてクリティカルに評価しているコメントが数多く確認された。こうした見方ができることは、心理学の研究法への理解が深まったことを示す一つの重要な成果と言える。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>前半では、研究方法に対する理解や統計処理に関する知識を試験により評価。後半のグループ学習活動の成果は、グループの提出物（3回）と最終報告書、発表、および他のグループの発表に対する個別の相互評価シートを対象として担当者がそれぞれ段階評定により評価し、総合評価を行っている。評価の基準については授業初回に十分説明し、後半はグループ評価のウェイトが大きいことを了承の上、受講するように伝えている。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>この授業は筆者の座学の授業に比べると授業満足度調査の総合評価は高めで、毎年の結果を平均すると4.0(5段階評定)となっている。特に「この授業に積極的に参加した」という項目が高かった。また、授業終了時の感想では、よかった点として、これまで話したことのなかった学科の仲間と知り合え、意見交換ができたことや、自分たちの興味のあることを調べるのは面白かったといった記述が数多くみられた。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>受身ではなく、主体的に学習を進め、仲間と共に課題に取り組むことは、学ぶことの達成感をもたらす。継続的なグループ学習は、そうした目標を実現しやすい一つの有効な方法であり、他者との共同作業の経験が少ない学生にとっては、とりわけ社会に巣立つ上での重要な学習経験となる。しかし、グループになじめない学生や停滞するグループなど授業運営上対処を要する困難な問題も生じやすく、それらに注意を向けながら、一人の教員がグループ全体を見渡し、進行させていくのは労力と勇気が要ることでもある。こうした中で、筆者が大切にしているのは、一言で言えば、つかず離れずの距離でグループの力を信じて待つということ、それがこの授業運営を支えているように思われる。ただし、それは何もしないただ学生を信じるということではなく、本稿であげたようなこまごまとした工夫やその他にもグループ導入における配慮を重ね、グループの自主的な学習を促すような環境を作っていくことによって成立すると考えている。</p>

基礎ゼミ A

中京学院大学

経営学部経営学科

須栗大、林雪華、関谷次博、池田ひでみ、青島秀海

科目の位置づけ	<p>平成 23 年度より、本学は 1～2 年生を対象とした初年次教育として基礎学力向上プログラムに取り組んでいる。基礎学力向上プログラムは、日本語（国語）、英語、社会科学（数学）、情報をベースとし、基礎ゼミ A は、そのうちの社会科学にあたるものである。1 年生・春学期（前期）必修科目となっている。</p> <p>プログラムを通じて養われる能力として、すべての科目において読解力や表現力をつけさせることが教授されているほか、社会科学と情報では基礎数学に関する能力で相互連携したものとなっている。</p>
受講（登録）学生数	<p>1 年生全員（154 人）</p>
科目の到達目標	<p>統計データを指数、成長率、構成率の計算によって数的処理し、計算結果を図や表であらわした後、変化や比較といった分析の内容をレポートとしてまとめることができる。</p>
教育方法の特徴	<p>数学能力を向上させるための方法として、単純に与えられた数式を解く方法ではなく、GDP 統計データという実用的なデータを用い、数的処理に際しては電卓を使い、図表の作成には方眼紙と定規を使って手書きさせる方法を採用している。その目的としては、データ処理を通じた問題発見の方法を学習すること、ならびに手作業による計算、作図の身につけやすさにある。</p>
教室空間の特徴	<p>1 教員の授業管理能力を 30 人前後に設定し、それを 1 クラスとして、同一授業を複数教員で担当している。そのため、教室の規模も 1 クラスが収容できる小教室を用いている。</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>第 2 回の例</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. GDP 統計データの読み方を説明する。（10 分） 「国民経済計算年報」を用いて、1988 年から 2009 年までの国内総生産（GDP）の推移を読み取らせる。 2. 1988 年の GDP を 100.0 として、GDP の推移を指数化する。（40 分） 指数計算を、電卓を用いて計算し、計算結果を方眼紙と定規を用いて表にする。 3. 表を参照して、文章問題を解き、その解説をする。（20 分） 4. GDP に関する補足説明をする。（10 分）
授業で特に使用しているツールとその活用法	<p>クラス単位で電卓、定規、方眼紙、レポート用紙が準備されている。電卓は数的処理の際に用い、定規と方眼紙は図表の作成の際に、レポート用紙は文章題や説明をメモするノートとしても用いる。</p>

●教養科目● データ処理を通じた問題発見方法の学習

<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>指数、成長率、構成率の計算ができるようになり、入学前にはできなかった数学の問題が解けるようになった。また、統計データを適切な方法で計算し、図表にあらわすことができるようになった。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>本学の数学入試問題（受験生全員に実施）を常識テストとして講義中に実施し、数学能力向上の成果を見るとともに、最終回で指数、成長率、構成率の小テストを実施している。クラス制を採用しているため、クラス担当の教員は個々の学生の進歩の度合いを授業中の作業を通じて確認することができる。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>基礎ゼミ A の授業アンケート結果の自由記入欄から数点をあげると以下であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ GDP 統計データ、指数・成長率・構成率の計算など、最初は分からないことが多かったが、次第に理解できるようになった。 ・ GDP 統計データから見るとという経済学の勉強が新鮮であった。 ・ その他の授業（情報など）とも併行しているため、毎回復習ができ、記憶にも残りやすかった。
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>基礎ゼミ A は本学の初年次教育である基礎学力向上プログラムのなかの社会科学（数学）にあたるものである。社会科学における学習を通じて、3 年生以上の専門科目を学習するにあたって、(1)統計データに数的処理を施し、得られた結果を分析できる能力、(2)レポートや書類等を定められた基準にしたがって作成できる能力、を身につけさせようと考えている。</p>

実践科目 A

筑波学院大学

経営情報学部 経営情報学科

井桁碧 金久保紀子 亀田千里 小松進 佐野司 横瀬弘幸

<p>科目の位置づけ</p>	<p>卒業単位 124 単位中 4 単位をしめる実践科目 A（1 年対象）実践科目 B（2 年対象）は本学の教育目標の一つである「社会力の育成」を目指した、重要な必修科目である。学内だけでなく「つくば市をキャンパスに」という考え方の下、つくば市や県内で行われる市民や自治体企業によるさまざまな活動に学生が参加し、実務を行う。経営感覚と情報スキルを身につけることで、卒業後すぐにビジネス社会で活躍できる自立した人材を養成することを目的にした経営情報学部の基本となる科目である。複数の教員がチームティーチングを行い、学生への個別面談を通して学生の資質を把握しながら、学生に自分と社会とのつながりを意識させることを目的としている。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>平成 23 年度 1 年生全員（139 名） 平成 24 年度 1 年生全員（163 名）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学 4 年間の学びや卒業後のキャリアについて見通しをつけ、大学生活へのスムーズな導入を行う。 ・大学での学習の基礎を作る（学習の方法および資料の収集と整理の仕方を習得する、教職員とのコミュニケーション力や手続きを確実にを行う力をつける） ・学外での体験型社会参加活動を行い、社会との結びつきを体験し、それを言語化できるようにする
<p>教育方法の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学版「調べ学習」と「体験学習」を行う。何のためにその活動を行うのか、目的の確認と活動の振り返りを毎回確実に実施する。 ・「つくば市をキャンパスに」という活動理念を実現するため、学生自身につくば市に関する情報の収集をさせた後に、つくば市職員からの講義も行う。その後、社会力コーディネーター（社会参加活動のための特別スタッフ）が体験的な社会参加活動についてのオリエンテーションを実施する。 ・手続きを経て社会参加活動を行うことを重要視する。必要な情報が入ったメールや所定の書類を用いた手続きが完了できないと社会参加活動ができない。 ・社会参加活動に当っては、事前に学生に自分が活動を行う団体について十分な下調べをさせる。活動終了後は、まとめのためのレポートを作成し、授業内や学年内で報告会を行う。教員は、それらの言語化がわかりやすく行えるようなサポートを行う。 ・授業内で得た資料・レジメ、ワークシートなどすべてをファイル（ポートフォリオ）として蓄積する。
<p>教室空間の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全学年一斉に行う授業と、3 グループに分ける授業で、使用教室を変えている。同一授業内であっても内容に応じて教室を移動させる。 ・さらに小さなグループで活動する場合は、机椅子が可動式の教室を活用する。 ・大勢の前での発表が苦手な学生に対応するため、社会参加活動の体験発表はグループに分かれて発表することを必須とし、その後学生相互の評価により選ばれた学生は学年報告会を公開で実施する。

●必修科目● 大学版「調べ学習」と「体験学習」

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>平成 24 年 7 月 23 日 (月) 実施 「マナーについて考える」 【それまでの授業の流れ】 ・つくば市について知る活動・つくば市職員の方による市の活動紹介 ・高校時代までの自分自身に関する振り返りと今後の見通しについてのアセスメント・社会参加活動についてのオリエンテーション 【授業目的】 社会参加活動に出る前に言葉遣いや大人として守らなければならないマナーについて、学生が意識できるようにする。 1)集合 中規模教室 (180 人収容) 2)PPT による説明 教員による説明・ 35 分 学生への問いかけを増やす 例：注意すべき点は？ この場面で重要なのは？ PPT のスライドの資料は説明終了後に配布 3)ワークシートによるグループ活動 1 問ごとに話し合いと全体での討論を繰り返す 50 分 内容例：社会参加活動で想定される場面・トラブルを設定し、「あなたは、どのように動きますか。」と問う。 グループ活動：場面について、PPT での説明を元に、意見を交わし、自分なりの解決方を考える。 4)まとめ 社会参加活動の意義をもう一度確認し終了 5 分 ワークシートを提出 【ワークシートの扱い】 ・出席の確認を兼ねる・担当教員による添削、コメント記入・後日返却・ポートフォリオに綴じる 【最終的に】 本授業の目的・役割について学期末に再度振り返りの機会を持つ</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ PPT を用いた説明：手持ちの資料を渡してしまうと、それに集中してしまう傾向があるため、できるだけ顔を上げて授業の活動に参加できるようにする。スライドは別途印刷し配布する。 ・ 映像資料：社会参加活動のイメージを作りやすくするため、先輩がしてきた活動に関する画像・映像資料を多用している。 ・ 新聞資料：社会参加活動について先輩が執筆した新聞記事、社会参加活動について取り上げられた新聞記事を読む。
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の基本的な作業として、図書館やインターネットを利用した資料の収集およびその蓄積ができるようになる。 ・ 教員とのワークシートを介したやりとりによる文章作成のスキル、および社会参加活動の報告を通して自らの活動をわかりやすく言語化するスキルを身につける。 ・ 手続きを正確に、期日を守って行うことの意味を理解し、守るような習慣を身につける。 ・ 社会参加活動を通して、大学の後に急に社会に出て行くのではなく、大学生として社会の中で果たせる役割があることに気づく。 ・ 社会参加活動を通して、あいさつやマナーの重要性に気づき、実践できるようになる。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 分の 2 以上の出席を前提として、以下の 3 点について評価を行う。 1) 1 回型社会参加活動に所定の手続きを経て参加し、「最終レポート」を作成し、グループ内での発表を行うこと 2) 提出を要求されたワークシートに必要事項を記入し、提出すること 3) 指定のワークシート、社会参加活動レポートについて、グループ担当教員による添削指導を受け、完成させること ・ 点数配分：ポートフォリオ (ファイル) 50% 社会参加活動レポート 50% ・ ポートフォリオの提出は 2 回 (前期終了時・後期終了時)

●必修科目● 大学版「調べ学習」と「体験学習」

本科目についての学生からの評価

- 【学生のアンケート結果から】
- ・必修であるから仕方なく社会参加活動を始めたが、実際に参加した後はその意義を理解することができた。（「楽しかったし意義があった」「楽しくはなかったが意義があった」計 86%）
 - ・実践科目を通して得られたもの（精神面）は主に、達成感・仕事の大変さ・協調性。
 - ・友人と遊びのつもりで参加した活動より、自分で考えて選んだ活動の方が身につくものがある。
 - ・普段関われない人との出会い、大人とのコミュニケーションスキルの重要性を感じる。
 - ・なぜ授業でつくば市のことを集中的に取り上げるのか、よくわからなかったが、社会参加活動を行ってその理由がわかった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

本学の実践科目 A は、学習の基礎を作るのと同時に、本学の学生としての意識を高め、かつ社会に出て行くことを意識させることを目的にした科目である。社会参加活動とその前後の学内での学習を通して、学生たちはサービスラーニングを実践し、地域社会で自分にできることがあることを知り、かつ自分が未熟であることを意識できる。そういった体験を持って学内での専門科目を学ぶことで、より主体的に、具体的に取り組むことができるようになる。

学内での学習の際も、学生に身近な課題や場面を取り上げることで、自ら考える習慣をつけるような素材を提供することを常に心がけている。

授業風景



←【つくば市役所職員（外部講師）とのやりとり】

【授業中の課題についてのグループでの話し合いの様子】→



その他の特記事項

「実践科目 A」は平成 18 年度現代 GP に採択された「つくば市をキャンパスにした社会力育成教育」の教育プログラムを基礎にした科目である。この科目を実施するにあたり、本学は平成 17 年につくば市と「筑波学院大学とつくば市との連携に関する協定」を締結した。

学校教育相談

常磐会学園大学

国際こども教育学部 国際こども教育学科

佐谷 力

科目の位置づけ	<p>「児童教育コース」と「あそび文化コース」の「コース専門基礎科目」の一つとして位置づけている。教員免許取得のための必修科目でもある。いわゆる教育相談の講義にとどまらず、日常的な学校教育場面で、卒業後すぐに実践に活かせるようにしている。</p>
受講（登録）学生数	<p>69名（小学校志望38名と保育士・幼稚園志望31名に分けて開講）</p>
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもや保護者とのかかわりの基本姿勢を理解する ・教育に関する事例や命題への対応について、まとめて話す力、受け止めて聴く力を養う ・ロールプレイを通じて、子どもや保護者の視点で考えられる力を養う
教育方法の特徴	<p>教育現場での指導に関して、「自分で考えてみて（やってみて）、他の人の意見を聞き、話し合い、まとめ、発表し、整理する」という参加体験型の学びをする。</p> <p>形態は、主に次の二つの授業展開をとる。</p> <p>① 教育現場での事例や課題への対応について、「個人の考察」「グループ（4名、メンバーは毎回変更）での討議」「討議内容の全体への発表」「教員による解説と整理」という流れで学習し、各段階ごとに個人でプリントに要点をまとめ、次回までに提出する。</p> <p>② 具体的な「子どもへのかかわり」「保護者に対してのかかわり」について、与えられた課題についてグループ（3名、メンバーは毎回変更）ごとに「ロールプレイ（役割演技）」「ふりかえり」「対応モデル（シナリオ）を使っての教員の解説と要点の整理」という流れで学習し、気づいたことなどをまとめ、次回までに提出する。</p>
教室空間の特徴	<p>多目的教室 机（三人掛け・固定式）12×4列</p> <p>1クラスの学生数は35名前後であり、グループ討議（4人1組）・ロールプレイ（3人1組）の時は、他の組と離れて広くスペースを使えるので、集中できる。（現状では広い教室を使用できているが、受講者数程度の小さい講義室でも授業は可能）</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>ロールプレイの授業に入る前に、授業2時間分で基本的な傾聴の技術についての説明と演をし、簡単なロールプレイ（与えられた設定の役割に応じて、2人で短い対話をする）も2～3体験させておく。その上で、次の3課題を授業で実施する。</p> <p><子どもとのかかわり（ア）「いじめられている子ども」></p> <p><子どもとのかかわり（イ）「虐待が疑われる子ども」></p> <p><保護者とのかかわり（ア）「子どもの暴力行為への注意に関する苦情」></p> <p>ここでは、ロールプレイの最終の授業（全体15回のうち10回目）<保護者とのかかわり（イ）「子どものいじめに関する相談」>の展開を説明する。</p> <p>（1）ロールプレイの準備（10分）</p>

●専門科目● グループ討論・ロールプレイ等を通じた参加体験型の学び

学生を3(～4)名のグループに分け、保護者役と、担任役及び観察者を決めさせる。その上で、ロールプレイの設定として、情報カードをそれぞれ保護者役(「子どもが服を汚して帰ってきた状況等」と、担任役(「該当する子ども2人とクラスの状況等」)の学生に与える。特に保護者役の情報には、「質問すべき項目」「要求する内容」等を具体的に示し、教員役が苦慮する状況を生み出す工夫をしておく。観察者には、両方の情報を与える。

(2) ロールプレイの実施とふりかえり(30分)

それぞれに自分の役割と情報について整理確認させた後で、10分間のロールプレイを行う。「始め」の合図をしてから、各グループのロールプレイの進み具合を見て回りながら、早く終了したグループには各自の「ふりかえり用紙」(例・・・「観察者」
1 担任の聴き方・話し方について感じたこと 2 全体の流れで感じたこと 等)への記入を促す。

ロールプレイと「ふりかえり用紙」の記入の後、グループで「ふりかえり」をする。

(3) 発表と解説(40分)

学生数人に「気づいたことや」「感想」を発表させる。

次に、解説用に作成した対応モデル3タイプ「シナリオA(保護者の不安に共感できていない対応) B(明確に答えや方針を示せない対応) C(傾聴しながら保護者の信頼と協力を得られる対応)」を配布して、学生にそれぞれの具体的な違いを考えさせ、数人に発表させてから、教員が解説をする。(対応に苦慮した後なので、聴く意欲・関心が高い)

(4) まとめ(10分)

今回のロールプレイでの、学びの目標「保護者は、子どもを育て伸ばしていくために、一番重要なパートナーである。いかに連携し、信頼関係を築き、協力していけるか、そのためにはまず何が必要かということを考える」について再確認する。

まとめとして、「保護者とのかかわりの基本」(授業のオリジナル)を整理する。

<担任として>・・・略 <避けるべきこと>・・・略

<かかわりの基本「かきくけこ」>

- ・か 顔を見て
- ・き 共感うなずき
- ・く くりかえし
- ・け 傾聴してから
- ・こ 攻守交替

最後に、学生に「今日の授業で学んだこと、気づいたこと」を整理させ、「ふりかえり用紙」に記入して、次回までに提出させる。

授業で特に使用しているツールとその活用法

・パワーポイント

<提示する内容> ロールプレイの事例説明、ロールプレイ中の残り時間の表示や保護者役への指示(話の展開の中で、保護者役としての要求や質問等を適宜表示)、「ふりかえり」の進行の仕方と内容の指示、要点整理と解説

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)

集団討議において、重視したのは「聴くこと」の指導である。話し手の方に身体を向ける。納得できれば、大きくうなずく。そして、意見発表や全体発表では、次の点を特に指導した。まず要点をまとめて話す。聴き手を見ながら話す。場面に応じた声量を出す。

それらについて、学生の変化成長を随時ほめることを心がけて進めた。結果として、聴く姿勢が明確に良くなり、学生自身が話すことに慣れと自信を得たと感じている。

ロールプレイの授業においては、学生がアンケートに書いた一部を引用しておく。

●専門科目● グループ討論・ロールプレイ等を通じた参加体験型の学び

「親、子ども、教員など様々な視点から事例を見ることができたので、私自身の考え方、視野も広がった。」「相手役になることで、どういう言葉や態度をしてくれれば、受け入れやすいのかということも、やってみて気づきました。」「何回も継続してロールプレイをしていくうちに、共感やうなずきの仕方を体で覚えることができました。」「何気なくやってしまう自分の癖が見えてきたり、多くの発見もしました。」学生たちは、他者の視点を体験でき、自らの聴き方の改善すべき点についての気づきを得ることができている。

学習成果の評価・ 測定の方法

- ・ロールプレイ終了時に実施する「ロールプレイに関するアンケート」
- ・試験における「保護者とのかかわりとロールプレイに関する出題」
- ・大学全体で実施する「授業アンケート」

本科目についての学 生からの評価

<ロールプレイに関するアンケート>より抜粋

「ロールプレイの実施が、自分の授業への取り組み姿勢や学習意欲を高めた。」

そう思う 68.6% まあそう思う 31.4% あまり思わない 0% 思わない 0%

<大学全体の「授業アンケート」>より抜粋

「授業は興味や関心の持てる内容でしたか」 4.62 (5点満点 全科目平均 3.86)

「意欲的に出席し、熱心に参加しましたか」 4.49 (5点満点 全科目平均 3.92)

学生の学習のあり方 や教授法の果たす意 味等に関する、担当 者の基本的な考え方 (教育哲学)

参加・体験型の授業で、取り組みの後で学生に「学びがあった」「もっとやりたい」と感じさせるためには、「取り組みの目標と意義を十分説明し、動機づけを高める」「やっただけで終わったり、各自の思いを述べあうだけのふりかえりで終わらせない」「学びを整理して具体的に要点を提示する」ことが重要である。

どのように重要な真理であっても、受け取る側の学生の心が閉じていたり眠っているでは届かない。届けるために、いかに学生の心を耕し、揺さぶり、好奇心や探究心を呼び覚ますか。

そのためには、まず教材の工夫に取り組むことだ。将来必ず直面しそうな現実的な事例を考え、理念的に「共感して聴く」というものでない具体的・实际的・効果的な聴き方を実感できる対話のシナリオを作る。それを活用して、学生に考えさせ、語らせ、意見をぶつかり合わせ、試させて、心を動かす。まず悩ませ、苦心させてから、そこで具体的な方策や重要な真理を提示する。そういう授業の構成や展開を考えることが必要である。

授 業 風 景



協働研究セミナーBasic A

常葉学園大学

外国語学部 グローバルコミュニケーション学科
谷口 茂謙 戸田 裕司 増井 実子 谷 誠司

<p>科目の位置づけ</p>	<p>1年次前期の必修科目。この科目は、後期の Basic B、2年次の協働研究セミナーIA・IB（いずれも必修）とともに、一連の科目群を構成する。協働研究セミナーは、2年間で、社会人基礎力を養成することを目指す。その最も基礎となる訓練をする科目が Basic A である。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>57名</p>
<p>科目の到達目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学科内で新しい人間関係を構築して、4年間の学生生活を円滑にスタートさせる。 ・傾聴力と発信力を訓練するとともに、規律性と柔軟性を身につけ、日本語によるコミュニケーション能力を向上させる。 ・4年間の学びに関する各自の計画を考えることにより、大学で何を学ぶかを把握させる。
<p>教育方法の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンパスマップの作成、友だちインタビュー、先生インタビューの3つの課題を、学生たちが協働して達成する。（活動の中で、教員は主にファシリテーターの役割を務める） ・4名の教員が事前の打ち合わせを密に行い、クラス別に小グループで課題に取り組ませる。学生たちの話し合いにできる限り多く時間を与えるが、それでも、お互いの理解が不十分であることを実感させることで、コミュニケーション力の訓練の必要性に気づかせる。 ・4名の教員がクラスごとに行う授業ばかりではなく、2クラスあるいは4クラス合同で課題の発表を行い、お互いの成果を知ることにより、大学と仲間が理解でき、学生各自が自分の居場所を見つけ、大学に対して愛着を持つことができるようになる。
<p>教室空間の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスごとに行う授業の場合、小グループに分かれて学生たちの話し合いや作業ができるように、所属人数の倍以上を収容できる教室を使っている。 ・黒板、PC画面が投影できるプロジェクタとスクリーン、無線LANの環境がある以外は、教室空間に特徴と言えるものはない。
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p> <p>第7回 友だちインタビュー1 (キャンパスマップの課題)</p>	<p>1) 前回の復習と新しい課題の目的の説明 5分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・良い先輩と関係を築くには、自分から行動を起こさねばならないことを確認させる。 ・行動を起こすには、相手に話しかけ、耳を傾け、質問する必要があることに気付かせる。 ・友だちインタビューを行い、相互理解コミュニケーションを学ぶことを理解させる。

●専攻科目● インタビューを軸にした協働学習

が合同授業での発表まで終わった。

第6回に「先輩と知り合う」と題した回を設け、就職活動を終えた先輩や学友会活動に取り組んでいる先輩など、活躍中の先輩学生の話聞いた。その後、新しい課題に入った1回目の授業である。各教員がクラスごと[14~15名]に行う)

2) インタビュー1の準備 10分

- ・「私の大切にしている物」をテーマとし、学生各自に、話す立場から「話したい事柄」、聴く立場から「話してくれそうな質問」を、箇条書きでできるだけ多く書き出させる。

3) インタビュー1 15分

- ・二人一組のペアにさせ、それぞれの役割を交代して5分ずつインタビューをさせる。

4) インタビュー1のまとめ 10分

- ・相手の話を、読み手にわかりやすく配慮させながら、10行程度の文章にまとめさせる。

5) インタビュー1の問題点の洗い出し 15分

- ・話す立場と聴く立場から、「うまくいったこと」と「うまくいかなかったこと」を学生各自に、それぞれ少なくとも3つずつ、箇条書きで書き出させる。

- ・話す立場から「うまくいかなかったこと」について、ブレインストーミングの形式で（出た意見に対して批判は一切しないことを徹底させる）全員に意見を出させる。

- ・聴く立場から「うまくいかなかったこと」について、ブレインストーミングの形式で全員に意見を出させる。

6) 解決策の検討 15分

- ・各自が書いた「うまくいったこと」を基に、「うまくいかなかったこと」に対する解決策をブレインストーミングの形式で、全員に意見を出させる。

- ・資料「良いインタビューの一例」を読み、出された解決策に不足する点を補いつつ、「相手の話の要点を自分の言葉で言い換える」ことにより、相手が「わかってくれた」と感じて、もっと話そうという気持ちになることに気づかせる。

7) インタビュー2 10分

- ・1とは異なる相手でペアにさせ、役割を交代して5分ずつインタビューをさせる。

8) インタビュー2の振り返り 5分

- ・学生各自で、1との違いについて5行程度の文章にまとめさせ、提出させる。

9) 授業のまとめ 5分

- ・相手を話す気にさせるには、要点を自分の言葉で言い換え、「わかってくれた」と感じさせることの重要性を再確認させる。

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・PPT：授業の要点をスライドにして提示したり、学生たちが出した意見を入力して提示したりすることにより、理解や議論を深めるために活用している。

- ・振り返りシート：毎回の授業の最後に、当日の授業で学んだことを、短い文章に書かせ、提出させている。これにより、15回の授業で何を学んだかを、学生たちが自分で振り返ることができるようにしている。

●専攻科目● インタビューを軸にした協働学習

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・相手とコミュニケーションするためには、自分から話しかける（行動を起こす）こと、相手の話を傾聴すること、自分の言葉でフィードバックすることが、不可欠であることを理解し、それを実践しようと心がけることができるようになった。
- ・自分が理想と考える成果が、必ずしもチームとしての最高の成果ではないことに気づき、自分の考えを柔軟にして、チームとして最高の成果を出すよう努力できるようになった。
- ・大学の学習環境ばかりでなく、自分たちの仲間や教員がどのような人物かを理解して、大学全体に対して親近感を持つことができるようになった。

**学習成果の評価・測定
の方法**

キャンパスマップ、友だちインタビュー、先生インタビューの各課題の終わりに、成果物としてのマップやインタビュー記事を提出させ、各教員が担当学生を評価した。また、各課題の合同発表の際に学生たちによる評価を提出させ、それと教員の評価を合計した。(グループでの提出物や発表はメンバー全員に同じ評価を与えた)最後に、期末レポートを提出させ、各教員が担当学生を評価し、すべての課題の点数を合計して、各学生の最終評価を決定した。

なお、評価の基準については、4名の教員が事前集り、率直な意見を出し合って議論し、各自が考える基準をお互いにすり合わせた。また、この科目は必修なので、教員による「甘い・辛い」の差が、最終評価に著しく出ないようにするために、成績提出の前に再度集まり協議した。評価については、教員も協働して慎重に配慮することに心がけたつもりである。

本科目についての学生からの評価

学生に対するアンケートの結果、大学についての理解や仲間作りができたことについては、特に高い評価を得られたが、先輩との関係作りについては、評価が低かった。しかし、この授業があった方がよいと考える学生が、57名中48名を占めたので、全体として、学生から高く評価されたと考えられる。また、全部で10の自由記述が寄せられたが、「社会が必要である」など、好意的な立場からの意見が8つを占め、残り2つも改善意見であった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

- 「協働」が基本の考え方なので、学生たちが自主的に仲間と協力して課題を達成することを授業の中心に据えた。そのため、授業の中で、次の事柄を折りに触れて強調した。
- ・チームの中で与えられた役割は、誰かが代わりにやってくれることを期待するのではなく必ず責任を持って自分で遂行する
 - ・分担した調査や発表などを欠席すると仲間と大きな迷惑をかけるので、準備すべきことをきちんとやって、必ず授業に出席する
 - ・仲間の努力の成果に耳を傾け、自分の考えを述べ、より良い結果につなげる努力をすることによって、仲間との信頼関係ができ、より良い人間関係の構築につながる
 - ・自分の領域を守り、そこから出なければ、相手を傷つけることもなく自分も楽だが、そのような人間は、社会で必要とされる人材には決してなることができない
 - ・積極的に人間関係を築き、仲間と力を合わせて働くことができ、自分たちの置かれた環境の問題点を見つけ、その改善を仲間とともに考えられる人材が、

●専攻科目● インタビューを軸にした協働学習

社会で必要とされる

・これからの4年間を、仲間たちとより充実した学生時代にするために、この授業で、その基礎作りをしてもらいたい

こうすることで、欠席をほとんどなくし、学生一人ひとりに、学科の学生の一員であるとの意識を持たせることができ、授業に対する前向きな姿勢を作ることができたと考える。

その他の特記事項

なし

商学実習

函館大学

商学部商学科
若松裕之他 7 名

科目の位置づけ	商学の実地の問題に触れることで、学問分野への関心を高めるとともに、基本的な分析スキルを身につけることで、理論的な学修や本格的な分析への準備とする。
受講（登録）学生数	約 15 名ごとに 8 クラス（必修）
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 見学および調査により商学の実地の問題への関心を持ち、問題を見出すことができる。 2. アンケート・観察などの調査を基に分析を行うことができる。 3. グループ・ワークに参加し、成果をまとめることができる。 4. プレゼンテーションができる。
教育方法の特徴	<ol style="list-style-type: none"> 1. 見学、アンケートなど教室外、授業時間外の活動を求めることで、学外の人と専門的な問題についてコミュニケーションをとることを体験させる。 2. 実地の問題に対して取り組むことで、教科書的ではない考察をする場面を体験させられる。 3. 聞くだけ、座っているだけでは学修にならないこと、正解がないことを体験させ、主体的な学修を理解させる。 4. 問題をとおして、地域への関心・理解が深まる。 5. 学生から教員へ、学生から学生へのコミュニケーションが必要になるので、コミュニケーション力を高めるとともに学生の抱える問題の把握につながる。
教室空間の特徴	自由に配置できる移動型の机・椅子。無線 LAN 等の PC 環境。授業時間外にも同じ教室を利用できるように配慮。
特定の回の授業の流れ・時間配分	目標 研究テーマの決定 <ol style="list-style-type: none"> 1. グループごとに考えてきたテーマ候補を発表（5分）。 2. 教員からコメント(10分)。特に、そのテーマの問題点はどこにあるか。それを分析することの意義はどこにあるか。を訊く。 3. グループごとに再検討（20分）。 4. 検討結果の発表（5分）。 5. 教員からコメントしながらテーマの仮決定（5分）。 6. 仮決定したテーマについて分析方法を検討。研究計画書作成（25分）。 7. 研究計画書添削。問題点を指摘し、次回までに検討すべき課題を提示する(15分)。 8. 振り返りと今後の進め方の確認（5分）。

●専門科目● 実地の問題を通じた体験を重視する授業

<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>特別なツールは使用せず、普通のエクセル、ワードおよびインターネット環境でどれだけのことのできるかを体験させる。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>基本的には、到達目標に同じ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的な指示だけで課題に取り組めるようになった。 2. 課題に対して、「やらされている感」が下がった。 3. 学外の人とのコミュニケーションへの抵抗感が下がった。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>成果は、大学祭でのポスター展示、全クラス合同でのプレゼンテーション大会、最終レポートの作成で形にしている。ポスター展示は来場者アンケートにより、プレゼンテーション大会は教員および学生の観点別評価により評価し、上位のグループは学長より表彰している。また、協力いただいた外部組織に評価をお願いすることもある。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会のしくみや普段知ることのできない部分を体験できる。 ・アンケート調査のための活動が楽しかった。 ・函館市民として函館のことを勉強して、ためになった。 ・自分たちの意思で物事を決めていけるのでやりがいがあった。 <p>(以上、学生の授業評価(平成23年度前期)より)</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>主体的な学修は大学の基本ではあるが、高校までにそうした経験がなかったり、意欲はあっても方法がわからない学生が大多数をしめているのが現実である。こうした入学時の状態から、専門的な研究を行える状態まで引き上げなければ、専門ゼミナールや卒業研究が内容的に成立しえない。そのためには、商学が何を課題とする学問か、どのような方法をとるのかを理解させる必要がある。これは、受け身的な授業では、難しい課題であり、この授業のような体験を重視する方法(アクティブ・ラーニング)を用いる必要がある。</p> <p>一方で、体験型の授業は、課題の与え方、取り組みの指導、学生の関わらせ方、など多くの講義とは違う授業スキルを必要とする。これらについては、教員間で情報を共有し、お互いにノウハウを提供しあう必要がある。クラスは違っても教員もチームで取り組む必要がある。こうした体験型教育のノウハウの蓄積が、大学教育のイノベーションに必須になってくるものと考えている。</p>
<p>授業風景</p>	

情報処理工学実験

(テーマB：回路設計)

福岡工業大学

情報工学部 情報システム工学科
松原裕之

科目の位置づけ	<p>情報処理工学実験では、情報システム工学の専門分野の応用実験を行う。講義などで学んだ知識と理論の理解を深め、それらを実際の問題に応用する能力、デザイン能力、論理的な思考と記述能力、プレゼンテーション能力を身につけることを目的とする。</p>
受講（登録）学生数	<p>約110名。3つのテーマに分けて実施するため、1テーマでは約35名が受講する。</p>
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・必ずしも解が一つとは限らない問題に対して、自発的に創意工夫して解決策を考え、計画的に取り組むことができる。 ・様々な工学知識を問題解決に応用することができる。 ・実験で得られた客観的事実に基づいて論理的な考察を行うことができる。 ・問題設定と解決方法、実験の方法、実験結果と得られた知見を分かりやすく説明することができる。
教育方法の特徴	<p>本実験では会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBLとして実施している。40名弱の履修生が少数精鋭のベンチャー企業の事業部(テーマB事業推進部)の新入社員となり、9週間の学生実験を疑似的なプロジェクトのチームの一員として過ごす。シナリオ上の目的は、配属されたチームごとに消費者が所望する新製品を企画・開発し、他のチームと差別化を行いながら高い売上を目指すことである。8週間後に実施する製品発表会では、各チームが開発した新製品のプレゼンテーションと動作デモを行い、投票で製品宣伝のうまさや製品の完成度を競う。投票結果から算出した製品の売り上げと残業時間を含むチーム全体の人件費などから、各チームの収支を算出する。収支が黒字になればチームは存続し、赤字で終われば倒産しメンバーが路頭に迷う。</p> <p>1チームは原則5名の単位でCPLD開発課のメンバーを構成する。チーム内のメンバーは、リーダー職(課長職)、営業職、技術職、デザイナー職、サポーター職、のいずれかの職を専任または兼任で担当する。チームの一員として9週間の間、担当職種を途中で変更することなく、製品発表会、デザインレビュー、成果物の納品作業、の一連の開発フローをこなす。リーダー職はチーム全体のスケジュールやメンバーの進捗を管理する。営業職は新製品を企画し、最終発表会に向けて、消費者に対してわかりやすい宣伝広報のプレゼンテーション資料を作成する。技術職はCPLD学習ボードに新製品の機能の実装を担当する。サポーター職は新製品のわかりやすい取扱説明書を執筆する。デザイナー職は新製品の実寸大のモックアップや色彩デザインを厚紙や段ボールの加工や彩色で素早く形にする。</p> <p>8週目に製品発表会を行う。各チームが開発した新製品をテレビのCMのようにわかりやすくプレゼンテーションし、新製品の動作デモを行う。全てのチームのプレゼンテ</p>

●専門科目● 会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBL

ーションが終わり次第、各チームのプレゼンテーションの出来、新製品の動作デモの完成度の優劣、を競い一人一人が投票する。投票結果に基づき、各チームの新製品の売上額などの収入、チーム別の人件費等の支出などを収支表を元に算出する。チームが黒字で生き残れたか、それとも赤字でつぶれたか、を判定する。集計結果を発表し、成績の上位チームを表彰する。その後、各チームのリーダーは反省会を実施する。

最終週にあたる9週目では、事業推進部長が各担当職の成果物（納品物に相当する実験レポート）のデザインレビューをチーム単位で一括して実施する。チームとして成果物の不備、例えば、チーム内の各ドキュメントの不整合箇所の指摘し、翌週の実験レポートの提出〆切までに修正や補充すべき箇所や内容をコメントする。

上記の9週間の実験をチームの一員として体験することで、科目の到達目標の4つをクリアする。

教室空間の特徴

1回の実験で40名弱の履修生を収容するために、2か所の実験室を使っている。

1か所目は2プログラミング作業用のパソコン26台を固定式の机に設置し、主にパソコン上の作業を実施する。パソコンを置いていない固定式の机で、厚紙や段ボールの加工作業を行う。

2か所目は、別の階の実験室の固定式の机のパソコンの内、パソコン10台を主にプレゼンテーション用やドキュメンテーション用途の作業を実施する。

特定の回の授業の流れ・時間配分

全9回の内、2, 3, 4, 6, 7回目の授業の流れを説明する。1回の授業は3時間で、13:00から開始する。各週の開始指示はトップダウンである。実験中の具体的な指示内容は、事業推進部長(担当教員)、各チームのリーダー職、各チームの担当、の順で伝言ゲームを行う。これはリーダー職を中間管理職として挟み、チーム内のコミュニケーションの大切さを体験させるためである。

13:05 部課長会議を実施し、事業推進部長職(担当教員)、各チームのリーダー職(7名程度)を集めて、事業推進部長からの今週の作業内容の指示とその質疑応答、先週末までの各チームの進捗や問題点に対してのアドバイス、の2点を伝達する。

13:15 各チームのリーダー職は自分のチームに戻り、チーム内で「課内会議」を開く。チームのメンバーにそれぞれ今週のミッションを伝達する。各担当は着手すべき仕事が理解でき次第、担当の作業に着手する。

13:25-16:00 各担当が担当作業を実施する。

16:00 各担当は1回3時間の作業内容を各チームのリーダー職を経由して、事業推進部長に報告する。手順はまず、各担当は1回3時間の作業が終わり次第、作業内容や進捗を「個人週報」に記入し、リーダー職に提出する。個人週報の報告内容は、今週の作業内容の概要を3行、作業内容を10行、今週の作業時間の内訳、これまでの作業時間(自己申請の残業時間を含む)の累積時間、である。

翌日以降 各リーダー職は各担当の個人週報を参考にしながら、「チーム週報」を作成し、事業推進部長までメールで速報する。報告内容は、チーム全体の作業概要、進捗、問題点、各担当の作業の概要、等である。1週間のチームの実験の完了は、リーダー職がチーム全員の個人週報をクリアファイルに入れて face to face の手渡しで事業推進部長まで報告するまで、である。

●専門科目● 会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBL

<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>実験に必要な実験マニュアル、サンプルプログラム、過去の発表資料、等は学内のイントラネットで公開しており、学生はこれらを参考にプロジェクトを進める。技術職のみ CPLD の開発環境が入ったパソコンを使用する。その他の役職はワード、パワーポイント、エクセルが入ったパソコンがあればよい。デザイナー職は、段ボールや厚紙を使用するため、ハサミ、ノリ、定規、カッターナイフ、等の工作道具を使用する。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>学生一人一人が会社の新人研修やインターンシップを疑似体験でき、チームのメンバーの一員として新製品の商品企画、開発、広報などの仕事を分担しながら、チームとして責任を持って仕事をこなす、一連の流れが体験できた。各担当職の挙げた共通の課題として、コミュニケーション、スケジュール管理、早期のトラブル対応、の3点が重要であると認識ができるようになった。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>1 点目は9週目の修了後に学生がレポートの一つとして提出する「エンジニアリングデザイン報告書」報告内容。 2 点目は9週目の修了後に実施する約20項目の設問からなるアンケートによる定量的な評価結果。</p>
<p>本科目についての 学生からの評価</p>	<p>2011年度3回目の実施回の履修者29名が提出したエンジニアリングデザイン報告書の「本実験を通じた感想」の内、典型的な記述内容を2名分抜粋する。 (リーダー職) 全員がプログラミングを行うわけではなく役割によって行う作業が異なり、お互いをカバーすることが難しかった。そのため自分ができることを徹底的に行い、ほかにも今何ができるのかを考えることが多い実験だったと思う。班ごとに利益を争うという趣旨も面白くできるだけ早い段階でチーム週報を提出し、できるだけ残業を行わないよう、実験の時間内に製品の完成を目指すなどほかの実験にはない要素があり良い経験になった。 (技術職) 技術が他のメンバーと話し合っ実現したい機能や実装が困難な難しい機能について入念な話し合いが必要であり、さらに作業時間は多くならないように綿密なスケジュール管理が求められた。</p>
<p>学生の学習のあり方 や教授法の果たす意味等に関する、 担当者の基本的な 考え方(教育哲学)</p>	<p>著者が分担している本テーマでは、組み込み分野のエンジニアリングデザイン教育に加え、インターンシップの要素を織り込むコンセプトを導入し、就業体験を手軽に実施できるPBLの授業形態を試みてきた。2006年度から開始し既に7年目となったが、当初は典型的な電子情報系の組み込み分野の実験内容を検討していた。履修者全員がCPLD学習ボードにハードウェア記述言語のひとつであるVHDLを用いて仕様を実装し、完成した製品を実験の最終週に発表する。しかしながら著者の個人的なIT関連企業の勤務経験から、情報系出身の学生といえども全員がシステムエンジニアやプログラマーといった開発職になる必要はない。人材は適職や適材適所で活躍する場がたくさんある。技術力よりマネジメント能力やコミュニケーション能力が必要とされる開発リーダー職や技術営業職など、様々な職種から会社の事業が成立していること知って欲しい。本テーマを通じて学生に開発リーダー職や技術営業職など、普段体験することができない役割をインターンシップとして体験させたい。 以上の考えから情報処理工学実験の組み込み分野の回路設計の教育を分担しつつ、イ</p>

●専門科目● 会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBL

インターンシップ制度を取り込んだ形式で2006年度からスタートした。本テーマの実験を履修するだけで企業の疑似的なプロジェクトに参加するインターンシップとなり、複数の職種から選択した一つの職種を6-9週間にわたって体験できるようになった。

本テーマは年に数回のタイミングでインターンシップ制度の実施方法を見直し、実験教材の補充や変更をした。開始3年目にあたる2008年には学科内の外部評価委員会にて企業の勤務経験がある複数の外部評価委員のレビューを受け、インターンシップ制度のコンセプトについて称賛を受け、方向性に確信を持った。本学科のJABEEの継続受審後にあたる2011年度の3回目からエンジニアリングデザイン教育のさらなる充実を図った。本テーマの9週間の実験後の提出レポートに「エンジニアリングデザイン報告書」を追加し、履修者自身が9週間の振り返り学習ができるように改善した。本実験では「JABEEにおけるエンジニアリング・デザイン教育への対応 基本方針」に示された「デザイン教育の観点」との整合性も持たせた。今後もインターンシップ制度の実施方法を見直し、学生の就業力育成能力を高める工夫を施していきたい。

福工大 夢へのトリセツ (実験のイメージ)

<http://www.fit.ac.jp/juken/torisetsu/manabu>

授業風景



実験室での実験風景

●専門科目● 会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できるPBL



その他の特記事項

本件の内容を 2012 年 9 月 6 日の第 11 回情報科学技術フォーラム (FIT2012)において「組み込みシステムのエンジニアリングデザイン教育の試み」の題目で発表した。

生活環境学特別講義

文化学園大学

大学院生活環境学研究科

田村照子 他

科目の位置づけ	<p>生活環境学研究科被服学専攻、同生活環境学専攻共通の選択科目（2単位）として開講した。</p>
受講（登録）学生数	<p>17人</p>
科目の到達目標	<p>大学院生の研究の基礎を拡大するために分野横断型の講義を行い、討議を通じて方法論の広がりを目指す。生活環境を取り巻く多分野の国内外の現状を理解し、柔軟な思考力と応用力を養成すべく、各専門分野からご提言いただいている。</p>
教育方法の特徴	<p>大学院では学生の研究テーマを中心とする比較的狭い専門分野に学習が集中しがちであるが、現代社会においては、より多面的に物事を捉えることのできる人材が求められる。本講義は学内外の講師による異文化交流オムニバス授業を通して、学生に生活環境についてさまざまな切り口から考えさせようとするものである。平成23年度は「グローバル化（Glocalization）」をテーマに全16講座開講した。</p> <p>大学院各学年共通科目とし、テーマが毎年変わるため、次年度の再度の履修も可としている。</p>
教室空間の特徴	<p>中規模の講義室で行っており、講師と学生の距離が近い。また、机・イスは可動式であるので、講義室内の形態は講師の講義内容によってフレキシブルに対応可能である。</p> <p>スクリーン等も完備しておりビデオ、DVD、パワーポイント等による講義にも対応した。</p> <p>また、講義内容によっては、場所を変えて行うこともある。（体育館、講堂等）</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>オムニバス授業として、隔週（90分）実施している。平成23年度に実施した講義のうち、特徴的なものを2回分抽出した。</p> <p>1. 「never land」 <講師プロフィール> デザイナー <講義内容> 日本と西欧両方のファッション教育を受け、感じてきた価値観や環境の違い、経験、また、ヨーロッパにおける学校外での活動経験や、ジョン・ガリアーノ等のメゾンでの経験も解説する。世界的なコンテクストから脱線し「never land」化した現在の日本のファッション史にも言及したい。</p> <p>2. 「クリエイティブ・ジャパン＝クールジャパンへの道」 <講師プロフィール> 通商産業大臣秘書官、在英日本国大使館参事官、経済産業省大臣官房参事官、内閣官房参事官等歴任。現在は独立行政法人経済産業研究所の上席研究員。</p>

●講義● 学内外の講師による異文化交流オムニバス授業

	<p><講義内容></p> <p>創造的人材のクリエイティブ・タレントによるイノベーションの創出課題：ライフスタイルの変化、ライフスタイルのブランド化、スマートエリアの形成、グローバル人材の育成等について解説する。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 視覚的資料又は現物の提示を行ない、講義内容の理解を深めることに努めている。 ○ 講義内容によっては、受講者に実体験の機会を与え、共感性を高めることとしている。 ○ 博士後期課程の学生や一般の教員の参加を自由にし、討議・討論の幅を広げている。
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>自身の専攻・研究テーマにのみ埋没することなく広い視点から柔軟に思考し、オリジナリティー溢れる研究論文を書き上げることに繋がっている。</p> <p>また、身の回りの生活環境について、問題意識を持つようになった。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>授業終了後、大学院生対象に行うアンケート等によって、測定している。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>自身の所属する専攻以外の大学院教員のみならず、学内（大学学部担当教員）、他大学（国外も含む）の教員、また、ファッションデザイナー、NGO 関係者、画廊主催者等、幅広い講師による授業は、例年、学生から高い評価を得ている。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方 (教育哲学)</p>	<p>担当者の一方的な講義だけでなく、学生参加型の教授法を採用し、担当者—学生間の双方向型で授業内容の把握を、より容易にする方法をとっている。</p>

実習 I 区分IV

—薬剤師実務体験実習—

北海道薬科大学

薬学部薬学科

村上美穂、遠藤菊太郎、牧野高壮、野呂瀬崇彦、藤本哲也、守屋寛之、伊藤三佳

<p>科目の位置づけ</p>	<p>北海道薬科大学は1学年定員210名、薬学部薬学科のみの単科大学であり、平成49年開学以来延べ6000名以上の卒業生を輩出している。平成15年より臨床薬学教育を志向したカリキュラム改革により平成18年より施行された6年制教育にスムーズに移行できたものの、少子高齢化および薬学部の乱立に伴う入学者層の変化は著しく、初年次の教育体制の見直しが迫られていた。この状況に対応するため、平成21年度より、1年次前期に「ラーニングスキル」（必修30時間）を開講し、大学における学習方法の習得やレポート作成スキル、コミュニケーションスキル、情報リテラシー等について学習する機会を提供している。また、後期には専門基礎教育を絡めた「薬剤師実務体験実習」（必修30時間/10日間）を開講している。本実習は、薬剤師の実務において必要とされる計算能力、コミュニケーション能力を身につけるとともに、これらの能力が実務上どのように意味づけされるのかを体験を通じて学ぶことを目的としている。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>220名（必修）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 処方せんを見て、% (w/v, w/w, v/v)、mg/mL、molなどの濃度計算に基づき、必要な秤取量の計算ができる。（知識、技能） 2 添付文書などの情報から年齢、体重、体表面積など、患者の状態による適切な投与量を計算し、処方进行评估できる。（知識、技能） 3 規定濃度、pHおよび浸透圧の計算により、製剤を調製するために必要な医薬品および試薬の量を求めることができる。（知識、技能） 4 患者の栄養状態の評価に用いる項目を計算し、患者の栄養状態に基づき処方进行评估できる。（知識、技能） 5 サポートされる側の心理を踏まえ、処方せん受付場面において、患者に対し適切な言葉遣い、態度で接することができる。（技能、態度）
<p>教育方法の特徴</p>	<p>本実習では、学習項目として「散剤調剤」「液剤調剤」「輸液調製」「栄養計算」「コミュニケーション」の5ユニットを掲げ、このうち「栄養計算」および「コミュニケーション」を除く3ユニットは計算演習と実務体験実習を組み合わせ実施している。本実習において扱う薬学計算は、処方箋に基づく秤量計算や濃度計算、浸透圧計算等、高校レベルの化学を習得していれば十分に対応可能なものではあるが、学生により理解度に大きな隔たりがあり、大教室スタイルの講義では対応は困難である。そこで計算演習においてTeam Based Learning (TBL) を導入することにより、予習および演習時間内の相互学習による計算能力の底上げを図っている。さらに計算演習に続いて実施される薬剤師実務体験（散剤調剤、液剤調剤、無菌室における輸液の調製等）により、自分たちが</p>

● 専門基礎科目 ● Team Based Learning を導入した計算演習

習得した薬学計算技術やその背景となる化学、生物学、物理学の知識が、薬剤師実務とどのように結びつくのかを理解できるように構成している。

※Team Based Learning

1970年代に米国オクラホマ大学ビジネススクールで開発されたチーム学習法。授業前の予習フェーズ1)、授業時間内の小テストおよびグループ学習、解説フェーズ2)、応用学習（フェーズ3）より構成される。チーム学習により幅広い学力層のクラスにも大教室で対応できるとともに、予習確認テストや相互評価など、学生が主体的に学習に参加できる工夫が組み込まれた学習メソッドである。米国では広く経営、基礎科学、医学教育に取り入れられており、近年我が国でも医療者教育に導入されつつある。

教室空間の特徴

1 学年約 220 名を 21～22 名/班×10 班にわけ、さらに一班に 5～6 名/グループ×4 グループ形成し学習単位としている。

<計算演習 (TBL) >

各班は中規模演習室にてグループ毎の島に着席し、自習内容確認のための小テストおよびグループディスカッション（フェーズ2）を行う。

<実務体験実習>

「散剤調剤」「液剤調剤」については実験室にて、「輸液調製」については模擬無菌室にて行う。模擬無菌室は臨床教育にも用いられる教室であり、医療機関に設置しているものと同様の施設、設備を有しているため、よりリアルな体験が可能となる。

特定の回の授業の流れ・時間配分

以下に、「散剤調剤」のユニットについて授業の流れを示す。

<該当授業一週間前>

次回授業のための自習用資料（散剤調剤に関する資料および例題）を配付

<1日目：計算演習>・・・180分

1. 予習確認テスト（個別テスト）・・・60分

(1) テスト実施（終了後解答用紙のみ回収）

(2) グループ内で同問題についてディスカッション（この間教員は個別テスト採点）

(3) 採点集計結果公表、答え合わせ、グループ内で教え合い

(4) 質疑応答、解説

2. グループテスト・・・90分

(1) テスト実施（各自担当部分解答、解答用紙回収）

(2) グループ内で問題についてディスカッション（グループテスト採点）

(3) 採点集計結果公表、答え合わせ、グループ内で教え合い

(4) 質疑応答、解説

3. 手洗いの意義、目的・・・30分

<2日目：実務体験実習>・・・180分

1. 調剤用具の使い方・・・15分

2. 処方箋に基づき調剤体験・・・120分

(1) 各課題に基づき計算、散剤調剤（各自）

(2) グループ内で調剤済み薬、計算書を受け取り、鑑査（各自）

(3) 答え合わせ

(4) グループ内で教え合い

(5) 質疑応答、解説

3. グループ内相互フィードバック・・・30分

●専門基礎科目● Team Based Learning を導入した計算演習

	<p>4. 次ユニットの課題配付、説明・・・15分 相互評価シート記入（最終回のみ）</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>本授業の実施にあたっては特殊なツールは利用していない。 但し、今後の課題としてクリッカーを用いた解答集計、共有、WEBシステムを利用した相互評価システムの構築を検討している。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>本実習を通して学生は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤師実務に必要な計算能力 ・薬剤師実務における基礎科目の知識の応用方法 ・グループディスカッションを通じた協働作業の重要性、コミュニケーション能力を習得している。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>本実習の評価は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各ユニットの個人、グループテストの結果 ・教員による実習態度の観察 ・学習態度に関する学生間相互評価（自己評価を含む） <p>を元を実施している。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>平成23年度後期授業アンケートより、本科目について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約80%の学生が「本科目に積極的に取り組んだ」「新たな興味や問題意識を持つことができた」「総合的に満足している」と回答した。 ・自由回答欄より、本授業が良かった点として「苦手な計算問題をたくさんできてよかった」「みんなまじめに取り組んでいたところ」「実際に手を動かしてやる作業なのでとても印象が強かった」「少人数ずつのグループでの取り組みは、自分の責任が大きくなるので真剣に取り組めて、良かったと思います」「薬剤師の業務の一端を窺い知ることが出来たのでそれだけで大きな収穫です。また、慣れ親しんだと思っていた物理や化学などの教科が、薬剤師の視点だと随分違うように見えたのも驚きでした」等のコメントが見られた。 <p>また意識面でも、「実際に薬剤師の散剤・液剤・注射剤などの調剤実習をやってみることで、薬剤師がどのようなことをしていくのかがわかり、モチベーションが上がった」「実際に調剤などを通して、薬剤師の職務に対する意識が高まった」「薬剤師になりたいという気持ちが一層強くなりました」「一年生の時点でこの授業があったおかげでどんな薬剤師になりたいか意識するようになった」等、薬剤師になるためのモチベーションの向上に寄与していることが示唆された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一方、改善点として「仕方ないことではあると思うけれどやる気が無い人と同じ班になると進行に支障が出た」「班の中で、何もしていない人や寝ている人がいたのが気になりました」「予習をしないで実習を受ける人がいます。同じグループで予習をしてきている人間としては努力をしていない人間に足を引っ張られるグループテストは迷惑でしかありません。すぐに廃止してください。」「フィードバックで評価がつけられる点。」等、学習者の参加態度のバラつきや相互評価についてのコメントが見られた。この点が今後の改善のポイントとなると考える。

●専門基礎科目● Team Based Learning を導入した計算演習**学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)**

本授業は「体験学習」「協働学習」の考え方に基づき構成されている。学生は計算演習を通じて基本的な計算スキルを学ぶが、それは机上の理論ではなく、実務体験実習を通じて薬剤師業務に必要なスキルの一部として認識される。さらに、これらの計算スキルの背景にある化学、生物、数学などの基礎科目の知識が薬剤師業務と有機的につながることを期待している。また、授業プロセスにおいてTBLを取り入れることにより相互学習やチームワークの重要性を理解することもねらいの一つである。

本来であれば、学生の興味や学習意欲等の「内発的動機付け」に基づく学習方法（PBL等）が理想的だが、低学年次であり、基礎学力や学習意欲にバラつきが見られるこの時期の学生においては、テストや相互評価といった外発的動機付けの要素を取り入れたTBLが有効であると判断して、同学習法を採用している。

●実習● 具体的な事実から遡って、理論的な枠組みに迫っていく「帰納的な教育手法」

健康運動指導現場実習 I (補助実習)

II (指導実習)

松本大学

人間健康学部 / スポーツ健康学科

根本賢一、田邊愛子

科目の位置づけ	<p>健康運動指導士の資格取得を目指す学生には、その受験資格を取得するための必修科目として位置付けられている。</p>
受講（登録）学生数	<p>健康運動指導現場実習 I (26名)、健康運動指導現場実習 II (31名)</p>
科目の到達目標	<p>地域社会において、健康づくりを指導するための処方箋を書ける能力（健康運動指導士）を身に付ける。個別運動指導や集団としての被指導者を対象として、具体的な運動指導現場でいかに効率よく継続的な運動実践へと導くことが出来るか、経験を積み重ね教員の手助けが無くとも指導できるだけの技量を身に付けることを到達目標としている。</p>
教育方法の特徴	<p>机上での人体の特徴、疾病に関する学びなどが展開されている。こうした基礎的な学習を一通り終えて、実際に運動指導を求めている高齢者に向かって、健康になるために何が必要か、どうすれば良いのかなどを具体的に説明する訓練の場となる。</p> <p>地域住民の側からすれば、指導教員が付き添っているとはいえ半ばモルモットのような役割でもあるが、すでに新聞紙上などでもよく紹介されているので、安心して指導されている。そればかりではなく、若い世代との会話を楽しむなど、学生にとっては運動指導実習だけではなく、異質とのコミュニケーション、異質へのプレゼンテーションの訓練の場ともなっている。疑問に答えられない場合には、大学へ戻って学習し後日丁寧な手紙に認めて、返事を出すなどしており、学生のやる気を大いに引き出す教育になっている。</p>
教室空間の特徴	<p>学内での授業は体育館で実施されたり、晴天の日には野外で行われることもある。しかし、地域社会に出かけて行われる実習の場合は、その行政単位で用意されているひろばや施設内、あるいは野外のウォーキングコースなど多様である。</p> <p>グループ化された学生が、平均的には約30名程度の参加者を相手に、運動指導を実施している。中高齢者は、年齢的には孫のような学生に気軽に分からない点を尋ねるなど、いつも明るい雰囲気が漂う空間になっている。</p>
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>健康運動現場指導実習 I (根本賢一)</p> <p>① ガイダンス、指導者としての心構え、②健康づくりと運動プログラム、③運動指導計画</p> <p>④運動プログラム作成演習、⑤運動指導の安全対策、⑥運動指導における相談面接技法、⑦介護予防に関する体力測定の実習、⑧評価方法と運動処方、⑨現場実習（カウンセリング及び体力測定）、⑩現場実習（ストレッチング）、⑪現場実習（ウォーキング、ジョ</p>

●実習● 具体的な事実から遡って、理論的な枠組みに迫っていく「帰納的な教育手法」

	<p>ギング)、 ⑫現場実習 (自重負荷トレーニング)、⑬現場実習 (マシン筋力トレーニング)、⑭指導体験発表、⑮授業全体のまとめ 健康運動現場実習Ⅱ (田邊愛子) ① 授業ガイダンス、②授業計画 (マナーと現場実習での注意点)、③現場実習 (健康相談体験)、④現場実習 (健康相談基礎)、⑤現場実習 (健康相談応用)、⑥現場実習 (指導案を考え現場での取り組み姿勢について考える)、⑦現場実習 (ウォーキング講座の理解と発展)、⑧現場実習 (1)、⑨現場実習 (2)、⑩現場実習 (3)、⑪現場実習 (まとめ 健康相談について)、⑫現場実習 (まとめ 実技指導について)、⑬現場実習 (課題の纏め)、⑭各実習のまとめ、⑮全体のまとめ</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>ツール：血圧計、体組成計 中高齢者が安全に運動トレーニングを実施する上で、血圧値、安静時心拍数、体重、体脂肪率をチェックすることは欠かせない。また、健康づくりを支援する指導者を目指す者にとって血圧高値や肥満などのリスク保有者に対しての的確なアドバイスが出来ることも重要な能力になる。 ツール：活動量計 中高齢者に日常から活動量計を装着してもらい、日々の歩数及び消費カロリーを計測する。授業時にこのデータをもとに、参加者に運動量を増加または減少すべきなどのアドバイスを行う。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>これまで積み上げてきている運動指導の基礎知識 (健康運動実践指導者の資格取得を含む) を活かして、具体的に地域住民の高齢者を対象として、運動処方を対象者毎に示すことができるようになる。また、時間経過に伴って、その処方に基づいて運動を行った結果がどのように体質の改善に役立っているのか、不足している部分はなにか等、すでに社会に出て立派に指導者として認められるような領域に達することが出来ている。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>実際の健康運動指導士が、その資質、能力を开花させているかどうかは、指導された方々の体重、血圧、血糖値、体脂肪率、BMI 値などの変化に数字で表れてくる。また、そうした指示通りの運動が継続されているかどうかは、学生の中高齢者に対する説明能力だけでなく、指導者としての魅力など人間性にも大きく関係してくるので、こうした面からも地域の方々の暗黙の内の「評価」によって学生が評価されている。 幸いなことに、本学学生の地域社会における評価はすこぶる高い。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>地域の方々から指摘される一つ一つのことが、自分の健康運動指導士としての成長に繋がっていると感じており、本科目に対する評価は高い。 また、地域の方々から誉められたり、喜びを表現していただけることで、学生がなんとはない不安を持ちながら行ってきた指導に対して、大きな自信を身に付けることが出来ているようで、こういう視点からの評価も高い。</p>

●実習● 具体的な事実から遡って、理論的な枠組みに迫っていく「帰納的な教育手法」

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

座学で人間の体、スポーツ医学、栄養とスポーツなど多くの事を学んでいる。しかしこうした理論的な知識だけでは、現実に求められている健康づくりの指導はとてもできない。現場感覚に裏付けられた、問題意識や課題意識が具体的な指導実習の場で、地域の方々から触発される。

このような具体的な事実(映像文化的)から遡って、理論的な枠組み(文字文化的)に迫っていくという、松本大学が志向している「帰納的な教育手法」が、現在の活字離れしてしまった学生にはどうしても必要になってきていると感じている。

この実習もその流れの中で、重要な意味合いを持っている。しかし、これは未熟な学生を受け入れ、教員と共に育ててあげようという姿勢を持った地域社会が大学の周りに存在するからこそ実施できる教育手法である。コミュニティが崩壊してしまったような地域ではとても真似できない、松本大学ならではの恵まれた教育環境がなせる業でもある。

池ノ平ホテルでの現場実習の様子(1)



授業風景

市での運動指導現場実習の様子(2)

大学内のトレーニング室で個々の高齢者に対して、運動処方の内容を話している様子



その他の特記事項

松本市、諏訪市、塩尻市、安曇野市、大町市、南箕輪村、筑北村など(以上長野県)、宮津市(京都府)など行政と連携して、高齢化が進む地域社会において、健康づくりの実践活動を数多く手掛けている。また、企業(病院、福祉施設、ホテル)との提携も進んでおり、学生が健康づくりの指導者と言うことでそうした企業にもスキルを持った職員として評価され、採用されている。

薬学入門 I

名城大学

薬学部薬学科

飯田耕太郎

<p>科目の位置づけ</p>	<p>薬剤師を志す新入生のための初年次教育として前期必修で開講する。6年制薬学では薬剤師が人の命に関わる職業であることを自覚し、それに相応しい技能、態度を身につけていくための欠かせない教育として位置づけられている。医療や社会における薬剤師の職能と役割を理解することで入学直後から自分の将来について考えキャリア意識を醸成する科目となる。</p> <p>本科目の成果は6年制薬学の根幹となり、医療への貢献を目的とした5年次の実務実習（学外研修）での基盤となる。</p>
<p>受講（登録）学生数</p>	<p>1年生 255名（平成23年度）</p>
<p>科目の到達目標</p>	<p>医療や薬剤師が関わる課題を学生達が主体的に学ぶことができる。学生に主体性を持たせて学生同士で意見交流や教え合い、学び合いを通じて考える力や話す・聴く力を育てることができる。グループディスカッションによる対話型学習を通じて多様な考え方を知り自らの価値観や将来の方向性を考え、学習への動機や目的意識を形成することができる。</p>
<p>教育方法の特徴</p>	<p>教員主体の「教える」から学習者主体の「学ぶ」へ変革するために「準備講義」「自己学習」「グループ学習」「学習発表・まとめ講義」という一連の授業を設け学生参加型授業、課題解決型学習などのアクティブラーニングの技法を積極的に取り入れた。学習意欲を引き出すために専門家による「準備講義」で学びの動機づけを高めた後、関連した資料を基に「自己学習」し、読む力、書く力を引き出す。同じ課題を「グループ学習」で学び合い、考える力や話す・聴く力を育てる。「学習発表」では協力して学習内容を整理・加工し、まとめながらパワーポイントを作成して発表するなどの課題解決能力をつける。</p> <p>アイデアを出して発表内容を工夫し、質疑応答できるように主体的な学習が促進する。質疑応答で出た様々な疑問点・討議内容について「まとめ講義」で補完することで理解が深まり記憶が促進する。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>準備講義・学習発表会・まとめ講義は多人数教室（300人、スライド映写）で行いグループごとに着席する。個人学習（調査・情報収集・レポート）はパソコン教室（150人、スライド映写）にグループで着席する。グループ学習は3つの少人数（50人）教室を使い、1グループ7～8名の可動式机とホワイトボードで実施した。ホワイトボードで仕切ることで討議している様子や学生の顔が見えなくなることを避けるよう心がけた。</p>

●専門科目● 学生参加型授業、課題解決型学習

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>1つの課題を準備講義（90分）、資料読解・自己学習（90分）、グループ学習（60分）・グループレポート作成（30分）、学習発表（発表10分・質問10分×3グループ）・まとめ講義（10分×3グループ）の4コマで構成した。医療と薬剤師の職能へ興味関心を高めるために現場の専門家から社会の現状など概略を聴く（準備講義）。自己学習はWeb Classに掲示した資料（A4：2枚程度）を読み、資料の疑問点について調査、情報収集し、基礎知識をつけた後、協同学習のツールである「LTD過程プラン」に従って要点を自分の言葉でまとめレポートに記述する。グループ学習は「LTD過程プラン」に沿って自習内容（レポート）を手がかりに話し合いを通して学び合い課題の理解を深める。</p> <p>話し合いで理解が深まった後に、内容をグループレポートにまとめる。学習発表するグループは学習内容を整理・加工し、パワーポイントを作成する。分かりやすい発表にするためアイデアを出して発表内容を工夫し、発表の練習や質問に答えられるように主体的な学習を行う。全員で学習発表を行った後、クラス全体で疑問点やグループの討議内容について意見交換を行い、質疑応答で多様な見方・考え方を知る。</p> <p>まとめ講義では質疑応答で出た疑問点を専門家が詳しく解説することで更に理解を深める。4コマ×7課題を通じて医療や薬剤師に関わる課題を主体的に学習するとともに自分の価値観や将来について考える機会となる。1週間で2コマ（90分×2）を15週（合計30コマ）で実施した。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>LTD学習法の「LTD過程プラン」をグループ学習、個人学習に活用している。LTDとはLearning Through Discussionの略で、話し合い学習法と呼ばれる協同学習の一技法である（参考：実践・LTD話し合い学習法，安永 悟）。課題の理解を深め学習スキルを獲得するために個人学習（予習）もグループ学習もLTD過程プランに沿って行う。LTD過程プランは「導入、語彙の理解、主張の理解、話題の理解、知識の統合、知識の適用、課題の評価、活動の評価」の8ステップで構成される。グループ学習には時間制限（60分）を設けているが個人学習に時間制限はなく多くの時間をかけることを薦めている。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>課題について自分で考え自分の言葉でまとめ発言できる。他者の意見を聴きくことで様々な考え方や見方があることを理解し、多様な価値観があることを知り自分の視野を広げることができる。グループ学習を通して他者から教わり理解不足に気づき生まれる。自分が知っている事を伝えることで自己の理解度を見直す機会となり学びの幅を広げることができる。自己学習やグループ学習の過程で自分の興味関心を自己分析し、価値観を形成することで自分の将来について考える能力を身に付けることができる。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>準備学習、自己学習、グループ学習、まとめ学習は出席（遅刻）状況および学習態度を3段階で評価した。課題レポートは提出状況と内容を3段階で評価した。学習発表（質疑応答含む）状態とその内容は学生同士で評価するために事前に相互評価票を配布して5段階で評価し、各クラスで最も評価が高いグループを優秀発表グループとして評価した。</p> <p>本科目に対する受講者の評価は毎年教科方針、学習内容、授業満足度等について5段階でアンケートを行い、同時に良かった点、改善点・要望は無記名で自由記載させ、次年度の改善の参考として活用している。</p>

●専門科目● 学生参加型授業、課題解決型学習

本科目についての 学生からの評価

本科目の教科方針、学習内容、授業満足度等について概ね高い評価が得られている。薬学部の初年次教育として、医療や薬剤師に関わる社会問題を取り上げ自己学習、グループ活動を通じて理解を深めることについて、「医療に関する社会問題の理解が深まり有意義だった」「グループで意見を出し合い学び合う事で考え方・見方の幅が広がった」「薬剤師の社会での活動が詳しく分かりモチベーションが上がった」などの自由記載が多く見られた。

学生の学習のあり方 や教授法の果たす意 味等に関する、担当 者の基本的な考え方 (教育哲学)

医療人として社会に貢献する薬剤師を輩出するために、社会に適応する能力を養うことが大切である。自分と向き合い自己分析した上で、自分の将来についてしっかり考えることで動機や目的意識が形成され自立心や自律していける力を育てることができる。社会に適応する能力を養うために、主体性を持たせて自らの思考を促進する課題解決型学習などアクティブラーニングで達成感や充実感を味わい、鼓舞することで自信を持たせることが重要である。

授 業 風 景



自己学習



グループ学習



グループ学習



学習発表

その他の特記事項

学習課題 ①薬害被害者の声を聞き、薬害の根絶に向けて努力するという意識を育てる。②患者の基本的権利と自己決定権の尊重：インフォームドコンセントを理解する。③救急医療の現状を知り救急医療における倫理的問題について討議する。④生命の尊厳：生と死に関わる倫理的課題の概略を理解し、問題点を討議する。⑤違法薬物の乱用による健康への影響を学び、薬剤師による薬物乱用防止活動を理解する。⑥医療の担い手として社会のニーズに目を向ける：薬剤師の社会的使命について討議する。⑦地域医療での薬剤師の役割を考える：薬剤師が職能を発揮するために在宅医療に関わる意義を討議する。

薬の発見・発明

明治薬科大学

薬学部生命創薬科学科

阿刀田英子、小山清隆、菱沼滋、杉山重夫、杉田隆、高取和彦、花田和彦、林賢

科目の位置づけ	<p>将来、創造的な薬学研究者・技術者として幅広く活躍できる人材となるために、自主的な情報収集と討議を通して問題解決を図る習慣とプレゼンテーション能力を育成することを目的とする。生命創薬科学科のディプロマポリシーに対して重要な位置を占める科目といえる。</p>
受講（登録）学生数	<p>71名（平成23年度）</p>
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) テーマ薬に関する情報収集ができる。 2) 収集した情報をまとめ、資料を作成できる。 3) 資料を使って、プレゼンテーションができる。 4) 薬の発見について具体例をあげて説明できる。
教育方法の特徴	<p>上級学年、大学院、及び就職してからも、プレゼンテーション能力は必要不可欠なものである。プレゼンテーションに必要な、調べ、まとめ、発表するという一連の項目のやり方を身につけさせる事を目標としている。同時に生命創薬科学科1年生ということもあり、薬はどのように発見され、創薬されたかも学ぶ。</p> <p>質疑応答に関しては、他の学生の発表を聞き、発表者が何を言いたいのかを把握し、疑問に思うところを発表者に分かりやすく質問する、という能力や、質問された場合、発表者は質問者が何を質問しているのかを的確に把握し、分かりやすく答える、という能力を培うことも目標としている。</p> <p>ただし1年生であることから、第一クールは教員が調査やまとめの段階から積極的にサポートする事が必要となってくる。第一クールでの経験を生かして、第二クールを行うので、教員は第二クールにおける調査では、学生から質問があったときのみ応える。発表、質疑応答も同様に教員は必要最小限の介入（主に司会進行）としている。従って第二クールは学生の学生による学生のための授業となる（学生の自主性を育てる）。</p>
教室空間の特徴	<p>平成23年度は1班4～5名で合計16班。1教室8班で2教室使用（2教室とも教員3名ずつ配置）。ただし下記「授業の流れ・時間配分」に記載したスケジュールのうち、第1回、第8回、第15回は1教室に学生、教員全員集合。</p> <p>教室の広さは95㎡で定員66名、1教室に集合する場合は154㎡で定員150名の教室を使用する。設備は、プレゼンテーションを行なうために、プロジェクター、スクリーン、複数マイク等を含む最新のマルチメディアシステムを備えている。机は可動式でキャスター付のものを使用し、班別で授業を進めるのに適している。（ただし150名教室の机は固定式）</p>

●素養科目● 調べ、まとめ、発表を通じたプレゼンテーション

<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>第一クール 第1回 授業進行の説明。各班のテーマ薬の決定 第2回、3回 調査 第4回 調査、まとめ 第5回 教員とともに、発表内容およびスライドに関して最終チェック 第6回、7回 発表会 第8回 宿題提出、教員による発表に関する総括とアドバイス 第二クール 第9回 テーマ薬の決定、調査 第10回、11回 調査 第12回 調査、まとめ 第13回、14回 発表会 第15回 宿題提出、教員による発表に関する総括とアドバイス</p> <p>発表は各班 12 分、質疑応答 3 分。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>インターネット、各種教科書、専門書、パワーポイント</p> <p>「調査」において、インターネット、教科書、専門書を使用している。1年生ということもあり、調査中、分からない事がある場合、教科書（高学年の教科書は図書館の書籍を利用）を調べ、それでも理解できない場合、教員（調査中は3名の教員が担当）に質問する。教員はそこで、自分で説明したり、教科書や専門書を紹介したりする。</p> <p>「まとめ」、「発表」ではパワーポイントを使用する。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>テーマ薬に関して、歴史、化学的性質、薬効・作用機序、副作用などを教科書、インターネット、専門書を使って調べる事が出来る。</p> <p>また、調べて理解できた情報に関しては、一年生レベルでまとめて、パワーポイントを用いて発表用資料作りができる。</p> <p>作成資料を使用して発表する事が出来る。</p> <p>他の班の発表を聞き、分からないところを質問する。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>第一クールと第二クールでそれぞれ発表会を行っている。計2回の発表が主な評価対象となる。発表会の評価は、一人の教員が発表者たちの発表のやり方、内容や質問に関する答え方など5項目に関して評価する。また別の教員が、質問者たちの質問のしかた、内容などを評価する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>本学における学生の授業評価アンケートの結果は、毎年良好な結果となっている。昨年度、「この授業を受講したことにより、あなたのこの授業の関連分野または薬学への興味が増したか」という設問に対して、「強くそう思う」、「そう思う」と回答した学生は、全体の80%を超えている。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方 (教育哲学)</p>	<p>学生の学生による学生のための授業を目指す。将来、教員は司会進行、アドバイザー的役割と評価をするくらいにとどめたい。</p> <p>現在、受講者数の面を考えると、講義は、学生にとって受動的教育になっている。実習にしてもグループ実習が主であるため、やる学生とやらない学生が出てしまうのが現状である。従って学生が能動的に実施する授業や実習が必要となってくる。</p>

●素養科目● 調べ、まとめ、発表を通じたプレゼンテーション

「薬の発見・発明」の受講者は毎年 60～70 人（生命創薬科学科 1 年後期）であるので、この教科を能動的授業として行うことにした。基本的に、第一クールと第二クールに分け、両クールとも「テーマ薬の調査、まとめ、発表資料作成、発表」という流れとした。今年度が 7 年目であり、毎年少しずつ授業方法および評価方法を改定して、より良い授業を目指している。例えば、第一クールの発表前に、教員と発表資料の最終チェックをする時間を設けた。また、第一クール発表後に、教員からのより良い発表のアドバイスをする時間（総括とアドバイス）を設けた。昨年度まで、1 グループ 5 人または 6 人であったが、参加に消極的な学生のいることが判明したため、本年度からは基本的に 1 グループ 3 名で行う事とした。学生の人数および参加教員の人数（8 名）から、現在のところ実現は難しいが、将来発表方法などを変えて、最終的には第二クールで、学生一人一人が責任を持って、テーマ薬を調査、まとめ、資料作り、発表を行えるようにしたい。

その他の特記事項

調査、まとめの段階では、学生からの質問に答えるため、各教室に化学系 1 名、生物系 1 名を含む計 3 名の教員を配置している。また発表・評価においては各教室に化学系 2 名、生物系 2 名、計 4 名の教員を配置している。評価も全教員が第一クールか第二クールのどちらか 1 回を必ず担当するようにしており、評価の偏りをなくすように心がけている。

この教科の副次的効果 第一クールで学生と教員が接触する機会が多いことから、学生と教員間の距離が縮まっているように感じられた。

平成 24 年 7 月 20 日

FD ご担当部署 各位

日本私立大学協会 広報部

教育学術新聞

教育学術新聞企画「教授法が大学を変える」へのご参加お願い

前略 日本私立大学協会の機関紙「教育学術新聞」では、各大学の FD の取組を応援すべく、企画「教授法が大学を変える」を実施します。

中央教育審議会大学教育部会の審議まとめでも注目されている、グループワーク、PBL（プロジェクト型学習）、ソーシャルメディアを利用した授業、ワークショップ学習など、学生の学習（学修）を促進させる「アクティブ・ラーニング」の事例を募集し、他大学でも活用できるもの等については教育学術新聞において紹介し、また事例を電子化し、各大学の FD 活動の参考にして頂くものです。

つきましては、各大学より 1 事例を、以下の要領で募集いたします。何卒よろしくお願い致します。

草々

企画「教授法が大学を変える」

アクティブ・ラーニング等で授業を活性化している事例について、**日本私立大学協会会員専用ホームページ (www.shidaikyo.or.jp) にある申込フォーマットにて**、A4 用紙 3 枚以内にまとめて以下のメールアドレスにお送り下さい。募集期間は平成 24 年 8 月 31 日までとします。

応募頂きました事例から、特に他大学にも参考になりそうな興味深い取組について 3 事例を選定し（日本高等教育開発協会に依頼）、教育学術新聞にて紹介させていただきます。

なお、頂いた事例は全てまとめて電子化して日本私立大学協会ホームページに掲載します。各大学の FD 等でお役立て頂ければと思います。ホームページへの掲載を拒否される大学様がありましたら、その旨お伝え下さい。

企画の問い合わせ・応募先

日本私立大学協会広報部 小林 功英

03-3261-7048 koei@shidaikyo.or.jp

日本私立大学協会会員専用ホームページの問い合わせ

日本私立大学協会広報部ホームページ担当 藤館 康治

03-5211-5090 fujitate@shidaikyo.or.jp

参考●申込フォーム

1	機関／学部／学科	
2	担当教員	
3	科目名	
4	科目の種別	
5	科目の位置づけ	
6	受講（登録）学生数	
7	科目の 到達目標	
8	教育方法の特徴	
9	教室空間の特徴	
10	特定の回の授業の流れ・時間配分	

参考●申込フォーム

11	授業で特に使用しているツールとその活用法	
12	学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)	
13	学習成果の評価・測定 の方法	
14	本科目についての学生からの評価	
15	学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)	

参考●申込フォーム

16	<p style="text-align: center;">授 業 風 景 (写真: ない場合は省略可)</p>	
17	<p style="text-align: center;">その他の特記事項</p>	
18	<p style="text-align: center;">連 絡 先 (住所・電話・メールアドレス)</p>	

教授法が大学を変える

日本私立大学協会 教育学術新聞 編集

協力：日本高等教育開発協会

(<http://jaed.jp>)

平成25年3月15日 第1版発行

日本私立大学協会

(<http://www.shidaikyo.or.jp>)

〒102-0073 千代田区九段北4-2-25

TEL 03-3261-7048

FAX 03-3261-0769

担当：広報部 小林

koei@shidaikyo.or.jp